

第11回 2019(令和元)年度

# 子どもノンフィクション文学賞

～見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう～

## 受賞作品集

主催：北九州市 共催：北九州市教育委員会 協賛：日本児童図書出版協会  
後援：朝日学生新聞社 公益社団法人全国学校図書館協議会 公益財団法人海外子女教育振興財団

第11回 子どもノンフィクション文学賞 受賞作品集

2019(令和元)年度

国内外の小中学生の皆さんより  
数多くの応募をいただきました。  
こちらよりお礼申し上げます。

子どもノンフィクション文学賞 🔍

# もくじ

ごあいさつ 北九州市長 北橋健治

選考講習 那須正幹／最相葉月／リリー・フランキー

小学生の部



## 大賞

「二平方メートルの世界で」 前田海音

10

## 佳作

「救える命は必ず救う」

大切な命を守るために働く人たち」 田村萌梨

15

「信念を繋ぐもの」 日高実生

24

選考委員特別賞

那須正幹賞

「アゲハチョウは

どこからやってきたのか？」 遠藤光之佑

33

最相葉月賞

「つばめのピト」 井平夏鈴

38

リリー・フランキー賞

「ミャンマーで知ったトイレの違い」 増山優雨

42

中学生の部



## 大賞

「広島のある女子中学生の

昭和二十年八月六日からの足跡」 酒井淳一郎

45

## 佳作

「見えない光のその向こう」

(全盲のセーラー岩本光弘さんと私の1年間)

「病氣と闘う私自身への応援歌」 座間耀永

68

「四国鉄道紀行

西条・松山・宇和島編」 田中惣真

88

選考委員特別賞

那須正幹賞

「かるたの世界に魅せられて」 田村綾梨

102

最相葉月賞

「今を生きる

―ト라우マからの脱出―」 熊田和真

114

リリー・フランキー賞

「出会い」 新池谷悠

119

資料

資料

小学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品

資料

資料

中学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品

資料

資料

応募結果

136

135

134

119

114

102

88

68

45

42

38

33

24

15

10

4

2

# 第11回子どもノンフィクション文学賞



北九州市長

北橋 健治

られました。

応募された作品の中から、厳正な選考を経て、小学生の部は前田海音さんの「二平方メートルの世界で」、中学生の部は酒井淳一郎さんの「広島のある女子中学生の昭和20年8月6日からの足跡」が大賞に決定されました。また、10名の方の作品が佳作、選考委員特別賞に選ばれました。入賞された作品はもちろん、いずれの作品も素晴らしく、選考委員の皆様も選考には大変なご苦労をされたことと思います。

さらに、この文学賞に特に熱心に取り組んでいただいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、LCA国際小学校、寝屋川市立第五小学校、福岡雙葉小学校、お茶の水女子大学附属中学校、鳥取大学附属中学校、文化学園大学杉並中学校に決定されました。先生方のご指導、ご協力に感謝申し上げます。

さて、今年、本市では、「東アジア文化都市2020北九州」を開催します。中国・揚州市、韓国・順天市とともに、多彩な文化芸術イベント等を実施し、東アジア域

第11回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

この文学賞は、子どもたちがノンフィクションを書くことを通して、人間や社会への関心を持ち、自ら考える力を高めていくきっかけとなることと、先人たちが築いてきた豊かな文芸土壌が受け継がれることを願い、平成21年度に創設いたしました。

11回目を迎える今回は、国内外から、小学生の部375編、中学生の部309編の合計684編の作品が寄せ

内の相互理解や多様な文化の国際発信を図ってまいります。

そして、これを契機に、「創造都市・北九州」として、アジアの国々との絆を深め、地域の文化を生かした創造的な街づくりをさらに進めてまいります。引き続き、多彩な文化に触れる機会を通して、豊かな感性を持つ子どもたちを育んでまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、選考委員、学校関係者の皆様をはじめ、コンクール実施に当たりご尽力いただいた関係の皆様にご厚く御礼を申し上げますとともに、この文学賞に挑戦してくれました子どもたちの中から、将来、すばらしい作家が生まれてくることを、心から期待しています。

## 力作ぞろいの喜び

児童文学作家・日本児童文学者協会評議員

那須 正幹



1942年生まれ。児童文学作家。主な作品に、1978年発表の『それいけゴキウ組』をはじめとする『ゴキウ組』シリーズ(巖谷小波賞)があり、2004年末の完結まで50巻に達した。2005年からは、『ゴキウ組』シリーズを生かすのべースで刊行。2015年末に最終巻として、『ゴキウ組』シリーズを刊行し、シリーズを閉じた。ほかにも、『おんどの神さま』『さき師たちの空』『路傍の石』『文学賞』『絵本読む広島の歴史』など多数。

今回は小学生、中学生ともに力作が多く、選考に嬉しい苦勞をさせられた。

小学生の部で大賞を獲得した『二平方メートルの世界』は、幼い頃から難病のために何度も入院退院を繰り返している筆者が、闘病生活のむなしさや、病気に対する不安などを率直に書いている、そんな彼女が、あるとき病室のテーブルの裏に書かれた大勢の小児患者たちの落書きを見つける。落書きはこの部屋に入るだろう患者に向けての励ましのメッセージだった。落書きを読んだ筆者は、難病と前向きに戦う決意をする。

三年生ながら筆力も十分だし、ストーリー性もある。

の』は、筆者の素朴な疑問から生まれた作品だった。

高層マンションに住む筆者のベランダに、ある朝アゲハチョウが羽を休めていた。こんな高所にどうやって飛んできたのか。もしかすると学校から持ち帰ったハウセンカの植木鉢に蛹があったのかもしれないと、探すけれど、見つからない。いままじ調査の範囲を広げ、マンション付近のアゲハの食草を探せば、面白い結論が見えたかもしれないが、筆者の素朴な疑問は大切にしたい。

中学生の部も、力作が多かった。

大賞の『広島のある女子中学生の昭和20年8月6日からの足跡』は、筆者が戦争について知りたいと思ひ、近所の施設に入所している女性から、被爆体験を聞き取り、筆者の感想も交えながら五十枚の大作にまとめ上げていた。これも選者三名がAを付けた作品である。被爆女性は当時市内の学校に通い、当日は爆心地付近の建物疎開に従事していた。全身大やけどを負いながら、何とか逃げ延びることができた。しかし勤めに出ていた両親は、行方不明のまま。おじさんの家に厄介になり、生死

により闘病生活の大変さが読者にひしひしと伝わってくるし、結末のエピソードも効果的だ。選者三名がこぞってAをつけた作品である。

佳作二編の内『救える命は必ず救う 大切な命を守るために働く人たち』は、ドクターヘリに乗務する医師や関係者から重篤な患者をいかにして病院に運ぶかについて、丁寧な取材を重ねている。スタッフたちの生の言葉が聴けたことが、作品の厚みを増していた。

同じく佳作に選んだ『信念を繋ぐもの』は、足尾鉾山鉾毒公害に生涯をかけた田中正造について、資料を調べたり、現地を取材して、克明に記述していた。本コンクールの意図にぴったりの作品といえる。

本年度の最終選考に残った作品は、三、四年生が多かったのは偶然かもしれないが、一、二年生や五、六年生の作品が少ないのは、少し気になった。特に一年生や二年生といった低学年児童の、素直な驚きや新鮮な感動をモチーフにした作品を読みたいものである。その意味で選者賞に推した『アゲハチョウはどこからやってきた

の境をさまよいながら、命を取り留める。両親はおそらく被爆死しているのだろうが、遺骨さえ見つからない。

選者も三歳のとき広島で被爆しているの、女性の体験談もさることながら、これを最後まで聞き書きした筆者の情熱に感動した。

佳作に選んだ『四国鉄道紀行 西条、松山、宇和島編』は、鉄道マニアでなければ書けないだろううんちくが随所に挿入されていて、そのマニアックぶりに感心したし、なにより鉄道が好きで好きでたまらないのが良かった。

同『見えない光のその向こう(全盲のセーラー岩本光弘さんと私の一年間)―病氣と闘う私自身への応援歌―』は、太平洋横断を果たした岩本氏にあこがれ、彼に出会ってヨット知識だけでなく、人生の過ごし方も教授される。ちなみにこの作者は昨年小学生の部で大賞受賞者。

選者賞には『かるたの世界に魅せられて』を推した。かるた競技だけでなく、百人一首の作者についても調べが行き届いていた。

# 対象とまっすぐ向き合う

ノンフィクションライター 最相 葉月



1963年生まれ。1997年「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、2007年「星屑」で小学館ノンフィクション大賞、2017年「星屑」で小学館ノンフィクション大賞を受賞。他の著作に「青いバラ」「ピントエッジ」「セラピスト」がある。「ナクネ」中国朝鮮族の友と日本「理系」の生き方「船医のはなし」「共害」等。受賞者の取材を含む「調べてみよう」「講談社」として、主にテレビで科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

本賞も十一回目となり、国内外から広く応募がある文学賞となりました。今回は、環境や生物の保護、災害と心の傷、救急医療といった時代を見据えたものから、戦争や歴史上の人物まで多様なテーマに取り組む大人顔負けの作品が多かったことが印象に残りました。一方で、日常のふとした気づきから始まる素材だけれど大事な視点をもち作品もあり、どちらも授賞の対象であることをここでもう一度確認しておきたいと思います。

小学生の部の「二平方メートルの世界」は、満場一致ですぐに大賞に決まりました。著者はむずかしい病のため札幌の病院に入院しているのですが、同じ北海道で

も遠くから入院している子どもたちとその家族の苦勞に思いを馳せたり、鍵っこになった兄を氣遣ったりと、他者に対する想像力が深く、病に支配されない自由な精神について考えさせられました。本作のすばらしさは著者の偶然の発見にあるのですが、それは読んでのお楽しみにしておきましょう。

佳作「救える命は必ず救う 大切な命を守るために働く人たち」は、ドクターヘリの仕事をフライトドクターへの取材を通じて描いた作品です。事前に本を読んで抱いた疑問を直接インタビューで聞き出したり、校長先生に掛け合って医師の講演会を実現させたりするなど、行動力とそのいきさつを文章にして読ませる力に驚きました。

佳作「信念を繋ぐものは、足尾銅山鉍毒事件で被害に遭った農民のために立ち上がり、治水事業に尽力した田中正造の生涯をゆかりの土地を訪ねて取材した作品です。地球環境の変化が深刻化する今、歴史に教師を見出し、その足取りをたどる丁寧な取材姿勢と問題意識の高さを評価しました。

最相賞の「つばめのピト」は、奇跡のような本当の話です。巣から落ちた雛鳥を家族が世話してやったところ、外に逃がしても逃がしても何度も家に戻ってきます。家族を親鳥と思ったのでしょうか。動物行動学者ローレンツの刷り込みの法則を思い出しました。春に戻って来たら嬉しいですね。

中学生の部の大賞「広島のある女子中学生の昭和20年8月6日からの足跡」は、介護施設で知り合った女性へのロングインタビューです。女性は中学生のときに広島で被爆し、家族も失いました。あの日、少女が何をみて、どのような傷を負い、誰に助けられ、何を感じたのか。生々しく緻密な現在形の語りが胸に迫ります。聞く耳がなければ、これほどの話を聞き取ることはできません。この経験は著者の生涯の宝物となるでしょう。

佳作「見えない光のその向こう（全盲のセララー岩本光弘さんと私の一年間）―病氣と闘う私自身への応援歌―」は、一度失敗した太平洋横断に再挑戦する盲目のセララーとの交流を描いた作品です。何も見えないのになぜそんな

危険に挑むことができるのか、岩本さんや岩本さんを支える人たちとの交流やインタビューを通して考えを深めていきます。病に向き合うことのむずかしさや、チャレンジすることの尊さ、支え合うことの大切さに気づいた著者はこの先、自らの病とどう向き合っていくのでしょうか。

佳作「四国鉄道紀行 西条・松山・宇和島編」は鉄道の旅の記録です。とにかく鉄道が好きだという想いが全編から伝わってきました。自称オタクですが、専門的などころも軽快な筆致でぐんぐん読ませます。鉄道にあまり興味のない読者でも一度乗ってみたい気分にはせられる、独りよがりではない文章に好感をもちました。

最相賞「今を生きる ト라우マからの脱出」は、東日本大震災と福島第一原発事故の影響で福島から大阪へ母子のみが遠距離避難を余儀なくされた家族の話です。笑わない母親と会いに來ない父親、学校の友人や教師との距離感の変化など、体験した人にしかわからない重要な出来事についての報告です。このかけがえのない経験を胸に、また新たな作品に挑戦してみてください。

## 自分独自の視点

イラストレーター作家 俳優

## リリー・フランキー



1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説「東京タワー」オカシとボクと、時々、オトン」は06年本屋大賞を受賞。220万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本「おでんくん」はアニメ化され、オリジナルグッズも性別世代を超え幅広い人気を集めている。

## 小学生の部

大賞、佳作については、お二人の選考委員の方と同感です。そのほかに、「つばめのピト」は、巢から落ちたつばめに、インコのヒナ用のえさをぬるま湯でといて与えることから始まって、ヒナ用のえさから、ワームに切り替えたり、その与え方を工夫したり、クモの巣からクモを取ってきて与えたりと、つばめのヒナの飼育から、巢立ち、そして、南への渡りまでがよく描かれていたと思います。

リリー・フランキー賞は、「ミャンマーで知ったトイレの違い」です。

という長い文章を読ませるには筆力が必要ですが、その力があります。

佳作を受賞した、「見えない光のその向こう（全盲のセーラー岩本光弘さんと私の1年間）」は、すごくよく書けると感じられるものでした。岩本さんのみならず、訪問先のアメリカでの体験を踏まえるなどして、頑張っているんな障害と向き合っている人をよく書いています。最後のほうで、自分に振り返っている部分がありますが、もう少し踏み込んで書いてもらいたかったという印象を抱きました。

リリー・フランキー賞は、「出会い」です。この方の過去の応募作品も動物関係が多いようです。この作品でも、様々な動物との出会いを書いていきます。まずは、牛、豚などの畜産動物と、自分の将来の夢としての、獣医師、特に「畜産動物獣医師」と書いています。獣医師はペットブームで、ペットを診る獣医師は増加していますが、家畜を診る獣医師はどんどん減っていると聞きます。夢のまま終わらせてほしくないと思います。

叔母といとこが住む、ミャンマーへ家族へ旅行したという話なのですが、言葉や食事などに注目するのではなく、日本とミャンマーのトイレの違いに注目したところに面白みを感じます。市場のトイレで料金がかかるころ、便器の横に設置されていたホースが、便器の汚れを落とすためのものではなく、実はウォシュレットであったりとか、トイレ事情の違いがよく描写されています。また、違いを比較するだけにとどまらず、ウォシュレットの起源を調べたり、世界で普及が進んでいない理由を調べたりして、体験したことを書くだけでなく、調査まで進んでいるところが、評価のポイントでした。

## 中学生の部

大賞を受賞した「広島のある女子中学生の昭和20年8月6日からの足跡」は、目で見たような生々しさを感じました。しっかりとした、聞き取りを行った結果が、この生々しさを生んでいるのではないかと思えます。聞き取ったことを丁寧に記述していますが、50枚

小中学生ともに、子どもから見える世界を凝視して、子どもならではの、自分独自の視点から、ノンフィクション作品を書いていてもらいたいと思います。

(談)



# 大賞

## 「二平方メートルの世界で」

札幌市立伏見小学校 三年

前田 海音

ここで私は色々なことを見たり、聞いたり、感じたりする。

私が年に何度か入院する大病院の小児科は北海道内のあちこちから入院してくる子供でいつもいっぱいだ。例えば札幌にある、この病院に、道東にある羅臼町という町から入院するとしたら、車で481キロのきよりを移動することになる。400キロがどのくらいのきよりかというところから岩手県や兵庫県くらいあるはずだ。小学二年生までの子供が入院すると家族の誰かが付き添うのがこの病院の決まりなので、家族の住まいはバラバラになる。特に北海道は冬になるとJRなどの交通きかさんが乱れたり、車も安全運転が難しくなったりして、ただでさえ辛い入院というイベントが家族みんなに負担をかける。私は札幌に住んでいるので、例えば、「あのお気に入りのお人形もってきてー」などとお願ひすればいい。その日のうちに願ひが叶うように、家族が来院することはそれほど難しくない。それでも母が私に付きそって、父も仕事で家にいない時は、3才上の兄は、一

病室のベッドの大きさは縦約二メートル、幅約一メートル。その周りをぐるりと囲うカーテンの中が入院中の私の世界の全てで、寝る、食べる、遊ぶ、勉強するなどだいたいのはカプセルみたいな空間ですます。この中にいると、一日の時間の流れも家や学校ですごしているのとはちがう気がするし、夏の暑さや冬の寒さも遠いものに感じる。ふしぎな空間だ。

人で身の回りのことをして登校したりいつもどおりの生活を送らなければいけない。やはり、私が入院することで家族の生活に、様様なえいきょうを与えている。私はそれを申し訳なく思うことを兄に伝えると、

「別に。しょうがないじゃん。」と、言う。しかたない。そうかもしれない。でも私は一人でご飯を食べて、寝て、ドアにカギをかけて登校する兄を想うと、やっぱりごめんなさい。と思う。

小児科と、ひとくくりにはしているけれど、①血液、しゅよう②神経、筋③じんそう④かんせんしゅよう⑤内分びつ⑥こころと発達⑦じゅんかんき⑧生活しゅうかん病⑨リウマチ、こうげん病などに分かれていて、たくさん先生方がしんりょうにあたっていている。私は、②のチームの先生がたに、みていただいている。毎月の外来受しんと年に数回の入院で治りょうのこうかを判断して、今後の治りょう方しんを決めることを三才から続けている。長期入院になる事はほとんどないので、同室のかんじやさんと話したりする事はほとんどない。入院で辛い事の

中には「こどく感」もある。

病気の説明を受ける時はだいたい私も母といっしょに聞く。むずかしくてわからない部分もあるけど、私の病気が発作がとてわかりづらくて薬があまりこうかてきではないこと。たぶん一生病気とは付き合わなくてはならないこと。は理解している。それでも私は検査をするたびに「もしかしたらきせきがおこるかも。」と期待をしてみよう。例えば、かくいがく検査というものがあ、ほうしやせんを出すぶっしつをちゅうしやした後一時間くらい待って検査をするのだが、その待ち時間はひばくをさけるため私はだれにも近づけず、一人イスにすわってすごさなければならぬ。どうめいなかべのむこうには心配そうに私を見つめる母がいるけれど、お互い近づくことはできない。痛みをがまんしなくてはならない検査ではないけれど、こどく感で泣きたくなる。でも、周りの目もあるし、もつとつらい検査をしている子供たちも知ってるから、泣けない。なので、こんなに切ない気持ちるを味わっているのだから、もしかしたら「薬がきい

てるみたいだよ！」とか、  
「きせきです！海音ちゃんの結果、全て異常ありませんよ！」

みたいなことが起こらないかな？と思う。でも今のところその願いは叶うことはない。検査後の先生方の顔を見たら、だいたいの予想はつくようになった。

どうして私だけ、とは思わない。病とうには多くの子供たちが入院していて、それぞれが闘っていることは何回か入院をすれば気づくことだ。ここでなければできないせんもんできな治りようをするために大病院にいることも。何か悪いことをしたから病気になるわけでもないし、理由を探してもしかたがない。夜中、看護師さんや先生たちがパタパタと静かに、でもいつこくを争うように動いている気配を感じることがある。もしかしたらなんで、どうしてと考える時間もあまり残されていないのかもしれないとこわくなる。

たまたま私だった。そうなつとくしているつもりでも、つらい検査や検査のための行動せいげんとかせつ食や、

り面会に来られない父も、一人ですごさなければいけない兄も、みんな言葉を飲みこんでいる。本当の気持ちを言ってしまったら、きつとお互い傷つくし、もうがんばれなくなる気がして、口を閉ざす。

その日も検査を待っていた私は、いつものようにベッドに横になっていた。週に一回のシートこうかんの前の日あたりになると私の体の形にシワがよって、しめった感じになって、気持ちよくない。私はふだんと頭の向きを逆にしてねてみようと思いついた。ごろんと体の向きを変えた時ベッドにまたがるオーバーテーブルのうらが見えて、それが目にとびこんできた。私の目はそうとう丸くなったと思う。そこにはびっしりとたくさんのおせがきのような言葉が色とりどりのえんぴつやペンで書きこまれていたのだ。

「ようやく退院できるよ！十六ヶ月、長かったー！」

「→おめでどう！」

「みんながんばろうね」

「何でも食べられるようになりたいよー！」

朝ご飯が今日もご飯、みそしる、タマネギスライスだけだったことや、今ごろ学校ではみんな何をしているのだろうか考え始めると、この気持ちをどうしたら良いのか分からなくて、なげやりな私になってしまう。

きっと私は発作がある限り修学旅行などにも行けない。みんなが当たり前にいけんしていくことも、

「海音ちゃんはやめておこうね、体が大切だからね。」と、やさしい、けれど強い言葉で、自分は病気だから、みんなのように選べないことをいやというほど思知らされるのだろう。悲しいというよりも、自分がみんなのいる場所とはちがう所にいるのだと思わされて、あきらめるってこういうことなのだ、と、静かな気持ちになるのだ。

「もういやー！」

「一日で良いから、薬を飲まなくて良い日を下さいー！」  
たくさんさんの言葉を私は飲みこむ。口に出してもまわりを困らせるだけ。私だけじゃない。私の入院のために休みももらわなければならない母も、仕事が忙しくてあま

「納豆とかー！」

「再手術。サイテー」

「→ファイト！」

「ママにめいわくかけちゃってる。ごめんね。」

「けんこうになりたいね」

テーブルに落書きすることはもちろんルールはんだ。よく見つかって消されなかったなあ、と思った。基本的に、入院中はベッドやテーブルは同じものを使い続ける。退院や転科のタイミングでそうじされた後に次の人が使うから、この言葉を送りあっている人たちは、会ったことのない人同士だ。時間をこえてお互いの言葉に返事をする。どこに住んでいるのかも、今はどうしているのかもわからないだれの言葉。言いたいけど言えなかったり、むねにしまった言葉。この二平方メートルの世界で、同じテーブルを使ってすごしたたくさん誰かが確かにここに居て、私に語りかけてくれた。ひとりじゃないよって。病気のことでは泣かないって決めてたけど、なみだが出た。



病気は苦しい。できればない方がいいと思う。  
 「その苦しみにたえられないからええらばれたんだよ。」  
 と言われたことがあったけど、ええらばないでください  
 と思った。病気は不自由だし、めんどうが多い。ただ、げ  
 んじつ私は病気と生きていかななくてはならないようで、  
 その人生で知ったことを、知らないだれかに伝えなくて  
 はならないのかもしれないなあ、と思う。病気の子供た  
 ちのかすかな声を私は聞いた。そして、そのことを文字  
 にできるくらいには、私は元気で自由だ。

病気がある私のような子供が、しょう来にゆめを持つ  
 ことや、自分に出来ることを見つけてはとてむず  
 かしい。しかし、明日のことはだれにもわからないこと  
 は病気があってもなくても変わらなことは知っている。  
 一日一日、いっしゅん感じたり見たり聞いたりすること  
 を大切にすること。生きていくことのすばらしさは気づ  
 かないことが多いからようじんした方がよいことも、私  
 は知っている。

来年、私は長期入院をひかえている。二平方メートル



小学生の部

佳作

「救える命は必ず救う

大切な命を守るために

働く人たち」

鳥取市立鹿野学園 四年

田村 萌梨

空からヘリコプターに乗って、お医者さんが飛んでく  
 る。

初めて知ったのはようち園の時でした。七つ上のお兄  
 ちゃんを通う小学校でドクターヘリが運動場に着陸した  
 という話を聞いた時です。地いきの人がけがをしたそう  
 です。

の世界でまた私らしく生きていく。オーバーテーブルに  
 言葉はきざめない分、心に言葉をきざみこむ。それがだ  
 れかに届くかもしれないから。

それからお兄ちゃんは、ドクターヘリにきょう味を持  
 ち夏休みに自由研究でくわしく調べていました。図書館  
 にあるドクターヘリに関する本をほとんど読んでいまし  
 ました。そして、私たちが住む鳥取市には兵庫県とよ岡市に  
 ある但馬救命救急センターからドクターヘリが飛んでく  
 ることを知りました。お兄ちゃんは、さっそく見学に行  
 き、フライトドクターの小林まこと先生からくわしく話  
 を聞きました。家の中でもドクターヘリの話は何度も出  
 てくるようになり、小さな私は、ヘリコプターのおも  
 ちゃを持って、「ドクターヘリです!」と言って遊んで  
 いました。空を見上げて赤と白と青のドクターヘリをさ  
 がすようになったのもこのころからのクセになりました。  
 お兄ちゃんは、図かんや絵本などからドクターヘリを  
 さがして、小さな私に説明をしてくれました。「コード  
 ブルー」のドラマを一しょに見ようとさそってくれまし  
 ました。でも、私は少しこわくて見ることは出来ませんでした。  
 お兄ちゃんがドラマを見ているとなりで、私は主題  
 歌「HANABY」を聞いていました。そしていつも

歌っていたようです。

ピアノを習い始めたのもこのころでした。まだひくこともできないのに、お母さんにおねがいして「HANABÍ」の楽譜を買ってもらいました。いつかひきたい。この思いはずっとむねの中になりました。

小学三年生になり、消防・救急について社会科のじゅ業で勉強をしました。道とくのじゅ業で「命を守るお仕事」として新潟県中えつ地方で起こった地しんの時、活やくした東京消防庁のハイパーレスキュー隊のお話をみんなで考えました。

平成十六年十月二十三日、新潟県中えつ地しんが起きた三日後、当時二さいの男の子が車と岩の間にはさまれていて、ハイパーレスキュー隊に助けられました。その時のビデオを学校で見ました。

岩や木、おしつぶされた車を見て、ハイパーレスキュー隊は言葉が出なかったそうです。でも、もしかしたら生きている人がいるかもしれないと思って名前をよびかけてみたら、小さな声が聞こえたそうです。

ハイパーレスキュー隊長は、「生きている、生きている。ゼッタイに助けるんだ。」と心にちかかったそうです。

この小さな子どもは生きています。地しんのよしんもある中で、自分もひよっとしたら死んでしまうのではないかと不安になったと思います。だれかがすき間から穴の中にはいつて助けるしかないと言いました。隊員の一人が「自分に行かせて下さい。」とさげびました。私はすこくゆう気があるなと思いました。

でも、その時は、早く子どもを出してあげたいという気持ちしかなかったと思います。

ハイパーレスキュー隊の気持ちが一つになったから男の子を助けることが出来たと思います。地しん発生から九十二時間後のきせきの出来事だったそうです。

ハイパーレスキュー隊のチームワークと助けたい気持ちちが子どもの命を救ったと思います。

私は、このじゅ業をきいてから、どんな命でも世界にたった一つしかないので、大切にしなければいけないと強く思いました。助けてもらう人も助ける人もみんな命

があります。

ハイパーレスキュー隊のゼッタイ助けるんだという強い思いを知って私も何か出来ることがないか考えてみようとしました。

私が通う学校は、山と海にかこまれた鳥取市鹿野町にあります。鹿野町には、消防署が一つあります。三年生の時、鹿野町にある気高消防署に社会科見学で行きました。

鹿野町は、手じゅつが出来る大きな病院がないので病気やけがをしたら少しはなれた病院に行かなければなりません。

去年、山がくずれて道が閉ざされた時、他の道は大じゅう滞になりました。救急車が来てくれると思うように病院へたどり着けないのは、悲しいです。

私は、もっと知りたいなど思って四年生の夏休みにもう一度、気高消防署に行って、救急についてくわしく教えてもらいました。

気高消防署では一日平きん一〜二件の救急車出動があ

ります。夏の暑い日には、熱中症などで平きん6件くらい出動します。

しかし、病院まで遠いので平きん四十分くらいかかるそうです。助けたいのにじゅう滞などにまきこまれた時、とてもくやしい思いをすることがあると教えてくれました。

きん急の時は、ドクターヘリを要せいすることがあるそうです。山のがけなどで事こが起こった時は、防さいへりも要せいするそうです。ドクターヘリ、防さいへり、そして救急車で連けいしてかん者さんを助けようところがなっていることを聞きました。

次に私は、鳥取消防署に行って、一一九番通ほうをしつてから病院に運ばれるまでの仕組みを覚えてもらいました。鳥取消防署の三階には、通信指令室があります。

鳥取県東部で発生した一一九番通ほうは、すべて東部消防局の通信指令室につながります。大きな最新のモニターにはさい害の場所のじょうきょう、救急車、ドクターヘリ、防さいへりの出動じょうきょう、さい害場所

の地図などがうつされていきました。また、大きなさい害が起こった場合のために、通信指令室のとなりに作せん室がありました。

病院に運ばれるまでの流れを教えてくださいました。

一一九番の電話がなります。次に一一九番の受付をして火事が救急かを聞きます。出動の指令が出て、近くの消防署へ連絡がいきます。そして出動します。コンピューターから指令がでて全員がじゅんびをします。救急車がげん場にとう着します。救命救急士はすぐにかん者さんのじょうきょうかくにんをして、救急隊員はかん者さんを運ぶじゅんびをします。一台の救急車に救命救急士は一名乗るようになっていそうです。そして、救急車の中にかん者さんを運びます。意しきのかくにん、みやくはく、こきゅうや体温をはかります。住所や名前、年れいなどをききます。そのあと、病院に連れらくをしませ。受け入れのかくにんをします。どこの病院へ運ぶかはんだんは救急隊員が決めます。サイレンをならして病院に運びます。一一九番通ほうをしてから病院へ運ば

治りようをすることで、病院に運ばれる時間を短くすることが出来ます。しよ置が早ければ、命が助かったり、しよ害が軽くなったりします。

ドクターヘリの働きも聞きました。ドクターヘリは三百六十五日働きます。朝は八時三十分から日没前三十分まで働きます。時速二百キロメートルくらいです。五十キロメートルけんないであれば十五分で着きます。十五分で治りようが開始できれば、重しよな人が助かったりしよ害が残らないかくりつがあがるそうです。ドクターヘリは、天気が悪かったり、きりや雪などでし界が悪い、夜くらいときなどは飛べません。かわりに、ドクターカーがあります。このドクターカーは二十四時間働きます。

ドクターカーというのは、医しやかんごしをげん場まで運びます。しかしドクターヘリとちがって、遠くまで行くことができません。

雪や夜なども活動します。医しをげん場に運んだドクターカーは、そのまま病院へ帰ります。医しはかん者さ

れるまでやることがたくさんあるなと思いました。

次に、ようち園のころからきょう味を持っていたドクターヘリ。空からヘリコプターに乗ってお医者さんが飛んでくる仕組みについて調べてみました。

私も、図書館にあるドクターヘリの本をたくさん読みました。お兄ちゃんは、ドクターヘリのやくわりや仕組みなどを中心に調べていましたが、私はフライトドクターがどのような気持ちでお仕事をしているのか気になったので小説などをたくさん読みました。

そして、お兄ちゃんの時と同じように、但馬救命救急センターに連れらくをしてドクターヘリの見学をさせてもらえることになりました。私たちの町でもドクターヘリによって助けられた人がいると聞きました。今では助からなかった命が助かるようになったということにとてもきょう味を持ちました。

今回は、フライトドクターの後とう保先生にインタビューしました。ドクターヘリというのは、医しとかんごしを救急のげん場へ運びます。その場所でしんさつや

んどいっしよに救急車に乗って近くの病院に行きます。去年は、一年九カ月で十キロメートル走ったそうです。ドクターヘリに乗る医しやかんごしはたくさんさんの機材がはいっているバックをせおってかん者さんのところまで走っていきます。十四キログラムくらいあります。後とう先生にバックをせおわせてもらいました。すごく重たかったです。

小林先生や後とう先生が働く、兵庫県とよ岡市にある但馬救命救急センターには、救命救急医が二十七名いるそうです。そのうち、十七名がフライトドクターです。一日平きん六く七件ドクターヘリが出動するそうです。少ない時は、年に数回0件の時があります。多いときには、一日十六件出動したことがあるそうです。二〇一八年度は二一〇五件出動があり、日本一いそがしいドクターヘリです。

ドクターヘリの出動指令が来たら、平きん四分ほどで飛び立つそうです。私がインタビューしているときも、ドクターヘリはあつという間に飛び立ってかん者さんの

ところへ行きました。

また、救命救急室のとなりには、せん用の手じゅつ室がありました。室温は三十二度くらいにしてありました。それは、体温が下がらないようにするためだそうです。

私が、ドクターヘリについて本を読んでいたとき、気になったことがあったので、しつ問してみました。

ドクターヘリは、げん場に着いてからすぐにはん送するのではなく、先に救急車の中でしよちをしてからはん送するのは、なぜかということです。ドクターヘリを要せしたら、救急車もげん場へ向かいます。

まず救急車の中で大事な治りようをするそうです。容体を安定させてからヘリで病院へ運ぶと教えてくれました。救急車の方が、ヘリコプターより広いので大きく動くことができ、治りようがしやすいそうです。しかし、きん急なときは、ヘリの中で手じゅつをすることもあると教えてくれました。

最後に後どう先生からたくさんメッセージをもらいました。フライトドクターになるには、「助けたい。」と

いうあきらめない心をずっともち続けることが大切だそうです。

フライトドクターになってよかったことを聞きました。今まではかん者さんが病院にくるのを待っていて、治りようをしていたけれど、フライトドクターになったら自分がかん者さんのもとに出かけていって治りようが出るようになります。一分一秒でも早くしよ置をすることが出来るのがよいところだそうです。かん者さんのところへより早く行けるようになったのがよかったと教えてくれました。

私は、「救える命は必ず救う。大切な命を守るために働く人たち」をまとめて、校長先生のところへ持ってきました。私たちの住む町でも、きん急の場合ドクターヘリで早く治りようが出来るということをみんなに知ってもらいたいと思ったからです。但馬救命救急センターの小林先生から鳥取市の小学校で特別じゅ業をしているということを知りました。ぜひ私たちの学校でも、小林先生のお話をみんなと聞きたいと思いました。校長先生

にお願いして小林先生に来てもらえることになりました。

校長室に一人で入っていくのは、すごくきん張したけれど、ぜったいみんなに知ってほしい！という思いがあったので、思い切ってノックすることができました。

小林先生は、但馬救命救急センターから二時間かけて私たちの学校までフライトスーツを着て来てくれました。

「空翔ける救命救急医が語る「こだけのお話」として、先生がどうしてフライトドクターになったのか、やりがいなど詳しく教えてくれました。楽しいスライドを使って、面白く、真けんにお話してくれたので、友達も私も、学校の先生もお話に参加することが出来ました。

救急車が病院に運ばれるまでの全国平均は、三十九分かかるそうです。一番長いのは、平均五十・六分だそうです。それは、東京都だと教えてくれました。東京は大きな病院が近くにたくさんあるのに、どうしてこんなに時間がかかるのか、すごく不思議でした。

東京には、大病院がたくさんあり、たくさんのお急医がいます。私たちの住む鳥取市は救急医が少ないそう

です。

東京では、救急車が病院にはん入されるとき病院にかん者さんが多くて受け入れが出来ないことがあるそうです。

しかし、私たちの住む鳥取市には大きな病院が四つだけです。だから、必ずどこかの病院で受け入れるというルールが出来ています。

また、病院の先生と救急車に乗る救命救急士がつねに連らくをとりあい、仲よくしていることを教えてもらいました。

鳥取は、全国でもめずらしく、ドクターヘリが二機どうにゆうされました。少しでもはやく、治りようを開始することが出来るので、助かる命がふえると思います。命を守るために、ヘリコプターに乗って病院の先生が私たちを助けに来してくれます。フライトドクターの小林先生からお話を聞いて、とても安心しました。

東京でも鳥取でも、病院の先生は、大切な命を守るために毎日がんばってくれていることを知ってうれしかった

たです。私は、救急医になりたいと思います。強い心を持ってがんばりたいです。

小林先生のお話を聞いてから、私たち四年生は文化祭のげきで消防について発表をしました。

地いきの人たちの前で、一一九番をかけたあとどのようなシステムで命が守られるか発表しました。

私は、小林先生の役をやりました。せ中に「DOCTOR」のワッペンをつけて、大きな声でドクターへり要せいを受け入れました。

鳥取市鹿野町まで、ドクターへりは但馬救命救急センターから二十分です。鳥取空港からは、ドクターへりは二分です。地いきの人は、きっと安心したと思います。

小さいとき、お母さんから買ってもらった楽ふを見て、コードブルーの主題歌「HANABU」をピアノでひくこともできました。文化祭は、私たちが学習したことを地いきの人に発表できたのでよかったです。

最後に私は小林先生のお話を聞いて、JR福知山脱線

事故のことがいんしょうに残りました。このとき、日本で初めてトリアージタグを使用したさい害医りようをしたのが小林先生でした。JR福知山脱線事故から学ぶ救急医りようについて今後は調べてみたいです。

私は、ドクターへりをたくさんどうにゆうしたら、みんなが助かるのではないかと思って小林先生にいつ問してみました。

ドクターへりはかん者さんを一名しか乗せることが出来ません。さい害が起こったらドクターへりでは対応できなくなってしまう。大きなさい害が起こったとき、ドクターへりで医しをげん場へ運び、防さいへりでかん者さんをはん送させたりする方法も考えているそうです。これからは、さい害医りようも必要になってくると思います。これからの鳥取のさい害医りようについても調べてみたいです。

私は、今十さいです。これから勉強も運動もたくさんして救急医になれるようにがんばりたいです。救急医の先生は体力、集中力が大切です。私は、小学校一年生の

時から毎週お父さんといっしょに八キロメートルマラソンを続けています。土日で十六キロメートルくらい走ります。また、私の一番好きなことはきょうぎかるたです。かるたの練習会では、5時間くらい集中します。これからもずっと続けていきたいです。

但馬救命救急センターに見学に行ってみたのは、救急医の先生は明るくてみんな仲よしでした。私と同じようにマラソンが大好きな先生がいました。私は学校で楽しくみ係やクイズ係、遊び係をやっています。たくさん

の友達といつまでも仲よく勉強や運動をがんばろうと思いました。そして、いつか救急医になってへりコプターに乗って助けに行けるフライトドクターになりたいと思います。

さん考文けん

「エンジンスタート」

岩貞るみ子作 こう談社

「命をつなげドクターへり①」

岩貞るみ子作 こう談社

「テイクオフ」

岩貞るみ子作 こう談社

「命をつなげドクターへり②」

岩貞るみ子作 こう談社

「人命救助のプロ」

こどもクラブ 岩崎書店

「いのちを救いたい 救急救命二十四時」

汐文社

「ありがとう わが娘・順子」

JR福知山線事故からのテイクオフ」

鈴木もも子 P H P 研究所

「空飛ぶ救命救急室 ドクターへりの秘密」

和氣晃司作

「信念を繋ぐもの」

聖学院小学校 四年

日高 実生

が大好きで、いろいろな人物や、たくさんのお話を読んできました。その中で、何度読んでも驚くのは「田中正造」で、知れば知るほどこの人を尊敬してしまいます。

父は歴史が大好きで、我が家は家族旅行に「歴史探検」の旅に行きます。知りたい人や、歴史にまつわる場所へ向かって旅するのです。

二年生の春、母に

「ママの好きな政治家は誰。」

と質問すると

「田中正造翁先生。」

と、母は答えました。私は、その頃、政治というものを知ったばかりで、テレビに出てくる有名な政治家しか知りませんでした。私が母に

「誰。何をした人。」

と聞くと、

「本物の政治家よ。人が生きるために闘った人よ。調べてみて。」

と言い、その日、二冊の本を買って来てくれました。こ

いきなりですが質問です。あなたが尊敬している人は誰ですか。教育や外交を発展させた人ですか。健康と福祉、環境を充実させた人ですか。交通を充実させ、仕事や経済に取り組んだ人ですか。文化を推進し、住宅や法と秩序を守った人ですか。それとも、自分を愛してくれる、お父さん、お母さんですか。世界中には沢山の人が居て、それぞれの生活を送っていますね。私は伝記や本

れが私と田中正造の出会いです。私は本を二冊ともすぐに読んでしまい、「日本にこんな人がいたのか。」と驚きました。そして、その夏の歴史探検旅行は「田中正造ゆかりの地」に決定しました。これは三年間続きました。

正造は一八四一年（天保十二年）十一月三日、下野国安蘇郡小中町（現、栃木県佐野市小中町）の名主（村の民政を行う農民）の家の長男として生まれました。父は富蔵、母はサキという名で、正造の幼名は兼三郎です。正造が五つの時のある雨の夜のことでした。正造は筆で人形の絵をかき、じいやに得意そうに見せました。じいやが

「上手ではない。」

と正直に言うとうと、正造はじいやに筆と墨を押し付けて、怒りをぶつけたのです。じいやが、謝っても正造は許さずとしません。すると、母、サキは、

「弱い者いじめをする者は外に出なさい。」

と雨戸を開けて、雨の夜の庭へ正造を追い出したのです。正造が泣き叫び、謝ってもサキはすぐに戸を開けず、二

時間後に許してもらったそうです。

私は二年生と今年の夏休みに正造の生家を見に行きました。復元された物ですが、土間と台所と三つの部屋で出来ていて、庭に、池と倉庫がありました。私が想像していたよりもこじんまりしていました。しかし、本当は、かやぶき屋根の母屋は改築されて銅板ぶきとなり、池や倉庫は昔、なかったそうです。

名主を務めた農家なのに、決して豊かではありませんでした。富蔵は、家柄ではなく、村人からの厚い信頼で名主に選ばれたのでしょう。そんな話をしながら歩いていくと、母が「お母さん（サキ）も我が子の乱暴を躰けるためとは言え、明かりもない雨の夜の庭に、正造を追い出すことは、辛かったと思うよ。」

と、言いました。そして、思い出しました。

それは、私が幼稚園の年中の頃、ライターに火が付き、私でも紙を燃やせることが面白くて、火を付けてしまったことがありました。母に見つかった時は、とても強く怒られました。しかし、あんなに反省したのに、ライ

ターを見つけた時、また火を付けてしまいました。母は無表情でしたが、私を見る目は鋭く、とても低い冷静な声で、

「こんなに悪いことを悪いと判らないのは、お母さんの教えが悪いせいね。」

と、母が私の手を握り、私の手で、母の手をぶたせたのです。私は怒られて一度もぶたれたことはありません。なのに、母の手を私の手がたたいているのです。とても恐くて、心臓がやぶけたようでした。これで私は、火が恐ろしい物だと分かりました。あれは今、思い出しても体が凍ります。正造も同じ思いをしたのでしょうか。これを書いている時に、母に作文を読んでもらうと

「幼稚園の頃よりも、今の方が怒る回数が増えたわ。」と、言われてしまいました。

富蔵は、学問を大切に、村人と力を合わせて塾を立ち上げました。正造は七歳の時からこの塾に通いました。そして十七歳で父の跡を継いで小中村の名主となります。正造は、仕事も学問もよく励んだそうです。

正造は岩手の役所に務めますが、殺人事件が起き、無実の罪でまたもや投獄されてしまいます。正造は獄大と学と言い、沢山本を読み、勉強しました。その中に、スマイルズ著の「西国立志編」がありました。私もこの本を三年生の時に読みました。読み終わると、自助（人の力を借りないで自分の力で頑張る）論が書いてあり、それは、前へ進むための頑張り方や、自分に好機をおとずれさせる生き方を書いた本でした。負けそうな時に、自助論に従ってみれば、必ず一つはチャンスを掴めると思わせる本でした。

そして江戸から明治へ、新しい時代がおとずれます。国は「富国強兵」の方針をかけた、人々が生活する為の農業ではなく、国に財力をもたらす産業へと突き進みます。一方、正造は人々の生活を向上させるため、政治に身を投じようと決心します。政府と正造は目標が真逆だったのです。正造は五十歳で衆議院議員に当選し「足尾銅山鉱毒事件」と出会い、政治で農民のために生涯をかけて戦うのです。

正造が二十歳の時、事件が起きます。小中村の領主である六角家の用人が自分の都合の良い人を名主や村役人に任命したり、年貢を勝手に上げたりして、不正を行ったのです。

名主である正造を先頭に、村民が反対運動を行います。正造は役人に捕えられ、縦横三尺（九十センチ）の、まるで犬小屋の様な牢獄に入れられました。しかし、正造と村民は団結して、不正を行った役人を追い出しました。この事で正造は、六角家の領地から追われてしまいました。幕末体制の六角家から、村の自治を守り抜きました。そして、政治の世界に身を投じ、人民を守ることを信念とするのです。この事件により、全ての財産を失った正造ですが、慌ただしい中でもカツという評判の良い娘さんと結婚します。両親を亡くしたカツに

「わしの嫁になるんじゃ。」

と、背負いカゴに入れて連れてきたそうです。正造二十四才、カツはわずか十六才の時のお話です。これも信念と呼べますね。

私は二年生の時、正造の生家に行った後、足尾銅山に行きました。今、そこは観光地になっていて、誰でも入ることが出来ます。まず、トロッコ列車に乗って、坑内に入ります。外は暑い空気ですが、坑内に入るとひんやりとした湿気に体が包まれて、気持ちが悪くなりました。中に入っていくと、そこには、今にも動き出しそうな人形達がいて、銅を掘る作業をしていました。始めは江戸時代、そして明治・大正時代、最後は、昭和時代と、時代ごとに分かれていました。奥に入れば入るほど、おどろおどろしく、私は怖くなりました。

「う、うー」

と、うめき声が聞こえ、私は怖くて泣いてしまいました。何と、というより、やっぱり父でした。父は、私を怖がらせるのが大好きです。観光用の道は広く歩きやすいけれど、昔、採掘作業をしていた人達は、体を縮めて腰を丸くして、やっと人が入れるほどの場所にいるのです。今は、電気が通って明るいけれど、当時は、ろうそくでランプの明かりのみ。じめじめしている壁のせいですが

に火が消えてしまったと思います。時には、採掘中に天井がくずれた事もあるでしょう。それでも、働いている人達はくじけずに、千二百三十四メートル（東京から博多相当）も掘ったのです。ただ、国のため、家族を養うために頑張って働いたのに、まさかその家族が住む村や、生活を支える自然を破壊してしまうとは、思わなかったでしょう。悲しい気持ちで展示室に入ると、そこにある物は、日本の経済を支えてきた、ほこらしく立派な物ばかりでした。

「ここは日本の光と影だ。」

父がそう言ったことは忘れられません。その日の夜、私が寝ながらのたうち回り、うなされて、母は眠れなかったそうです。

次の日、古河掛水倶楽部重役役宅に行きました。日本の家とは思えない、大きな可愛い家でした。ここで、日本を動かす人達がパーティーをしていたのです。農民は本当にかわいそうです。足尾銅山で働いている人も家族の為だから、悪くありません。悪いのは、罪のない人に

毒を飲ませてまでお金もうけをし、ここでぜいたくに着かざってパーティーを楽しむ人達です。赤ちゃんや体の弱い人達が、毒で死んでしまうのに、ここでお食事をしていたなんて農民だけでなく、私も許せません。村は目の前なのに、なぜ、日本の未来を話し合っている人達が気付かないのでしょうか。

三年生の夏も、もちろん「正造ゆかりの地」を廻ります。今回、足尾鉍毒問題の中で、最も大きな事件と言われる「川俣事件衝突地」に行きました。そこには、黒い、大きな石碑が立っていました。その石碑は、平成十二年に作られた物で、まだ新しくきれいでした。石碑には、川俣事件の詳細が書かれていました。すると、近くに立て札があり、川俣事件の資料がある家の地図が書いてありました。私は驚きました。立て札の家へ、急いで行きましたが、お留守でした。がっかりして車に引き返し歩いていると、前からおじいさんが歩いてきました。あきらめきれず、勇気を出して話しかけると、

「家にあるから、寄って来なさい。」

と言われました。これこそ運です。スマイルズの言う通りに行動してみたら、好機が本当におとされたのです。おじいさんの家で、資料を無事に頂き、車の中で読みました。渡良瀬川は昔から恵みの川で、アユや様々な種類の魚が住み、鮭も登って来たそうです。魚を取って、沢山の漁師が生計を立てていました。上流の山から養分を沢山含んだ土を下流の畑に運び、農家を支えてもいました。その川を足尾銅山の鉍毒が毒水にしてしまったのです。政府は鉍毒被害を知りながらも、海外との貿易のため、日本最大の足尾銅山を止めませんでした。しかし、十年間も放って置かれ、森や川、田畑や村人さえも、毒で死んでしまいました。とうとう農民は押し出し（デモ）を決行しました。毒で弱った体をひきずって、二日間飲まず食わずで、東京を目指し、歩いたそうです。しかし、四回目の押し出しで、とうとう警官がサーベル（剣）で農民達を傷つけてしまいました。これが「川俣事件」です。私は農民がかわいそうだと思います。毒で弱った体をサーベルで傷つけられたからです。たとえ、

政府に従わなければならないとしても、警官を恨んでまいります。

小さな町の悲しい歴史を知り、重く苦しい心で佐野市郷土博物館へ行きました。田中正造展示室の中央に、田中正造の立像があり、それを取り囲む様に栄光と苦悩を物語る資料がありました。国会議員という地位も財産も投げうって公害問題に身をささげた正造が最期に持っていた物は「マタイ伝、新約聖書、帝国憲法、河川調査の原稿、日記、小石三個」だけでした。お父さんはずっと、長い長い手紙を身動きせずに読んでいました。それは、正造が命を捨ててまで天皇に渡そうとした直訴状でした。お父さんが

「これを天皇に渡せていたら、正造は死刑だったんだよ。」

と、それを見つめながら言いました。正造が起こした命がけの行動は大事件でした。新聞が鉍毒問題を取り上げ、正造や鉍毒被害者に同情し、演説会や募金活動が行われ、人々が鉍毒について学ぶようになったのです。そして、



ようやく政府が鉋毒調査委員会を設けました。これはまさに、農民と正造の信念です。この信念が世間の人の良心と繋がったのです。しかし、この繋がりを断ち切ったのは鉋毒調査委員会、いわゆる政府でした。委員会は、「この鉋毒被害は昔から鉋山の周辺や川底にたまっていた鉋毒が洪水によって田畑にあふれたのである。従って銅山に鉋毒の責任はない。」と報告したのです。これは、私でさえも言葉が出ないほど悔しいです。正造達はどのような思いだったのでしょうか。三年間、正造を追いかけてきた私には、その声が聞こえてきます。そして、正造の銅像の前に立ち、正造最後の言葉を読みました。

「大勢見舞に來ているそうだが、うれしくも何ともない。みんな正造の病気に同情するだけで正造の問題に同情しているのではない。おれはうれしくも何ともない。行ってみんなにそう言え。」

大正二年九月四日七十一歳、病床に看護主任を呼んで言ったそうです。正造は七十一歳で亡くなりました。最後の最期まで農民のための名主だったのでしよう。遺品

の中に子供が使うようなノートがありました。正造が一番好きな写真はおだやかな笑顔のおじいさんでした。正造が若い頃、お父さんから名主について、悪政から村人を守った時に誓った信念を貫いたので。人々の生活を守ることは正義だと思えます。物語では正義の人々が勝ち、賞賛を浴びます。しかし、なぜ現実では、正義を貫く人が傷つくのでしょうか。そんな思いで車に乗り、旅の最終目的地、東京都足立区にある保木間の氷川神社へ向かいました。

明治三十一年九月二十五日、怒りが爆発した農民およそ一万人が、鉋毒事務所となっていた、群馬県館林市雲竜寺に集まり、東京に向かいました。それを知った政府は、現、東京都足立区にある、千住大橋を警官隊に守らせました。正造は、弱り疲れ果てた農民が警官に逮捕されるのが心配で、追いかけてきました。保木間の氷川神社で野宿をしている農民達に追い付きました。私は車で氷川神社へ、向かいました。車は歩いている人をぐんぐん追い越して行きます。農民達は出発する時、約一万三千

人もいました。途中、警官や憲兵達に、行く手をはばまれます。農民達は刀を抜かれておどされ、利根川を渡る船を隠され、馬で追い立てられ、足でけられたそうです。どの家も警官に言い含められ宿を貸してもらえない上、おなべやかまども貸してもらえず、お米を持ってきても炊けずにご飯を食べることも出来ません。それでも、被害農民達は、「命の親と頼みたる、渡良瀬川のその水に、毒注がれて絶間なく…」

と、歌をうたいながら二日間歩き続けたのです。私は夕方、氷川神社に着きました。とても、長い距離でした。その神社は鳥居から本殿まで百歩ほどの小さな所でした。命がけて来た農民に正造は

「おとめもうす。このまま歩き続ければ、暴徒とされてしまうだけ。大勢で押しかけるよりも代表を選んで請願に行こう。もし政府がこちらの言い分を聞き入れなければ、次は、自分が押し出しの先頭に立つ。」

と約束し、五十人の代表を東京に送り出し、押し出しを止めたのです。母も父も私も「ここまで来たら、死んで

でも政府に伝えたいから、東京に行きたい。」と、悔しい気持ちでいっぱいになりました。半生をかけて鉋毒事件と戦った正造だから、死を覚悟した農民の行進を止めるように説得し、止められたのだと思います。しかし政府は農民の話聞きませんでした。そして、正造は約束を守り、押し出しを扇動しました。それが、第四回の押し出し、大勢の犠牲者を出した「川俣事件」です。正造は、この後、議員を辞めて、天皇に直訴するのです。正造の天皇直訴の理由が分かりました。

四年生になった今年も、渡良瀬遊水地を中心に正造ゆかりの地に行きました。夕日の色にそまった遊水地はとてもきれいで、恋の歌が作られるほど心に残る風景でした。しかし、一角にお墓がありました。これは、昔ここに谷中村があった証です。直訴事件後、「鉋毒被害は、銅山に責任はない。」と、委員会が報告したため、政府は自然災害による洪水を防ぐために、遊水地を作ったのです。選んだ場所は被害民の村「谷中村」でした。またしても正造と村人は戦いますが、正造はすでに七十歳を過ぎ、

争いの途中で亡くなります。正造亡き後も村人達は政府の圧力に耐え、谷中村を離れようとしませんでした。しかし政府は工事を進め、人々は完成を目の前に村から皆で出ていきました。こうして谷中村は、遊水地に沈んだのです。

渡良瀬遊水地はとてもきれいです。人々の悔しい歴史を包み込み、動物や植物、魚や鳥、沢山の昆虫を住まわせています。銅山の鉱毒で、草木が生えなくなってしまう松木村とその山は「日本のグランドキャニオン」と呼ばれているのです。しかし、自然は人間が作ってしまった岩の渓谷にも、特別天然記念物のニホンカモシカや新しい草花を復活させてくれています。

十歳の私が見て、今の世界の人々の流れは明治時代を迎えた日本と同じように、自然を破壊し、命よりもお金を大切にしていると思います。足尾銅山で働いている人や、正造、村人達や政府の目的を知ると、正義には色々あると分かりました。良心に従った行動こそ正義なのに、それを貫けば傷つくことも分かりました。世の中は、正

義と悪がからみ合っています。今の私の中の正義は、命を守ることです。世界には、その正義を守るために、声をあげている人達がいいます。私は、その人達と繋がりたいです。それには勇気がいります。でも、私は負けません。

皆さんの正義は何ですか。考えたことはありませんか。あるなら、それを考えぬいてみて下さい。それには、痛みや苦しみが伴います。でも、負けないで下さい。私も負けずに頑張ります。



小学生の部  
選考委員特別賞  
那須正幹賞

「アゲハチョウは

どこからやってきたのか？」

西武学園文理小学校 二年

遠藤 光之佑

朝おきて、カーテンを開けたお母さんが「あ！ベランダにチョウチョがとまっているよ。」と言いました。ぼくの家は、マンシヨンの11かいなので、ベランダにチョウチョが来ることはありません。ぼくも見てみたいと思っておきました。

ベランダを見ると、カーテンを開けたらちょうど正面の

手すりあたりに黄色と黒のチョウチョがとまっています。

すると、お母さんが、

「ママのたん生日をおいわいにやってきてくれたんだね！」

キラキラうれしそうに言いました。ぼくは、お母さんがキラキラうれしそうなのは、なんでだろうと思いました。その日は、お母さんのたん生日だったので、チョウチョがやって来てうれしかったのかなと思いました。

お兄ちゃんが、

「本当だ！チョウチョがとまっている！」  
と、おどろいていました。

すぐに、お父さんがおきてきて、黄色と黒のチョウチョを見て言いました。

「これは、アゲハチョウだね。一体どこからやってきたのだろう。」

この日は、昨日から雨がふりつづいていて、チョウチョが雨宿りしているように見えました。

お父さんは、しばらく考えて、「このアゲハチョウは、このすけのハウセンカにくっついてたんじゃないか？」

と言いつつ、ベランダにおいてあるハウセンカのはちうえを見に行きました。

そのハウセンカは、前の日に学校からもってかえってきただけでした。

お母さんは、朝ごはんをつくりながら、ぼくとお父さんの話を聞いていました。お兄ちゃんは、きがえていました。

お父さんが、

「このアゲハチョウ、もしかして今日、羽化したばかりなんじゃないのかな？このすけのハウセンカにくっついてたのかもよ。今、羽をかわかしているんじゃないかな。」

と言いました。ぼくのハウセンカにサナギがくっついてたのかもしれないと、想ぞうしてうれしい気もちになりました。

昨日、学校からもってかえってくる時は、雨がふって走ってもってかえたから、気がつかなかったのかなと思いました。

お父さんがつづけて、

「もし、今日、羽化したなら、ハウセンカにサナギがくっついてるはずだよ。」

と言いました。

朝ごはんをテーブルにはこびながら、お母さんが、「アゲハチョウってケムシなんじゃなかったっけ？」と聞きかえました。お父さんが、

「アゲハチョウは、せい虫前にサナギになるんだよ。」

と言いつつ、先にせきについていたお兄ちゃんも、

「そうだよ。」

と言いました。

アゲハチョウの間は、サナギになると、10日前後で羽化するそうです。

「もし、羽化したなら、ハウセンカにぬけがらがくっついてるかもしれない。」

と、お父さんが言うとお母さんが、

「アゲハチョウのぬけがらってどんなものだろう？」

と言いつつ、お父さんが、

「これはのようなものだったと思うけど。」

と言いました。

すると、リょうりをテーブルにおいたお母さんが思い出したように、

「さっきハウセンカを見たら、くきのぶぶんにかれはみいたいものがぶらさがっていたよ。」と、ベランダにおきました。そんなものくっついてたつけど、ぼくもベランダにハウセンカを見に行くと、くきの中間あたりから、5センチぐらいのちぢんだかれはがぶら下がってました。これが、アゲハチョウのサナギのぬけがらなのかな？と思いました。

みんなで朝ごはんをたべているとお父さんが、

「アゲハチョウってしゅるいがあるのかな？」と言いつつ、テーブルの後ろの本だなから、こん虫ずかんをとり出しました。ページをめくると、色いろな虫がのっついて、

「ごはんをたべながら見るものではないな。」と言いました。お母さんは、わらっていました。

お兄ちゃんがそのずかんのぞき、

「キアゲハじゃない？」

と言いました。ぼくもにていると思いました。キアゲ

ハは、平地から高げんにいて、5〜6センチぐらいのアゲハチョウかのチョウです。お母さんが、

「雨があがったらとび立のかな。」

と言いました。お父さんが、

「羽がかわいたらとぶかもね。」

と言いました。サナギのかわからぬけだしたせい虫は、羽がのびるまでじっとしているそうです。

お父さんが、朝ごはんをたべ終わった後、ベランダにむかい、サナギのぬけがらを見に行きました。

そして、みんなに言いました。

「これは、サナギのぬけがらじゃなくてかれはだー」

かれはににていると思つたらほんとうにかれはだったの？ぼくと、お兄ちゃんとお母さんは、びっくりしま

した。

「うん。これは、かれはだよ。」

と、お父さんは言いました。もしかして、べつのところにサナギがあるのかなど、ホウセンカのいろんなところをしらべました。

ぼくと、お母さんは、インターネットで、アゲハチョウが羽化した後のぬけがらがぞうをさがしました。羽化するしゅんかんのどうがもありました。はっぱがつつになっているようなところから、アゲハチョウが出てくるしゅんかんを見ました。アゲハチョウが出たあとのサナギのぬけがらは、ぼくがホウセンカで見たのとはちがっていました。

「このアゲハチョウは、ここで羽化してないみたいだな。」  
お父さんは、考えていました。

お父さんが立ちあがって、アゲハチョウに近づくとアゲハチョウは、ふわふわとんでってしまいました。

アゲハチョウは、どこからやってきたのだろうか？と、ぼくは思いました。

ぼくは、アゲハチョウがどこからやってきたのかを知りたくて、もう一ちど、お母さんと一しょにホウセンカをさがしてみました。がぬけがらは見つかりませんでした。ベランダに立っていたお兄ちゃんが言いました。

「もし、ホウセンカでアゲハチョウが羽化したらアゲハチョウは、どうしてベランダの手すりまでとんできたのだろう。ホウセンカにとまっているんじゃないのかな。」  
「もしかして、手すりの近くで羽化したのかも。」

と、お兄ちゃんが、手すりの近くをさがしました。チョウチョのせい虫は、サナギになるばしょを、さがしてあるきまるため、町中のいがいなばしょで、サナギになっっていることがよくあるそうです。しかし、ベランダの手すりにもサナギのぬけがらは、ありませんでした。

「マンションの下から風につけてきたのかな」  
と、お母さんが言いました。だけど昨日から、今日の朝まで雨がふっていました。

チョウチョは、雨がふると、とぶのをやめて近くの木や、はっぱのうらがわなど、雨にぬれないところにとま

るそうです。しかし、昨日は、ベランダにチョウチョは、いませんでした。

アゲハチョウがどこからきたのか、けっきょく分かりませんでした。とてもとてもふしぎです。

もしかしてとなりのへやの人がつかまえてにがしたのかな。それとも、お母さんのたん生日を本当においわいしにやってきたのかもしれないと思いました。



小学生の部  
選考委員特別賞  
最相葉月賞

## 「つばめのピト」

兵庫県宍粟市立波賀小学校 四年

井平 夏鈴

は来てくれませんでした。やっぱり人がさわって人のおいがついてしまったらダメなのかなと思ってしまいました。

その間も、ひなは、親鳥をよんでいます。おなかがすいているのかパイパイと大きな鳴き声をあげています。かわいそうになって、げん関の上にあった古いつばめの巣に入れてやりました。そして、親鳥が気がついてひなにえさをやりに来してくれるのを待ちました。待っても待っても親鳥は、来てくれませんでした。ひなの鳴き声はだんだん小さくなり、今にも死んでしまいそうでした。つばめのひななど育てたことがないので、どうしてやったらいいのか心配で心配でたまりませんでした。

今年の七月の初めのことでした。夕方、わたしの家の庭に、一匹のつばめのひなが巣から落ちていました。もとの巣にもどしてやりたかったけれど、とても高くてもどしてやることはできませんでした。ひなが落ちた巣では親鳥が何回もえさを運んでひなたちにやっているから、このままここにおいていたら、きっと親鳥が気がついてえさをやりに来てくれると思っていました。でも、親鳥

ひなはおなかがすいたと必死で鳴いているように、わたしには聞こえませんでした。このままでは死んでしまうと思いました。そこで、わたしは、おじいちゃんの家でかっているインコのひな用のえさをぬるまゆでといて、「食べてよ、そうでないと死んでしまうで！」と言いながらやってみました。すると、すぐおなかがすいていたの

かパクパクと食べました。わたしは、これなら助かるかもしれない、育ててやりたいと思いました。

それから、つばめのひなにえさをやるのがはじまりました。家族のみんなが協力して、巣の所にきや立をたてて一時間ごとぐらいにえさをやりました。朝一番は、お父さんやお母さんが、朝学校に行くまでは、わたしやお姉ちゃんたちが、わたしが学校に行っている間は、おじいちゃんがえさをやってくれました。学校から帰ってきてからは、わたしやおじいちゃんが、えさをやりました。わたしは、つばめのひなに「ピト」と名前をつけました。家族のみんなが、「ピト、はい食べよ」と言っていてえさをやりました。

えさをやりながら分かったことは、ピトとよぶと羽をふるわせること、そして、頭をかたむけて口を大きく開けてわらったような顔をする事、おなかがいっぱいになると巣の中にもぐりこむこと、ふんをするときはおしりを巣の外に向けてすることなどがいっぱい分かってきました。げん関のドアを開けると、よく分かっていてパイ

パイと鳴いて、えさがほしいとねだってきました。あいさつもしてくれているみたいでした。毎日が、ピトではじまりピトで終わるようだと思いました。

そんなピトも十日ほどたつと、巣立っていききました。わたしたち家族は、ピトが自分の家族やなかまの所へ元気で飛んで行ったから、よかったなと思っただけで、何だかすごくさびしい気持ちになってしまいました。つばめが飛んでいるのを見ると、ピトのことを思い出してしまいました。

それから、一週間ほどたったある日、家の前の電線に、つばめがたくさんとまっていました。ひよっとしたらピトがいるかもしれないと、「ピト！」とよんでみました。すると、一匹のつばめがカーポートの屋根におりてきました。「ピト！」とよぶと、つばめの羽をふるわせたので、ピトだと思いました。

「ピト、おいで！」と手をさし出すと手のひらに飛んで来て、えさをやるというばい食べてくれました。名前をおぼえていてくれたこと、名前をよぶと来てくれたこと

が、わたしはとてもうれしかったです。

その日、また、ピトはどこかへ飛んで行ってしまいました。あれはきせきだったんだ、もうきせきは、おこらないと家族のみんなは思っていました。

それが、あのきせきの日から一週間ほどして、また、家の前の電線にたくさんのつばめが止まっていました。そこで、また、「ピト！」とよぶとパイパイと鳴いて羽をふるわせてこたえてくれました。そして、今度は直せつ手のひらに飛んで来てくれました。

それから、二回目のピトと家族との生活がはじまりました。電線になかまといっしょにとまっていても、「ピト！」とよぶと飛んで来てくれるようになりました。手にはドアを開けていると自分から入ってくるようになります。家の中では飛び回ったり、頭やかたのつたり、えさを手のひらで食べたり、本を読んでいると手にとまって話をじっと聞いてくれたりもしました。

ピトのえさが、ずっとひな用のえさばかりではダメ

だと思って、お父さんにワームを買ってきてもらってや

りました。すると、おいしかったのかいっぱい食べました。でも、調べるとワームは、するどい歯をもっているのです。おなかの中を食いちぎることもあると書いてあったので、心配でワームの頭を取ってピトにやりました。くもの巣から、くもをとってきて食べさせたりもしました。もう、ピトは家族の一員になっていました。ピトが外に帰るときはいつも、「ピト、あしたもね！」と手から飛ばしてやっていました。

でも、七月の終わり、いつものようにさよならをするとき、ピトはなかなか手から飛び立ちませんでした。やっと飛び立って、その次の日からピトはもう来てくれませんでした。

あとになって思うと、帰りたくなかったのかなと思った。南の方へ帰る前の日で、おわかれに来てくれた日だったのかなと思ったりしました。

わたしは、ピトが来なくなってからも電線にとまっているつばめを見かけると、「ピト！」とよんでいます。

これは、わたしだけでなくて、家族のみんなも同じことをしていたみたいでした。

ピトが来なくなって、さみしいのはさみしいけれど、楽しみなことがあります。それは、来年の春、ピトが帰って来てくれて、ピトが大きくなった巣でかわいいひなを育ててくれることです。きっと、ピトは、わたしの家に帰って来てくれるとしんじています。今はさみしいけれど、とても楽しみです。

ピトといっしょにすごしたことは、わたしも家族もずっとわすれません。



小学生の部  
選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

## 「ミャンマーで知った トイレの違い」

西武学園文理小学校 三年

増山 優雨

ミャンマー語は初めてで、文字はまるでほしブドウの集まりのように見えて、読めるか心配でした。あとは、料理のあじが口にあうか分からず、おかしをたくさんもって行きました。じっさいに、ミャンマーに行ってみると、行く前にはそうぞうもしてなかったことで、ぼくは一番おどろきました。それはトイレの違いです。

まずさいしょにトイレに行ったのは、ヤンゴン空港についたあと、町の中のレストランです。ごはんを食べ終わったあとに、おしっこがしたくなり、トイレに行ってみると小便用のベンキは日本と同じでした。でも、トイレの中のおいが気になったので、なんとなく個室をのぞいてみたら、ゴミ箱がおいであり、丸めたちり紙がずてであるように見えました。ぼくは、なんでトイレではなをかむのかな、と思いました。あとでおじに聞いてみると、丸めた紙はおしりをふいた後のティレットペーパーだということがわかりました。

次にトイレに行ったのは、市場です。市場のトイレでは、中に入るのに二百Kt's (十五円) をはらわなくて

八月一日〜七日、ぼくはおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんと弟と五人でミャンマーに旅行へ行きました。ミャンマーにはおじ、おばといとこが住んでいるので、遊びに行きました。ぼくにとっては初めての海外旅行です。ミャンマーに行く前にはガイドブックを読んでも少し勉強しました。ぼくは学校で英語を勉強していますが、

はいけませんでした。トイレに入ると、中はきれいだったので、きれいにそうじしているからお金をはらって使うのかな、と思いました。ぎやくに、お金をはらわないうトイレがどうなっているのか気になりました。

ホテルについて、とまった部屋のトイレが一番おどろきました。便器の横にホースがついていたので、トイレの水を流すためだと思いました。でもよく見ると、便器にはちいさなボタンがついていて、おしてみるとトイレの水が流れました。じゃあ、ホースは何のためにあるのだろうと思って、ホースをもっとみると、ホースの先にはシャワーがついていて、そこにもボタンがついていました。ボタンをおしてみると、いきおいよく水がでてきて、かべとゆかをぬらしてしまいました。おどろいてボタンから手をはなしたら、水が止まりました。その時はけっきょく何に使うホースなのかわかりませんでした。次の日に、おじいちゃんが、ウォシュレットだと教えてくれました。初めて使う人は、ぼくのように天じょうや、ゆかをぬらしてしまうそうです。そのあと、ミャンマー

にいる間に、何回かトイレに行きましたが、結局はホースを使うことはありませんでした。それは、むずかしいと思ったのと、何よりもぼくはきんちょうしたためか、ミャンマーで一回も便が出なかったからです。

日本に帰ってきて、毎日当たり前に使っている日本のトイレが、じつはすごいと気づきました。トイレに入れば、自動で便器のふたが開いて、すわると便座は温かく、用をたせば自動で水が流れます。ウォシュレットは優しい水が出て、おしりのかんそうもできます。ぼくは安心して、たっぷりと便をしました。

国によってトイレがちがうことは知らなかったのですが、お父さんとトイレについて調べました。

ウォシュレットは、アメリカで発明されましたが、日本のきぎょうが改りょうを重ねて進化しました。海外ではあまり普及していません。アジアやじょう国では、上下水道がはったつしておらず、人体に清けつな水がかくほできません。ヨーロッパでは、水の種類が硬水で、ふくまれている石灰せい分がかたまると、ポンプが故障

したり、ノズルがつまるためです。ぼくは、日本が清けつな国であることをほこらしく思います。2020年は東京オリンピックで多くの外国の人が日本にきます。ぼくがミャンマーでおどろいたように、外国の人も日本のトイレでおどろくかもしれません。外国の人とお話する時には、トイレのちがいについて教えてあげようと思います。



中学生の部  
大賞

「広島のある女子中学生の  
昭和二十年八月六日からの  
足跡」

京華中学校 一年

酒井 淳一郎

今年の夏休み、僕は、ボランティアで、近所の介護施設を訪れました。僕は、その時、いつもと違う目的がありました。それは、戦争について調べたいということでした。

僕の家は、外資系の会社に勤める父、元看護師の母、そして、僕たち三人の兄弟の五人家族です。住まいは違

いますが、岡山に、祖母が、そして、埼玉に祖父母がいます。しかし、全員、第二次世界大戦を知りません。僕は、敗戦して七十余年が、わずかな期間だと思えてなりません。だから、ほんの少し前まであった戦争について知らないことは、何か恥ずかしいことのように思えたのです。僕は、これから、その恥ずかしさを秘めながら生きてたくないと、ここ数か月、ずっと思って来しました。そこで、思い切って、お年寄りがたくさんいらっしゃる、介護施設で、仲良しのお年寄りから、戦争についてお話を聞きたいと思ったのです。

僕は、早速、将棋が好きな野村のおじいさんに尋ねました。すると、「淳ちゃん、だめだ。おじいさんは、家族五人、戦争で亡くしているから、だめだ。話したくないな。ごめん」との返事がありました。僕は、悪いことを聞いてしまったと思いました。また、あんなに明るいおじいさんが、実は、かなり苦しい経験をしていることに、ほんの少し気づきました。

「おじいさん、将棋、やろう」



僕は、断念し、次の人に尋ねました。内田陽子さんです。

「内田さん、僕、お願いがあるんですけど、戦争の時の話を伺っていいですか」

僕は、今度は、恐る恐る尋ねた。すると、

「いいよ。でも、うまく話せないかも知れないけど、それでも良い」との返答。僕は、安心しました。

内田 陽子さん。昭和八年（一九三三年）生まれ。現在、八十六歳。内田さんは、元々、僕の家近くに住んでいらっやいました。しかし、足腰が弱くなり、車椅子の生活になってしまい、家族も遠く離れているので、介護施設に入ったということでした。内田さんは、今から七十余年前の夏を、広島で過ごしていました。そして、昭和二十年八月六日、原爆投下の時、女学生でした。その日は、勤労動員で、働いていました。

これから、内田さんの話を、順を追って、述べたいと思います。

その頃、広島と言えば、広島と宇品の間に、電車道と

か、商店街、学校がありました。あとは、農作業をする場所でした。その多くは、蓮根畑でした。そして、橋を渡ってすぐのところは、比治山、駅からまっすぐ行っ

たところでした。ほとんどの人が、広島駅へ通って来ました。この電車道から上は、全部、陸軍の建物でした。お城が本部で、陸軍の兵隊がいました。そして、後に、

内田さんが逃げることになる、江波山は、その先でした。

内田さんのお宅は、初めは、街の真ん中、幟町（のぼりまち）というところにありました。出身小学校は、幟町小学校で、『千羽鶴』で知られた佐々木 禎子さんは、同じ学校の後輩でした。

僕は、佐々木さんのことも知らなかった。調べました。すると、二〇一六年五月二十九日の朝日新聞に、佐々木さんのことが、次のように、書かれてありました。

「平和記念公園に立つ『原爆の子の像』のモデルとなった佐々木禎子さんは二歳の時、広島島の爆心地から一・六キロの自宅で被爆。小学六年の時に白血病と診断され、闘病の末に亡くなった。鶴を千羽折ると願いがか

なうとの言い伝えを信じ、葉の包み紙などを使って千三百羽以上を病床で折り続けた。原爆の悲劇として国内外で広く語り継がれ、実物の一部は原爆資料館に展示されている」

僕とほぼ同じ年齢で亡くなった人だと知って、悲しく辛くなりました。どうして、こんなに早く、死ななければならぬのでしょうか。僕は、許せない気持ちがい

て来るのに気づきました。

内田さんの話は、続きます。その頃、この町には中学校がなく、内田さんは、翠町という蓮根畑の真ん中を、二百メートルくらい入ったところの、翠中学校に通っていました。街の真ん中が空襲になった時に危ないから、少しでも郊外がいいという訳で、海に近いし、逃げるのに都合がよかったので、両親が、翠中学校にしたのです。そのため、幟町小学校の出身者は、内田さんひとりしか、この中学校にはいませんでした。

「私は、行きたくなくてね。この近くに、山中女学校という女子ばかりの学校があったから、『お母さん、あそ

こへ行かしてよ』って言ったら、あそこは、危ないからだめだって言うのです」

広島を中心部は、空襲で危険だからという理由で、少し離れた中学校に通っていた内田さん。八月六日は、中学校の友だちと一緒に、勤労動員に出ていました。

#### 内田さんの仕事

内田さんが作業をしていた所は、原爆ドームから九百メートルほど離れた所でした。ちょうど電車道をはさんで、両サイドの周りの避難場所での作業でした。現『平和公園』の中に、中島町と言う、家がひしめきあう所がありました。その時に、その辺りを避難場所にするから、田舎へ行かれる人は行ってください、と言う命令が出て、何十軒かの家を、兵隊が壊すだけ壊しました。しかし、兵隊は、後の処理をしなかった。その整理作業をするというのが、中学一年生の作業だったので。

二、三、四年の上級生は、被服廠や兵隊のための缶詰を作る工場に行っていました。内田さんたち一年生は、

落下傘を縫う仕事がありました。ミシンを踏めない人たちは、何十軒もの家を壊した後の整理に行かされました。その中に、内田さんは、いました。

### 母親の仕事

内田さんの母親は、娘時代、電話局で、電話交換をしていました。そのため、当時も、福屋から二、三間下がったところの二階建てのちょっと広い民家に、方々の兵隊と連絡するために通信する電話交換台に行っていました。福屋は、昭和四年（一九二九年）に出来た、広島で初めての百貨店だそうです。

五、六十人の男女の従業員がいて、男の人はほとんど、外交でいろいろな所へ出ていきましたが、内田さんの母親のように、電話交換が出来る女の人は、二階の交換台にいました。

内田さんの通っていた幟町小学校は、そこに近かったので、夜は、決まって、そこへ行って、一緒に家まで帰っていました。なぜ、わざわざ寄ったかと言うと、そ

こへ行くと、軍が出入りしていて、兵隊が、お菓子を持って来たりしていたからです。

「私はうれしくて、いつも、母と帰りました。その日も、家へ帰るのに母と一緒に帰る。それが、最後の母の思い出となりました」

八月五日の夜の道が、内田さんは、母親との最後でした。内田さんは、さらに言いました。

「母は、八月六日の朝別れたきり、今日まで、全く行方不明のままです」

僕は、『行方不明』ということだが、内田さんのほんとうの気持ちだと、その時、思いました。内田さんは、まだ、母親が生きていると信じていると、思ったのです。探したら見つかるかも知れない。ひょっこり現れるかも知れない。そんな思いが、この『行方不明』ということばに出たのだと、僕は思いました。お母さんのことが好きだったのだろうと、思いました。

内田さんの父親も、電話局勤めでした。そして、その日、家に帰りました。しかし、三日後に亡くなりました。

何ということだろうと、僕は思いました。母親は、見つかからない。父親は帰って来たが、直後に亡くなる。僕と同じ年で、内田さんは、両親を亡くしたのです。どんなに不安だったのだろうか、どんなに寂しかったのだろうか、何度も思いました。

広島には、当時、コンクリートの建物は、日本赤十字病院とか電話局くらいしか、ありませんでした。普通の事務所は、みな、木造の民家でした。内田さんの母親の職場も木造の二階で、そこに上がる時、亡くなったようです。やけどをいっぱいして。

いつも、「おじさん、おじさん」と、内田さんが呼んでいた、母親の同僚の人が、「お母さんが二階へ上がる途中で、家がグシャッと来たからね。おそらく、その中で、死なれたのじゃろう」と、後で教えてくれたそうです。でも、職場には、何十人もいましたから、死体が誰の骨か分かりませんでした。そこで、内田さんは、それらの遺骨を、『平和公園』の隅にある、引き取り手のない無縁仏の慰霊塔の中に、一緒に埋めてもらっているそうです。

何とも複雑で、何とも頼りない遺骨で、と言いたいのをこらえているように見えました。

『追悼記念館』という六角堂が、『平和公園』の奥にあります。その中に、内田さんは、母親と姉の名前を載せてもらっているそうです。

「私も、死んだ場合には、そこに載せてもらうようになっています。永久保存の」

はつきりと、母親の遺骨がわかれば、もう少し違った埋葬の方法があったと思います。でも、それが出来なかった。では、せめて、母親やその同僚の皆さんと一緒に、死んだらなりたい。そんな思いから、自分も、無縁仏の仲間に入ろうと考えているのだと、僕は思いました。僕は、また、悲しくなりました。「お母さん」と、大きな声で叫ばせたくまりました。でも、どの遺骨に向かって叫んで良いか、内田さんには、今もわからないのです。内田さんの戦争は、もしかしたら、まだ終わっていないのかも知れません。

内田さんの八月六日

原爆投下の直後、内田さんは、兵隊に連れられて、江波山という所に逃げました。

「とにかく、火の雨が降る。まるで、鍛冶屋で火の粉が散るのと同じです。この二キロ範囲に、雨のように降って来たんです。木造だから、見る見る炎が立ってね、燃え出して。でも、私たちが家を崩して周りを整理した所は、真ん中の方は、火がないんです。でも、火の雨が降ったために、洋服は、全部焼けました」

ものすごく淡々と話す内田さんに、僕は恐ろしさを感じてしまいました。もしかしたら、限界を超えた恐怖を感じると、神経や感覚が麻痺してしまうものかと思いました。また、内田さんが気の毒になりました。僕と同じ年の内田さんが、かわいそうでなりませんでした。

「ところが、白い学生服を着ていた人は、その火をはねつけたから、全然焼けてないんです。その頃は、自由に並んでいますから、両サイドに、仲のいい子がいて、その子らは、お姉さんの学生服の白いセーラー服を着て

いましたから、その人の洋服は、焼けないのです」

原爆は、色を選ぶのだろうか、一瞬、思っただけではないことを思っていました。

ところが、内田さんは、大変なことになっていました。「私は、真ん中に立っているのに、見る見るうちに、もうもう、全部丸裸になって、ズロースというこっつい短パンみたいな下着だけが残っただけ。洋服が焼けるからと言って脱ごうとすると、もうこれが、一皮むけてね。皮がぶら下がって。血が、たらたら出て。怖いのと両方で、お化けみたいな格好になって。『お母さん』、『お父さん』って、みんな周りは泣き叫ぶ。そういう状態だったからね。服を脱ぐということも、全然出来なかった。もう見事に焼けました」

僕は、耳をふさぎたくなりました。こんなこと、起こって良いはずがない。服が脱げないで、人間の皮膚がむけるなんてことが。そして、皮膚がぶら下がるなんてことが。あつてはいけない。絶対にあつてはいけないと、心から叫びました。僕は、今までと違って、初めて、怒

りを感じました。怒りたくて怒りたくてしかたなくなりました。僕と同じ年の中学生が。まして、女子です。きつと、美しさに敏感だったと思います。そんな人たちを、むごい目にあわせるなんて、僕は、さらに、原爆が憎く感じました。

目の前で先生が

内田さんは、その時の様子を、こう語りました。

「原爆を落とされた時は、ピカーツと光って、火の粉が、雨のごとく降って来て。そして、何とも言えない、ドーンという音がした時、放射能のきのこ雲が、天へ上がって行くの。それを見た人は、みんな、ずらっと顔をやけど。私は、もう怖いばかりで、下を向いて、ああ、見たらいけない、見たらいけないって」

どんな顔の人たちを、内田さんは見ていたのでしょうか。見てはいけない顔、顔、顔。内田さんは、ずっと、下を向いたまま、話しました。

当日、登校していた生徒は、百六十三人いました。先

生が、丸太ん棒の上のちょっと高い所に立って、「今から出席を取りますよ、お返事してくださいね」と言った時、海の方から、B二十九が飛来しました。そこで、内田さんが、その飛行機を見上げた時、「先生、日の丸がないから、あれは、日本の飛行機じゃないです」と言う声がありました。「よその飛行機ですよ。どこか隠れる所を見つけないさい」と、先生がおっしゃいます。

すると、飛行機は、原爆ドームの上辺りを、お城の辺りから旋回して、一度、海へ向かって行きます。

「ああ、よかったね。広島は運がいいね。敵機が来ても、あわてて逃げたね。先生、よかったですね」と、誰かが言っていたら、去った飛行機が、また、来ます。

「ああ、今の飛行機です」と、また、誰かが言う。そして、先生が、「どこでもいいから、しゃがみなさい」と言われ、しゃがもうかと思った時に、原爆が、ドームの所に落ちて、破裂します。

「火の雨が降った時に、先生は、私たちの目の前で、バタンと倒れ、『先生、どうされましたか』と言った時は、

返事がなく、もう、即死でした」

何という死でしょうか。みんな、きつと、びっくりしたと思えました。それより、僕は、なぜ、内田さんが、原爆が落ちた時の話を、「過去形」ではなく、「現在形」で話すのか、よくわかりませんでした。でも、何か、そう話さなければならぬ理由があると、僕は感じました。

男女合わせて百六十人ほどの生徒が、先生を丸く囲みます。

「ところが、原爆ドームを背中に向けた半分の人、立っているんだけど。先生の後ろ側について、顔から前をやられた人は、全部じゃないですけど、半分以上は、先生と同じように、バタツと前に倒れていました」

内田さんは、先生と多くの友だちが、一瞬にして、何人も亡くなるのを、中学一年で目の当たりにします。人は、ひとり亡くなって、大騒ぎします。いや、悲しみも、驚きも、相当なものだと思います。僕も、伯父が亡くなった時、かなり悲しみました。伯父のやさしさがこみ上げて来ました。伯父の笑顔が、よみがえって来ました。

「大丈夫です。お母さんの顔を見るまで死ねません。連れて逃げて」

「よし」

そこで、内田さんたちは、兵隊について行くことになりました。その時のことを、こう述べます。

「我々の時代は、家から学校へ行ったり来たりくらいで、よそへ見学に行ったこともないし。一キロ、二キロ離れたら、もう大田舎くらいに思っていて。江波山へ行くと言われた時に、行ったこともないので、『江波山ってわかりません』って言ったら、四、五人の兵隊さんが、『僕たちについて来い』ってね」

当時の中学生は、今と違って、行動範囲が狭く、家から少し離れただけで、土地勘が無くなっていたようです。内田さんたちは、恐らく、藁にもすがる気持ちで、兵隊についていったのでしよう。でも、恥ずかしい格好で、気の毒でなりませんでした。

途中、青年が

そして、何日も泣きました。でも、内田さんは、それとは大きく違っていました。一瞬に、多くの知り合いを亡くしたのです。しかも、やけどだらけの中で。体の痛みと心の痛みの中、僕と同じ年の内田さんは、次の行動に出ます。

逃げる

内田さんが、顔を上げて、話し始めました。

「何とも言えない恐怖心で。怖いばかりでした」

先生が亡くなり、指導する人がいない状態で、内田さんたちは、どこへ逃げたらいいか、考えていました。すると、そこへ、お城辺りに本部がある、陸軍の兵隊が、どんだん、海の方へ向かって来ました。内田さんは、思わず、声をかけました。

「兵隊さん、どこへ逃げたらいいんですか。一緒に連れて逃げてください。もう、先生、亡くなったんです」

すると、兵隊は、内田さんたちの格好を見て、「その体で大丈夫か」と言います。

内田さんが、兵隊について歩いて行くと、二、三メートル離れた所で、屋根や柱がグシャツとなっている間から、十八、九歳の青年が、呼び止めます。

「兵隊さん、僕をここから出してください。足の方に何か乗っかってるから、出られないんです」

まだ、火が回る前でした。

「大丈夫か、引き上げて大丈夫か」

ひとりの兵隊が言いました。

「ここを、四、五人の兵隊が持つから、極力、足を出すようにしなさい」と、次いで、兵隊が言った時、大きな柱が崩れて、青年の足へ乗っかって、五寸釘と言う三十センチくらいの柱を支えた釘が、太ももへ刺さりました。僕は、耳を覆いたくなりました。痛いなんて、ものではないです。釘がももに刺さったのですから。でも、兵隊は、違いました。

兵隊が、「いいか、ひっぱるぞ」と言い、三、四人で、ぐっと引いたら、ギャーっ。青年は、大急ぎで、叫びます。

「ああ、もう止めてください」

「どうしたんだ」

「釘が二本刺さって、足が抜けません」

「それじゃあ、放っておいていいか」

「どうせ、僕は、もう、兵隊へ行く身でしたから。戦争で、だめだと言うことは、覚悟していますから。自力で出られなかったら、もう覚悟します」

僕は、覚悟ということだが、怖くなりました。戦争で死ぬのが当たり前の時代の意味が、改めてわかりました。その当時の青年の心構えだったのでしょうか。内田さんは、ただ、思ったそうです。

「ああ、かわいそう。あの方も、火の手が回らないうちに逃げられればいいけど」

でも、そんなことが無理なことを、内田さんは知っていました。僕は、自分が怖い目にあって逃げているのに、人を感じる持っている内田さんが、すごいと思いました。とてもやさしい人だと、その時、思いました。

同じ学校の子が

その時、後から、声がかかります。内田さんと同じ学校の子が、一生懸命、「陽子ちゃん、待って、待って」と呼ぶのです。

しかし、内田さんは、もう、体が全く動かないのです。後ろも横も見られない状態になっているから、その子が誰だか分かりません。それで、「ごめん、私の前へ出て。前へ出たら誰だか分かるから」と言うと、前に出たその子も、内田さんと同じように、体中、皮がむけて、血が出て、全く、誰だかつかめません。

僕は、どんな状態だったのか、想像してみました。のっぺらぼうが二人、向き合って、茫然としている姿が浮かびました。しかも、顔中、ただれた、のっぺらぼうが。僕は、痛くなりました。想像しただけで、目を覆いたくまりました。僕の心臓が、バクバクいていました。内田さんの話が、続きます。

そこで、内田さんは、友だちの手を持つとうとするのですが、お互いの手が、『赤身』で持てませんが、

「ああ、ごめんね、手が持てないね。あんたも、痛いだろう。持てないから、ごめんね」

「うん」と言うや否や、よほど不安だったのか、その子は、内田さんのズロースをつかみました。すると、ゴムが、ピュピュピュと伸びました。その子は、背が低いので、足幅がその子より広く、歩くのも一足速い内田さんに、はっはっはっはっと言って、ついて来ました。

内田さんは、急いで言います。

「ごめんね。このズロースが下へ下がったら、私の手は、もう、こんなになっていくから、上へ上げられないから、ごめんね」

その子は、あわてて、「悪かったね、ごめんなさい」と言って、手を離しました。すると、その子は、体力もなくなっているのに、内田さんが、「この兵隊さん、見て来るんだよ。来てる」と声をかけても、「ふん、ふん」と言うばかりで、その声も、だんだん遠くなり、その後、消えてしまいました。

内田さんは、こう言いました。

「私の頭の中が、真っ白になってね。とにかく逃げることを考えてた」

この頃は、やさしい内田さんも、恐らく、疲れと痛みと恐怖で、人どころではなくなっていたのだと、僕は思いました。こんなにひどいやけどを負いながら、歩きまわることなど、出来るはずありません。いや、してはいけないと、僕は思いました。

仲良しの子も

内田さんは、その後も、どんどん歩き、その子が消えた後も、兵隊だけ見て、ついて行きました。そして、無事に、江波山に逃げました。

「その後は、もう、行くのが嫌だから、一度も行ってないのですが、頂上は、あまり大きくなかったのを覚えてます。小さい山なんです」

どんどん行くと言っても、行けるはずありません。やっと歩いて、気づいたら、山の頂上に着いたというところだと、僕は思いました。

内田さんが頂上上がったら、足の踏み場もないくらい、びっしり、内田さんたちと同じ状態の大人や子どもが、土の上にへばりついていて、「水ください」、「水くれ」、「兵隊さん、水ください」と言っていました。兵隊が、大勢いたのです。

江波山には、ポンプで地下水を汲めば、水が出る所が、何箇所もありました。また、山火事が起きた時に消すためのバケツも、たくさん置いてありました。内田さんも、上がって、「水ください」と言います。すると、「お前たちは、学校まで帰るんだらう。お母さんに会いたいだらう。今、その体で、水を飲んだら、死んじゃうから。飲んだら、だめだ。ここまで我慢したら、我慢しなさい」と言われてしまいました。

八時十五分に被爆して、山へ上がった時は、十一時を回っていました。三時間の逃避行ということになります。だから、「我慢せい」と言われても、内田さんは、もう、のどが、ガラガラして、我慢出来ませんでした。そこで、「兵隊さん、大丈夫ですから、お水ください」と言った時、

五、六十人が、ずらっと並んでいた一番奥の方から、家庭科の先生が、「分かる、先生が分かる」と尋ねて来ました。先生は、あまりやけどをしていなかったので、「分かります」と答えました。

僕は、内田さんが、先生に会えた時、どんなにうれしかったか、安心できたか、想像できませんでした。よく見ると、そばに、先生が倒れないように、必死で支えていた女の子がいました。内田さんには、その子が、誰だか、すぐ分かりました。大の仲良しの川岸さんだったからです。

僕は、「良かったですね、内田さん」と、声を出してしまいました。話は続きます。

放射能の灰を浴びた時、逃げる方向に、雨が降りました。放射能を浴びた上に、雨が降ったから、黒い雨になって、それで、灰をかぶって、真っ黒になった顔。やけどをしていないのに、真っ黒になった顔へ、雨が当たるから、まだらになっていました。しかし、手が動かさないから、ぬぐう訳にもいかない。

川岸さんが、「ああ、よかったね」と言った時、先生が、「言ったらいけないよ。言ったらいけないよ」と、内田さんにサインを送ります。内田さんは不思議に思っ、じっと見ます。すると、川岸さんの顔は、原爆を正面から受けたようで、風船のように、鼻の高さがないくらい腫れ上がって、まぶたも、奥目が、チョロツと、奥の方に、微かに見えるぐらいしか、目が開いていないのです。唇も、上下重ねたような顔になっていました。

内田さんの驚きは、どのくらいだったのでしょうか。僕は、さっき声に出してしまったことばを、飲み込みたくなりしました。

川岸さんが、言いました。

「ごめんね。灰をかぶっているのに、私の顔が、よく分かったね」

「私も、こんなんだから、顔をきれいにしておられないから、ごめんね。お家へ帰って、お母さんに、きれいにしてもらおうね」

「うん、でも、助かってよかったね」

「ごめんね」の繰り返しです。誰が悪いのでしょうか。内田さんも川岸さんも、全然悪くないのです。僕は、「謝る必要なんてないよ」と言いたくなりました。

#### 大きな風呂敷で

十一時過ぎぐらいに、内田さんたちは、兵隊から、「もう焼けないと思うので、お宅らの学校は、帰ってもいいでしょう」と言われ、山を下りました。山を下りると、そこは、漁師の町でした。海苔やカキの養殖をする海と商店街。ちょっと先に、『三菱飛行場』がありました。両サイドは、漁師の町でした。

すると、おばあさんとおじいさんが出て来て、尋ねました。

「どこであつたんか、そんなふうなやけど」

「市内で作業してて、焼けたんですよ」

「大変な爆弾にあつたな。高校生が、いっぱいこっちへ来るけれども。大きな爆弾が、いっぱい落ちて来たんか」  
おばあさんたちには、爆弾が、ひとつだけ落ちたとい

うことが分からない様子なので、内田さんは、こう答えました。

「落ちて来たのは分からないけど。私たち、こんな格好になりました」

すると、おばあさんが、言いました。

「それでは、熱くて、やけどが、痛いだろうから、待ってんさい」

そう言うなり、家の中に入って行きました。その家は焼けておらず、中から、座布団を四、五枚入れる唐草模様、木綿の大きな風呂敷を持って来ました。

「それでも、ちいっとは違うかも分からん。洋服がないので、着せてあげられないからね」

そう言うて、その大きな風呂敷で、ちょうど、足元まで隠れるようにしてくれました。

「おばあちゃん、ありがとございました。この風呂敷は、もう返しに來れないけど、元氣になったら、お母さんと一緒に、お禮に來ますから」と、内田さんは、礼を言い、帰りました。何とか、裸から解放されました。

#### 伝馬船

帰りしな、おじいさんが、言いました。

「漁に使う十四、五人乗れる伝馬船がある。それに乗せて渡してやるから、そしたら、燃えない所を、ずっと通って、あなたの学校の方向の、翠中学校という所へ帰れるだろう」

逃げて来たみんなで、船に、やっと乗り込むと、おじいさんが、さらに、言いました。

「みんな、動いたら、だめだぞ。一番やけどをたくさんして、動けない人を、真ん中に乗せてやって。元氣な人は、船の縁を持って。あなたら、こんな船に乗ったことがないだろうから。しっかり持っていないと、波を起こして揺れると、振り落とされたら、もう、絶対助けに行かないぞ」

すぐ先は、川ではなく、海でした。だから、内田さんたちは、「分かりました」と言うて、内田さんたちやけどをした者が真ん中に、怪我ややけどの軽い人が、縁を持って立ちました。まだ、十人ほどしか乗っていないかっ

たので、空きがありました。

そこへ、どこの学校の上級生の男の子か、みんなが逃げる方へついて逃げれば、安全だと思っただのか。とたーっと、五十センチくらい離れているのに、飛び乗りました。そうしたら、さっき言われた通り、船が揺れて、「貴様、何事だ」と、おじいさんに怒鳴られました。その時、四、五人が、振り落とされ、見る見る、沖へ流されました。今だったら、大問題です。でも、「それも、戦争で、片付けられてね。もう、そういう状態。」

せつかく助けられたのに、たった一人の行動で、新たな死を生む。それも、戦争なのでしょう。内田さんは、幸いにも、見ず知らずのおじいさんのおかげで、対岸に上げてもらいました。こうして、内田さんたちは、学校まで戻って来ました。

友だちのおじいさんの家に

内田さんは、やっこの思いで、翠中学校に辿り着きました。ほとんどの父親が、戦争に行つて、いないので、

祖父母や母親が出て、待っていて、「うちの子はいますか」と、尋ねて来ました。しかし、百六十人ぐらいいた生徒が、五十人足らずしか帰っていませんでした。そこで、「分かりません」と答えると、「ああ、それじゃあ、後の便を待とう」と言うていました。

もう、夜の七時頃になっていたので、親が来るまで、体育館の中で、いつまで寝ていても、いいからと、言われました。

山口さんという友だちの家が、学校の辺りにありました。山口さんは、『平和大橋』を渡った、比治山の近くで、米屋さんをしていました。しかし、両親と弟妹が、即死。丸焼けになり、全然、逃げる余地もなかったようです。でも、おじいさんが助かったので、学校へすぐ、「孫を迎えに來ました。助かって、帰っているんでしょうか」と言うて来ました。

友だちの山口さんは、白いセーラー服を着ていたので、やけどをしていませんでした。そして、もう、ひとり。横山さんと言う、内田さんの家から、四、五メートル離

れた所の友だちも、姉のお古の学生服を着ていたため、頬をやけどしただけで、そこにいました。

おじいさんが、尋ねました。

「陽子ちゃんと、この子たちは、違った場所にいたの」

「ううん、並んてた。私は、真ん中において、両側に、横山さんと山口さんがいたんですよ」と、答えました。その時、黒い洋服を着ていたので、焼けたと言うことが、内田さんにも分からなかったそうです。

その時、おじいさんが、言いました。

「まあ、いい。先生、この子らは、いつも、家に寄って帰る子だから、家へ連れて帰ります。親御さんが来られたら、私の所にいるって、言ってください」

そして、家へ連れて帰りました。

内田さんにとって、その老人は、馴染みのある人でした。「なぜ、そのおじいちゃんを、よく知っているかと言うと、私も、鍵っ子で、両親が働いていて、五時を過ぎないと帰らない。学校の帰りに、おじいちゃんの所へ行くと、蒸かしたお芋さんとか、何か食べる物があるので。

それがうれしくて、お友だちと一緒に、いつも、寄っていて。おじいちゃん、おばあちゃんと仲がよかったのです」

「昔は、とても人に親切な時代。だから、親御さんが来るまで、うちで預かっておきます、と言って、連れて帰ってくれたのです」

懐かしそうに微笑む内田さんの顔が、そこにありました。

内田さんは、その後、上を向いて寝たら、布団が血でどろどろになると思って、自分なりに伏せて、「もう、ボタン、キュー」というふうに寝てしまっています。すると、夜の七時頃、おばあさんが、「重湯を作ってやるうか、何か食べたいか」と、言ってくる。内田さんは言います。

「いりません、お水ください」

「水でいいの？」

「水でいいです。水ください」

そうして、お水を飲みました。

内田さんは、鉢巻をして伏していました。

「なぜ、これを外してくれなかったのかなど思っていたら、理由があったのです。それは、身内、私の母や六

つ違いの姉が、伝え聞いて、ここまで、私を訪ねて来た時に、私の姿を見ても分からないだろうと考えたからなのです。鉢巻の中の頭は、根元から全部、髪の毛が抜けていたんです。長い髪をしていましたが、全部、抜けていました」

僕は、毛の全くない女子の頭を想像して、身震いしました。そんな姿を、本人も親も見たら、大変だと思いました。

#### 伯父の家へ

友だちの横山さんは、起きると、「陽子ちゃんのお家へ行って、誰かいらっしゃるか、おじさんなりおばさんなりに聞いて、報告しに行きますから、先に帰ります。元気ですから」と言って、頬しかやけどしてないので、その日のうちに、家に帰りました。

しかし、内田さんは、十日経っても二十日経っても、誰も迎えに来ませんでした。「ああ、やっぱり、私のことが分からないのかしら」と思っていると、山口さんのお

じいさんが、「心配しないでいいぞ。いつまでいてもいいんだから」と、言いました。

そして、二十日過ぎた頃、やっと、内田さんの姉が迎えに来ました。母親は、八月九日の朝、別れたきり行方不明でした。そこで、姉が迎えに来て、「お世話をかけました。後で、ゆっくりお礼に来ます」と、おじいさんに礼を言って、内田さんを、伯父の家へ連れて帰りました。

内田さんの叔父の家は、内田さんの家より二、三メートルしか離れてない所でした。母の妹になる叔母が一人と、母より三つぐらい上の叔父と、三所帯が田舎へひいた人の家を買って、昭和十九年の終わり頃から、そこへ住んでいました。ようやく、内田さんは、親戚の家に帰ることが出来ました。僕も、少し気持ちが楽になりました。

#### 姉

八月六日、内田さんの姉は、内田さんがいた所から二百メートルぐらい海に寄った方にある、日赤病院の隣りの貯金局の三階にいました。やはり、どちらかの方を向



いて、仕事をしていたので、顔の半分を、やけどしてしまいました。

今のガラスは、ぶつかって割れたら、粉々になります。しかし、昔のガラスは、割れたままの破片が飛び散りまじりました。姉は、厚いガラスの破片が、胸に、グサッと刺さっていました。刺さった所が、もう少し下の心臓だったら、即死でした。しかし、やけどもしていたので、三階にいたから、逃げなければいけないと考え、階段で下まで降りました。

「そんなに火が回っていないから、とにかく、降りなきゃいけない」

降りる階段では、こと切れた人が、団子になって、階段をつぶすようになっていました。でも、転がり転がり、姉は、一階まで、やっと出ました。

そして、隣りが日赤だと思い、病院へ駆け込むと、先生たちも、ほとんど、即死でした。手術するにも、手術台もない。すると、兵隊が見つけ、軍医が来ました。

「とにかく、ここじゃ、手術も出来ないし、手当ても出

来ない。すまないが、ガラスって言う物は、肉が盛ったら、上へ出ますから、このままにしておいてください」

針が刺さったのなら大事で、それを切って出さないといけないが、ガラスは大丈夫だと言うのでした。その後、姉に刺さったガラスは、取れました。しかし、痛かったし、辛かったと、僕は思いました。

やけどもしていないのに

内田さんが、完全ではないながら、起きられるようになったのは、翌年の二月の終わり頃でした。そこで、元気になりましたと、学校へ挨拶に行こうと思いい、横山さんを誘いに、朝早く、横山さんの家へ行くと、横山さんは九月いっぱいまで亡くなったと、言われました。

「そのことを、私に言って、私まで死んだら、お母さんが帰らないのに、困るから言わなかったと。横山さんは、やけどしてないんですよ。頬だけしか、やけどしてない」

「それじゃ、山口さんとは言ったら、やはり、山口さん

も、同じように、亡くなったって言うのです。私みたいな、たくさんやけどしているのが死ななくて、なぜ、横山さんや山口さんが亡くなったのか」

握りこぶしを作り、憤りを隠せない内田さんでした。

### 痛い治療

隣りの町内会の世話役の人が、叔父に、「二百メートルぐらい離れた所の中学校へ、治療に連れて行ってあげなさい。でないと、肉が腐ったら、生きるものも生きられないから」と、勧めてくれました。「軍医が来て、診てくれるから」と言うので、内田さんは、伯父に連れられて行きました。すると、校庭にびっしり、内田さんのような状態の人が、並んで待っていました。男の子、女の子、男の子と言うように、何列も何列も並んでいました。治療を受ける時、兵隊が、言いました。

「足を踏ん張って。とにかく、痛くても我慢するんだぞ」

「その当時は、兵隊と言うのは、先生以上に怖かったです。だから、『はい、お願いします』って言いまし

た。」

初めての日は、冷たいガーゼを大きのまま固めたのを、消毒する人が、まず、バケツの中に浸けて、それを、みんなに、順番に、どんどんつけて、赤チンと言う真っ赤な怪我薬もつけました。次の兵隊が、また、大きいままのものをジャボンと浸けたような、消毒したガーゼの広いのを持って来て、最後の治療の終わった者から、ペタペタとつけました。だから、背中を、腰から上は、二枚ぐらいの大きいガーゼを、ペタペタと貼ったり、大きのままのものを、ぐるぐる巻きにして消毒したのを、最後に、ひざの辺りから足の先までを、ぐるぐるっと巻いていました。

初めての日は、内田さんは、冷たくて、とても良い気持ちでした。

「兵隊さん、やっぱり、生きとって良かったと思えますよ。気持ち良かったですよ」

「うん、明日も、頑張ってるんだぞ」

翌日、内田さんが行くと、「頑張ってる、歯をくいしばっ

て」と、兵隊から言われました。  
「お化けみたいな格好しているから、頑張りようがないですね。それで、『はい、分かりました』って、歯だけくいしばって」

初めの男の子がやっている時に、「やめろ、やめてくれ」と、その子が叫びました。なぜかと言うと、ゲーゼがべたべたと、赤身にくっついていきます。それを剥ぐのです。

「剥がないで、もう、この上から、薬を流してくれ」と、男の子。

見ようにも、内田さんは、首が、思うように動けなくなっているのを、横を向けません。だから、「昨日は、気持ち良かったのに。何で、あんなこと、言うのかな」と、思っていました。さあ、内田さんの番になりました。「歯をくいしばって、足に力を入れて。」すぐ、首から腰まで、バリバリと、一緒に剥いだのです。すると、また、赤身が出て、血が、だらだらと出て来ました。その剥ぐのを、「うーっ」と言ったまま、「兵隊さん、ごめ

んなさい。ここだけ剥がさないで。お薬を上から流してください」と、内田さんも言いました。

すると、「あそこを見ろ」と、兵隊が校庭の隅を指差しました。そこには、井形に丸太ん棒を組み立てて、何段階かにしている上に、治療をする中、息絶えて亡くなった人が、積んでありました。ぼんぼん、ぼんぼん。札をつけて。親と来ていない限りは分からないので、そのまま、もう、ぼんぼん、ぼんぼん、捨てて行きました。そして、「あれを見ろ」と言うので、向きを変えて見たら、もう、何人か治療を受けた後、こと絶えて死んでいる人が、いました。

「あれを見ろ」

「はい、あんなになりたくないです。お母さんと、また、会いたい」

「だったら、我慢しろ」。

内田さんは、我慢して、治療を続けました。僕は、話だけで痛くて、苦しくなりました。呼吸がしにくくなりました。

広島中の広場が、焼き場

今、広島には、大きな焼き場がありますが、昔は、町外れに、小さな所しかなかったので、被爆した人を焼く所が、ありませんでした。そこで、広島中の幼稚園の公園、小学校、中学校、町の公民館の縁の方に、広い広場があったりすると、そこで、死体を焼いていました。何十万の人を。

治療をして、四、五日経った夜、内田さんの体に、ハエがとまるようになりました。しかし、自分で追い払うことが出来ないから、ハエがとまると、暖かいので、すぐ、卵が肉の奥の方へたまり、朝起きたら、びっしり、ウジ虫がかえっていました。それを、今度は、叔父と叔母が、缶詰の空き缶と割り箸を持って、取ってくれるのが日課で、これも、何日ぐらい取ってもらったか、覚えていないほど取ってくれて、庭の隅を掘って、それを埋めてくれました。

僕は、情の篤い、内田さんの叔父さん、叔母さんに、ありがたうと、心の中で叫んでいました。内田さんの命

は、こうして守られたのだと、しみじみ思いました。

叔父の家を出る

内田さんの叔父の家には、こどもが六人いました。「だから、自分の子を食べさせて、被爆者を食べさせて、服を着せて学校へ行かすと言ったら、大変なことだった。それを、姪が、何ほ可愛いからと言って、学校まで通わせてくれるような身内は、なかった」

内田さんは、何とか、体が治るまで、叔父の家に置いてもらい、起きれるようになって、よそへ行く所がないから、お手伝いしながら置いてもらっていました。しかし、その頃は、お腹がへって、「ああ、やっぱり。もう、自分が働いて、食べていかなきゃいけない。ここに、いつまでもいたらいけない」と、思うようになりました。そして、出ました。

目ざしたのは、広島駅。広島駅は大きな駅だったので、そこに、浮浪児が夜通しいて、追っ払って家へ帰れと言っても、いっぱいいました。内田さんも、一週間ぐらい、そこにいて、座って過ごしたことが、ありました。

でも、誰も、迎えに来ませんでした。  
ある時、見知らぬ、おじいさんとおばあさんが来て、  
内田さんの隣りに座りました。

「あなたも、お家の手伝いしなきゃいけないのに、食べる物がありませんよ」

よほど哀れに見えたのでしよう。内田さんに、おにぎりをくれました。おじいさんは、梅干しが入ったのを、三つぐらいしか握って来ませんでした。しかし、それをもたらった途端に、小さいこどもが、ダツと寄って来て、でも、「くれ」とは言わないで、指をくわえて、物欲しげに見ていました。

内田さんは、「ああ、かわいそうだな。この子らも、親がいないんだろう。真っ黒い顔をしてる。お風呂も、何日も入ってないんだろうな」と思いました。そこで、「これ、あんたに、全部はあげられないけどね。お口へ入れたいからね。あるだけは、あげるよ」と言って、分けました。すると、隣りのおじいさんもおばあさんも、身を捜しに来ていたのに、内田さんのまねをして、残り

のおにぎりを、他の子にあげました。

内田さんが、涙をこぼしました。

「そしたら、涙を流したの。小さい子がね。今は、ああいう子は、いません」

その後、内田さんを、姉が迎えに来ました。内田さんは、その時、改めて思いました。

「早く大人になって、自分で稼いで食べることにしか、考えていませんでした」

内田さんの願い

インタビュ어의終わりに、内田さんが僕に向かって、  
言いました。

「昭和十九年から二十年の間は、日本中が戦争でした。外地だけが、戦争ではない。また、原爆だけが、ひどいのではないのです。国内では、大阪も大空襲、東京も大空襲、あちこちであったのです。みんな、大なり小なり、犠牲になっています。私が話した言葉を、後世に残してもらいたいと、思います」

内田さんの語気は、荒かったです。

僕は、思いました。内田さんは、自分自身、原爆の怖さを知り過ぎています。しかし、それなのに、原爆だけに留めず、どんな戦争も、この世から無くさなくてはならないと、強く伝えようとしたのだと、僕は思います。

内田さんが経験された戦争は、原子爆弾という、戦争の中でも、最も『地獄』に近い辛苦だったと思います。しかし、内田さんの周りには、極限状態の中でも、優しい人が溢れていました。内田さんは、度々、「多くの人が助けてくれたからこそ、生きられた」と、おっしゃっていました。

内田さんは、どんな時でも、人は、やさしさを持っていなければならないということも、伝えたかったのだと、僕は思います。

今回の経験は、自分にとっても、日本にとっても、重要な意味を持つと思います。僕は、学校でも、教科書や資料集の写真を通して、戦争が悲惨な結果をもたらしたことを、教えられてきました。けれども、無論先生は戦

争を経験しておらず、話が具体性に乏しいため、どうしても印象に残りません。だから、今回の経験をやるまで、僕は何時も戦争が、別世界の出来事のように思えてなりませんでした。

戦争は、悲惨です。しかし、いつでも、起り得る蛮行です。僕は、戦争を望まないのに体験せざるを得なかった人たちから話を伺い、後世に残す作業を、続けて行くこうと、強く思いました。それが、戦争の『地獄』を味わうことなく、平和に暮らしている僕たちの義務だと思っからです。

(おわり)

注

登場人物は、すべて仮名です。僕は、被爆者に対する偏見が、まだあると思うからです。今は、偏見がなくなることを、そして、何より、原子爆弾が、地球上からなくなることを、心から願います。

## 佳作

## 「見えない光のその向こう」

(全盲のセーラー岩本光弘さんと私の1年間)

## ―病氣と闘う私自身への応援歌―

青山学院中部部・一年

## 座間 耀永

「未来が見えない。もう生きてたくない。」

好きだった天草の海。橋に足をかけた。

「死にたい。」

生まれつき弱視だった少年。十三歳から視力を失い始め、十六歳で全盲になった。絶望感で身を投げようとする。あなたはそのような絶望感を感じたことはあるか？人生

の喪失感を身に染みるほど味わったことがあるか？私は、このど真ん中だ。この空虚感。やるせない気持ちと闘う日々。健康な人にはわかるまい。

「何故、自分が。」

私の人生は、三年前の二〇一七年春一変した。「初見あり」と書かれた健康診断の結果表。たった一枚の薄っぺらな紙から。そして、今、なお、自分の身体が急速に悪くなっていく状態と必死で闘っている。この辛さや悔しさ、虚しさは、今握っているペンが震えるほどだ。

しかし、今はその少年の話に戻ろう。私はこの人と出会って、「絶望を希望に変える勇氣」を教えられた。

その彼は、現在、五十二歳。今や、押しも押されぬ時の人。「世界初、全盲でありながら太平洋横断に成功をしたセーラー」として、二〇一九年八月、内閣総理大臣賞（海洋立国推進功労者賞）を受賞した岩本光弘（ヒロさん）氏。彼は六年前、二〇一三年六月福島県小名浜港から彼の住むサンディエゴに向けてヨットで太平洋横断に初挑戦。五十五日の航程を予定。しかし、わずか六日

目で鯨と衝突。浸水してきた船を放棄。荒れ狂う海を救命ボートで漂流。危険な海峡で、自衛隊が決死の救出。

「全盲なのに何て夢を持ったんだ。」

と激しく世間からバッシングされた。特に、セーリングのパートナーがニュースキャスターの辛坊治郎氏だったため、

「二十四時間テレビを利用した売名行為だ！」

「営利目的だ。」

など、ありとあらゆる攻撃を受けたそう。その記憶が新しいからか、今回の出発前も彼を批判する人も多かった。しかし、今やどうだ？「勝てば官軍。」成功した瞬間に、あれだけヒロさんをバッシングしたマスコミは、まさに手のひらを返したようにはやまず。ヒロさんの尊敬すべきところは、決して、浮かれたりしないことだ。一度、会えばわかるが、ヒロさんは謙虚な方だ。そして、穏やか。明るい。冷静。何よりも、いつも人々や環境、自分の境遇にさえ「感謝」を忘れない方で、私はこのお人柄を何よりも尊敬している。

一方、マスコミは、ドラマ仕立てで彼を放映する。私は、この一年間、彼と彼のサポーターがどれだけ崇高な人たちなのか、をずっと見てきた。ヒロさんは視聴者が感じる以上に謙虚で誠実な方だ。報道では伝わらない、そして謙虚すぎるヒロさんが語らない誠実さを心からみんなに知って欲しい。彼のことを書く、と決意した理由はもう一つある。彼の優しさに感謝していること、だ。優しさとは、私の気持ちを含んでくださっていることに尽きる。私は自分の身体のことをヒロさんには話していない。全盲のヒロさんの方が私より大変だと思っているからだ。ヒロさんは、目が見えない分、他の感覚が恐ろしく鋭い。時々、

「本当に目が見えないの？」

と聞きたくなるほどだ。そんな彼だから、私の「闘い」に気づいていると感じている。しかし、彼はそのような素振りは見せない。私の気持ちを尊重して下さっているのだ。全盲という暗闇の中で生きながら、人々への勇氣の光をそそぐヒロさんへ、私は限りのない畏敬の念を抱く。

ーヒロさんとの出会いー

私とヒロさんの出会いは一年弱前に遡る。(二〇一九年十月現在。)私が「ボランティアセラー」になりたい、と思ったことがきっかけである。私は身体のことがかかる一年前、四年生の時からヨットを始めた。運動が苦手、何か一つくらい運動できるものが欲しい、学校の友達がやっていそうもないスポーツ、ヨットを迷わず選んだ。父は昔ヨットマンだったので、教えてもらえる、と思ったことも大きい。私が、

「ヨットをやりたい。」

と言った時、父は本当にうれしそうだった。

ロープワークはあつという間に覚えた。しかし、ヨットで重要なのは自然を読む力だ。風の向き、強さ、潮の流れ、潮汐、うねり。地形も関係する。海況は月の引力から非常に影響を受ける。理科の授業で習った月の満ち欠けを、まさに実践しないといけないのだ。しかし、理屈はわかってても、実技は難しい。特に、風向きを読み、そこへセールを合わせていくことがなかなかうまくでき

ず苦しんでいた。

私の所属する、「ジュニアヨット教室」では、毎年、一月に「交流レガッタ」がある。江の島をベースにしている「特定非営利活動法人セイラビリティ」の方々とレースをする。このセイラビリティは心身に障害がある人たちを対象にヨット活動をしている。私は衝撃を受けた。様々な障害のある子供たちのスキルが恐ろしく高いのだ。五感が優れているのか、微妙な風をとらえてヨットを操作する。もちろん、彼らをサポートするボランティアが上手く伴走しているのだが、それにしても彼らは、「自分が勝つ」という意気込みが私の何倍もあった。脳性小児麻痺と思われる女の子はお父さんと共に車いす乗艇し、二人ですいすい風を切る。あつという間に抜かされた。何でも世界ランクに入っているらしい。本当に驚いたなんてものではない。ダウン症の男の子は、セーリング中ずっとにこにこ満面の笑顔。心からヨットと海を楽しんでいた。しかし、順位を落とし、結果に納得ができなかったらしい。悔しくて悔しくてレース後から、

表彰式まで数時間、ずっと泣いていた。「まだ泣けるのか。」そのパワーたるや、圧倒された。「勝ちたい。」悔しい。」という、純粹な気持ち私にはすごく新鮮だった。私は上手くできないと、すぐ、

「面倒くさい。」

「今日は辞めたい。」

と安易に考えてしまうのが少しばかり恥ずかしくなった。「これはパラリンピックが楽しみだ。」  
と思った。応援に行く気がみなぎった。

だが、二〇二〇年東京でのパラリンピックにセーリングは外された。何でも受け入れ体制が整わないらしい。日本は世界有数の海洋国でありながら、ヨットは身近ではない。まことになげかわしいことではないか。

同時期、もう一つ、日本が障害者後進国だと思った出来事が重なった。二〇一八年の夏、ダニエル・ス・イノウエ国際空港(旧ホノルル空港)にて。私は雑誌を購入しにお店に入った。手前のレジが並んでいたので、誰も並んでいない奥のレジに向かった。

「あれ?」

レジの男性は昼間、店内にも関わらずサングラスをして椅子にどっかり座っていた。

「ちょっと変だな。」

と思いながら、

「Hello」

と言って雑誌を出した。すると彼はニコニコしながら両手を空中に出し、何かを探した。どきり、とした。おそれるおそれる彼の手に雑誌を渡す。彼は相変わらずほほ笑みながら雑誌をひっくり返したり横にしながら、機械にバーコードを何とか読ませた。機械が、「十二ドル」と言う。私は、二十ドル札を彼に渡した。彼が 아이폰でお金をスキャンする。「二十ドル」と機械が言う。彼が機械にドルを入れお釣りが出る。そのお金をお札とコインに分けてコインを手探りで大ききこに分ける。また 아이폰で読みとり、お釣りの金額を確認。それを手で丁寧に集めて、彼は、

「Thank you。」

と言って私に差し出した。私は思わず両手で受け取った。そして慌てて、私も、

「Thank you.」

と言った。彼は相変わらず、ずっと笑顔だった。

「Have a good day!」

と元気に言われ、

「You too.」

と言うのがやっとだった。その間、おそらく数分。私は彼の一举一動を吸い込まれるように凝視していたに違いない。

「アメリカってすごいな。」

とドキドキした。日本はどうか？身障者があんなに楽しそうに、誇りをもって堂々と働いているか？歩きスマホで白杖者につつからないように、という広告ポスターがある国は日本だけじゃないのか？海洋国でありながらパラリンピックにセーリングが開催できない残念さどあいまって、ふと、

「ボランティアセーラーをやるう。」

催されるフロートイングヨットショーの特別イベントでヒロさんが来日講演をすることがわかったのだ。私は興奮した。父はヒロさんと以前会ったことがあったが、直接コンタクトするより、ヒロさんの支援者の一人である谷本卓哉さん（株式会社大広、戦略情報室）を通じて連絡を取った方がいいとアドバイスしてくれた。父と谷本さんは仕事やヨットで交流が深いとのことだった。私は早速、谷本さんにメールを出した。「講演の後、インタビューをさせていただけますでしょうか。」

今から思えば、図々しかったかもしれない。しかし、その時は無我夢中だった。すぐに返信がきた。

「ヒロが時間を取る、と言っています。講演のあとになる予定です。」

私は父の携帯を持って喜び飛び上がりそうだった。会ったら何を話せばいいだろう……。沢山質問のメモを用意した。胸が高鳴った。

二〇一八年九月三十日。日曜日。その日はやってきた。

あいにくの台風二十四号。アジア名チャリーは、前日

というアイデアが私に降ってきた。それは、誰かからのアドバイスや、受け売りとかではなく、不思議と自然に湧いてきた。それを父に話したところ、

「岩本光弘さんという方がいてね。」

とヒロさんの存在を教えてくれた。彼が全盲であること。六年前に太平洋横断セーリングに挑戦して失敗したこと。いま、ダグさんというパートナーとともに新しい挑戦を準備していること、を聞いた。私は、

「それだー」

といてもたってもいられないほどヒロさんと話してみたかった。ヒロさんを助けているダグさんがやっていることが、まさに自分のやりたいことだった。

「ヒロさんと話してみたい。ダグさんとも話してみたい。」

しかし、ヒロさんはサンディエゴ在住。簡単には会えない。

だが、「念ずれば通ず。」強い思いはかなったのだ。一ヶ月後の九月。自分のヨット教室があるマリナーで開

に南西諸島に急接近。予報によると今夜には中心気圧九百六十ヘクトパスカル。最大風速四十メートルで和歌山県に接近。東京も朝から雨。時折、強く斜めから巻き上げるような風が吹く。

「開催されなかったらどうしよう。」

ヒロさんの講演は午後二時半からだった。午後にはマリナーのある横浜も風が強くなるだろう。早めにマリナーに向かった。黒い雲が遠くまで低い位置で広がっていた。下方の雲が早く流れる。嵐の前兆だ。到着すると、案の定、ヨットショーが午前で終了することが早々に決まったと言われた。ヒロさんの講演はどうなるのか？開始時間まで二時間以上あったが、講演会場をのぞいてみた。すると、

「いらしたー！」

声が出た。谷本さんとヒロさんがテーブルでお弁当を食べていた。ヒロさんはちょっと猫背で、机のお弁当に向かっていらした。話しかけてよいか迷ったが、私は恐る、

「こんにちは。」

と蚊の鳴くような声で首だけ部屋に入れてみた。父が、大きな声で私の脇から、

「こんにちは。」

と声をかけ、お二人がこちらを見た。ヒロさんと目が合ったかどうか、もはや覚えていない。しかし、目が見えないとは思えない様子でこちらを振り向いて下さった。父が私を二人に紹介する。お弁当を召しあがっていらしたにも関わらず、ヒロさんは立ち上がって、

「あきのちゃんですね。はじめまして。」

と野太いが優しい口調、何より大きな口で満面の笑みを浮かべて右手を差し出して下さった。私も手を出したが、タイミングがずれてしまった。そして、

「あ。」

と気がつき、自分の手をヒロさんの手に持っていつて握手を交わした。ぎゅう、としっかり、でも優しさのある温かさだった。父が、

「すみません。まだ時間があるのに。」

待っていたかのように、雨が一瞬ふりやんだ。

「今なら、ヨットに行けますね。」

「あきのちゃんのヨットを見に行こうか。」

ヒロさんは立ち上がり、外に出る準備を始めた。栈橋に向かいながら私は目を疑った。

「本当に目が見えないんですか？」

でも声には出せなかった。ヒロさんは、右手に白杖をついている。左手を谷本さんに添えているのだが・・・速い！歩くのが私なんかよりよほど速いのだ。すたすた、すたすた。浮栈橋は幅があるが、間違ったら海に真っ逆さまだ。物怖じもせず、楽しそうに、

「風が強くなってきましたねえ。」

と、先頭を切って歩いていく。歩くのが遅い私は、小走りで行った。センターハウスから真っすぐ東に向かった栈橋の突き当たりから左へ曲がりその突き当たりからまた右に行く。ようやく目的のヨットに着く。谷本さんが白杖を持ち換えて、足をかけるところ、手で捕まるところをサポート。ヒロさんはするり、とヨットに乗

と謝る。講演の主催者の安藤健さん(ヨット雑誌「NAY」の舵社の編集者)がパソコンやプロジェクターをセツトしながらにこにこ話しかけてきて下さった。この方も大きな笑顔で、ウェルカムの雰囲気を出して下さっていた。

「あきのちゃん、席は一番前にしよう。」

私は子供のなににちょっと図々しいと遠慮したが、みなさんが強くすすめて下さり、厚かましくも前の席に荷物を置かせていただいた。

「ヨットショーも他の講演も午後は全部キャンセルになったんですが、ヒロさんの講演を聞きに遠くからわざわざいらっしゃる方もいるのでこれだけ開催を決めたんですよ。」

気合が入った様子で安藤さんが説明して下さった。これから雨風はどんどん激しくなる予報だった。

「もうすぐ食べ終わるから、一度マリナーに船を見に行こう。ちょっと待っててね。」

と谷本さんが言って下さり、私たちは待った。それを

り込んだ。初めて乗るヨットとは思えない慣れた身のこなし。ヨットにはセールを引き出すブームという横に走っている棒がある。このブームが左右に揺れることでセールの向きが変わる。ちょうど人が立つと頭にぶつかる位置にあり、激しい風の時、ブームパンチを受けて落水して命を落とす人もいる。ヒロさんはブームの位置、ラダー(舵)の位置を確認しながら、ぶつからないよう動いていく。

「目が見えないなんて信じられませんが。」

失礼かと思いつつも、思わず言ってしまった。そうすると、

「ヨットにはどういう装備があるかだいたいわかっているから、聞いて、自分の中で『マインドマップ』を作るんですよ。そうしたら忘れない。」

「自分のヨットでは、必ず、どこに何を置いてあるか決めておくんです。目が見えている人は、あ、今ここにあり、ってわかるけど私はわからないですからねえ。」と笑った。

私はヒロさんにお会いするまで、ヒロさんはもって人格が良くて、豪快な方を想像していた。全盲なのに、三ヶ月もかけて太平洋を無寄港でヨットで横断しようという人なのだ。その間のセーリング、毎日が穏やかに済むわけがない。波が高い時や、風が強い時、うねりや潮流。落水したら命は無い。私は風が強い日のセーリングは、半日でも疲労が激しい。考えられなかった。トライアスロンにも挑戦している方なため、身体を鍛えている、というのはわかる。しかし、決して大柄ではないし、終始笑顔で、いかにも「優しい」印象だ。なにより、しゃべり方が春風になびくスズランのように、ほんわり穏やかなのだ。とにかく白い歯が見えっぱなし。私は、鍛えぬいたアスリートだと思っていただけに、面食らってしまった。

「記念写真を撮りましょう。」

とヒロさんの横に並んだ。お会いしてからわずか一時間足らずで私はヒロさんとはとてもいい人だなと思った。

—ヒロさんの講義—

てて下さい。この明暗も感じられないほど私は真っ暗闇なんです。」

という台詞だった。十三歳までは弱視ではあっても見えていたわけだから、徐々にみえなくなっていく時は、まさに暗黒の世界へとひきずりこまれる思いであったと思われる。そして、

「目をつぶって、歯磨き粉を歯ブラシにつけてみて下さい。そんなこと、って思うでしょう。つかないんですよ。べちよって歯磨き粉がここに（手の平を指して）付いた時、自分は人の手を借りないといけないと思って死のうと思っただんですよ。」

しかし、死にきれず、公園でうたた寝をしてしまった。その時、他界した大好きだったおじさんが、夢で、

「生きろ。」

と訴えたそう。ヒロさんは、「自分にもできることはある。」と信じ、通学して鍼灸師になり、アメリカにも留学し、帰国後に英会話教室で出会ったキャレンさんとご結婚。

講義が始まる前、ヒロさんは、ご自身のパソコンで膨大なメールの返信をしていた。パソコンがしゃべるのだ。驚いた。英語も日本語も次々と読み上げていく。読み上げはいかにも「ア」なのだが、速くて私には聞き取れない。しかし、それ以上にヒロさんが文字を打つのも速い。パソコンはヒロさんが打った文字も読み上げていく。

「これが本当のブライントッチですよ。」

と、笑いを取るヒロさんに、私の口はあんぐりするだけであった。

講義はとにかく笑っぱなしだった。辛いこと、悔しいこと、悲しいこと、全部ヒロさんは笑い話で伝えることができる。白くて大きな歯がずっと見えているのがわかった。よく見ると、目に動きがないので、やはり目が見えていらっしやらないということがわかる。しかし、それを感じさせないほどにヒロさんは自由自在に動き、活舌よく話す。講義二時間はあつという間だった。中でも、最初に私の心をつかんだのは、

「みなさん、目をつぶってみて下さい。その上に手をあ

講義はあつという間だった。ヨット雑誌、YACHTが音声変換されていたため、に記事を聴いた。ことが人生を変える。エオラス号というヨットによる太平洋横断挑戦者の募集記事を知ったのだ。エオラス号のオーナーは、その船でアースマラソンをした間寛平さんというタレントのマネージャー、比企啓之さん。彼も破天荒なヨットマンだったそう。比企さんは、サンディエゴまで訪ねてヒロさんのスキルをチェック、辛坊治郎さんも紹介して下さいという。二人で三ヶ月間、トレーニングを積み迎えた本番。二〇一三年六月十七日。出航。

この時、谷本さんは華やかにマスクミに応援されながら出航するエオラス号の船尾を遠く見送りながら、ふと、胸騒ぎがしたそう。谷本さんは、ご自身も関西でヨットに乗っている。関西の海は関東の海より潮が速い。地形も複雑だ。ある夜中に暗礁に乗り上げ、ヨットが大破死にかけたこともあるそう。谷本さんとヨットに乗ると、丁寧にセールを合わせていく。機敏に動き回り、風を細かく読む。そんな人だから、海に対する勘も研ぎ



澄まされているのだろう。悲しいことに彼の勤は的中することになる。

六日目の六月二十一日の朝、七時過ぎ。ヒロさんは、海からゴーン、ゴーン、と響く音が聞こえたそう。瞬間、ヨットの右下が突き上げられた。ヒロさんの第六感で直ちに、

「鯨だ。」

とわかったというのがすごい。船にとって鯨との衝突は致命的である。すぐさま浸水が始まったそう。一緒に乗艇していた辛坊さんは寝ていたらしい。ヒロさんが鯨と気づき、浸水に気づいたという機転で二人は助かるが、激しいマスコミバッシングが待っていた。ヒロさんは本当に落ち込んだそうだが、彼の落ち込みは、挑戦に失敗したことではない。自分のせいで辛坊さんを巻き込んでしまったことへの後悔だった。常にヒロさんは「自分より人が優先」なのである。

講演の終わりころ、一人の優しそうな人が会場に駆け込んできた。とても、慌ててきたのがわかる。まだ小雨

がふっていたのかかきを持っていった。細くて背筋がピン、としていて、アスリートだと感じた。その方が比企さんだった。安藤さんが、

「せっかく比企さんがいらしたから、ぜひ、一言。」

と水を向けると、

「船を沈めてくれてありがとう。」

と笑いながらおっしゃった。私は、

「冗談がすぎるのでは！」

と、ドキドキしたが、ヒロさんも安藤さんも谷本さんも大笑いしていた。それだけ、この人たちの信頼関係があるのだろうが、私にはちょっと笑っていないのかわからなかった。会場は、終始、応援モードだった。

この頃、クラウドファンディングの様子を見ると、ヒロさん応援派は増えていた。しかし、ネット上では、まだまだバッシング派もいた。父のSNSを見せてもらおうと私の知っているヨットマンでも、堂々と批判している方もいらして、私はちょっと複雑であった。

十月六日、例年通り、最年少無寄港単独世界一周の記

録を持つ海洋冒険家の白石康次郎さんのキャンプに参加した私は、白石さんにヒロさんを応援していることを話してみた。すると、白石さんも、焼けた肌から白い大きな歯を見せながら満面の笑顔で、

「成功して欲しいよね！白石さんも応援しているんだよ。座間さんも応援してあげてね。」

とおっしゃった。私は自分が間違っていない、と信じることで嬉しかった。

―ヒロさんのお嬢さん、リナちゃんサンディエゴで―  
ヒロさんには、私より一歳上のお嬢様、リナちゃんがいらっしゃる。ヒロさんはリナちゃんのおむつをまさに手探りで替えてきた。一方、リナちゃんも、ヒロさんの目となるよう小さい頃からヒロさんをサポートしてきた。ヒロさんによると、リナちゃんは幼稚園の時には既に、「大きくなったらお医者さんになってお父さんの目を治す。」

と将来の夢を語り、ヒロさんはぐしゅぐしゅに泣いたと言う。リナちゃんは、ヒロさんのために、今回出航する

ヨットのあらゆる箇所に、点字シールを貼ってまわったそう。

「私も年も変わらないのに何でそんなに人を慈しむ気持ちであふれている人なんだろう。」私は、リナちゃんに会いたい、と思った。サンディエゴはアメリカ合衆国、カリフォルニア州にありヨットのメッカだ。私は自分の治療のため、新年にロサンゼルスに行くことになった。ロサンゼルスからサンディエゴまでは車で数時間。家族で話し合って、ヒロさんに連絡を取り、サンディエゴを訪ねることになった。

待ち合わせは、今回の太平洋横断に挑戦するヨットを係留しているマリナー。まだ、日本のサポーターたちはヨットを見ていないということもあり、みんなを代表して写真を撮ってくる、という約束をして私たちはサンディエゴに向かった。

一月二日。透き通った青い高い空が広がっていた。しかし、風は強く冷たい。駐車場に車を停めて、待っているとヒロさん家族の車が現れた。奥様のキャレンさんが

運転。リナちゃんも一緒だった。リナちゃんも照れくさそうだったが、私もちよつともじもじしてしまった。ヒロさんは、相変わらずにこにこしながら、

「あきのちゃん、遠いのにわざわざありがとう。」

「まずはヨットを見て下さい。」

と歩き出した。すると、リナちゃんがすつと右手を出し、ヒロさんがそこに左手を添えた。白杖をつきながら、またしても先頭を切ってスロープを降り、棧橋へ。まるで見えているかのように右に曲がり、

「この船です。」

と案内をしてくれた。

「わあ。」

と声が出るほど、優美なヨットだった。新艇ではないとは信じられない。よく整備しており、デッキがピカピカに磨かれていた。ヨットに沿って大きな横断幕が掲げられていた。

その上には「Blind Sailor to sail to NON STOP, from San Diego to Fukushima, Japan」と入っている。キャ

え風が強くなると泣きなくなる。

一緒にランチをしながら、昨日、このマリナーでレースに出たという話を聞いた。ヒロさんは、いい成績だったらしく、

「『お前、本当に目が見えないのか。実は見えてるんじゃないか。』って言われましたよ。」

と嬉しそうだった。風が複雑だったらしく、混戦だったようだ。キャレンさんがビデオを見せて下さった。とても穏やかに話す方で、日本語も上手だった。「出航の二月二十四日もいい風が吹くといいね。」と会話がはずんだ。マリナーの人も次から次へとヒロさんに声をかけてくる。人気者である。それは、彼が、「挑戦者」であるということもあるかもしれないが、ヒロさんの人柄が人を惹きつけるのだと感じた。そして、アメリカ人は、障害のある方にも寛容で対等に尊敬し合っている、そう確信した。

「リナ、トイレ。」

とヒロさんがリナちゃんに言った時、リナちゃんは食事

レンさんが右舷側に英語、左舷側に日本語で書いてあると教えて下さったがとなりヨットがあったので左舷側はよく見えなかった。ヒロさんが詳しくヨットの説明をして下さる。航海中に食事やお手洗いで困らないように場所に工夫がしてあった。そして、確かに所要所にリナちゃんが打ったという点字が貼られていた。

「お父さんが航海に出してしまうのは心配じゃないの？」

とたどたどしく英語で話しかけてみると、笑いながらもうーん、とちよつと困ったように、

「しょうがないかな。」

と答えてくれた。ヨットはアイランドパケットという種類で、横幅があり中も外も広がった。何より安定感が感じられた。しかし、そうはいつでもヨットはヨットである。

「これをたった二人で操船していくのか。」

「普通なら無茶だ、と思う。『よく挑戦しようと思うな。』とも、『よく家族も応援しているな。』と驚かざるを得なかった。私はとにかく怖がりなので、デイクルーズでさ

中だったが、さつ、と手を止めて立ち上がり、ヒロさんの横にすつ、と立って右手を出した。そして、ヒロさんがいすから立ち上がり、洗面所までエスコートしていった。私はじっとそれを見ていた。私だったら、

「ちよつと待って。」

と言ってしまうそうだ。ヒロさんが済ませるまでリナちゃんはもちろん待っていて、また二人で戻ってきた。私は考えさせられるものがあって、ちよつと口数が減った。最後に、リナちゃんがんばっているバレエの写真を見てマリナーを後にした。自分のやりたいこともちゃんとやりながらも、柱のようにヒロさんを支えているリナちゃんは私とひとつしか変わらない。私はいったい何ができるのだろうか。

― 壮行会に向けて点字に挑戦 ―

二月二十四日の出発に先駆けて、一月三十日、海の仲間とヒロさんの壮行会が開かれた。溜池山王のヨット仲間がオーナーのレストラン。主催は谷本さん。私は、応援メッセージを点字で書こうと点字プレートを買ってき

た。しかし、六つのドットで字を表現していく点字は思いのほか難しかった。点が上手く打てないのだ。しかも、一ドットずれてしまえば違う意味になる。想像以上に手間がかかり、イライラしてきた。たった一言、「がんばって下さい」の九文字に何十分かかることか！涙が出そうになった。メッセージカードに、打ち始めたが穴が上手く打てず薄い紙に変えた。点が、ずれて何枚も紙を無駄にした。本当はもっと長いメッセージを考えていたのだが、数文字しか書けず、情けなかった。ヒロさんが読めないとはわかっていたが、ヒロさんのことを書いた作文も添えて、壮行会に持っていった。

辛坊さんや比企さん、ブラインドセーリングの団体の方々、テレビの取材まで入っていて会場にはぎわっていた。乾杯の後、一人一人が応援メッセージを言うのだが、点字のメッセージと作文を持ってきたことを伝えるとヒロさんが喜んで下さって、

「あきのちゃん、こっちこっち。写真を撮ろう。」

「あきのちゃんは、サンディエゴまで応援しに来てくれ

「病気に負けちゃだめだ。がんばれ。」  
と言われている気がした。

「私の悪化とヒロさんの偉業達成―

一月二十一日。私は定期健診があった。懸命にリハビリをしていたため、経過が良いことを期待していたが、結果は残酷だった。私は絶望のどん底だった。毎週末、教会に通い、毎日リハビリを欠かさず、真面目に通院もした。主治医の前で号泣したが、事実は変わらない。ヒロさんが徐々に目が見えなくなっていた時、きつこの絶望感を味わったのだろう。ぬぐってもぬぐっても涙が止まらず、主治医の慰めも耳に入らなかった。むしろ、通り一遍の言葉しかかけてこない主治医に心底腹が立った。本当に悔しくて、運命は残酷だと思わざるを得なかった。これを受けて、二月二十四日のヒロさんの出航日を明るい気持ちで応援できない自分が悔しかった。両親は奔走し、最後の望みでニューヨークにいる権威の先生に会いに行くことになった。出発日は二月二十六日。その前にサンディエゴに寄ったかったが、学校も長期は

たんです。」

と、中央に呼ばれてしまった。大人たちがシャッターを切り、フラッシュも沢山あって慌てたし、困ってしまっ

た。  
パラリンピックのテーマソングを歌う全盲のシンガーソングライター、栗山龍太さんが盲導犬と共にいらして、ヒロさんの応援歌を歌った。「敗れた夢は、どんな意味があるのか。行き場を無くした熱い思いが今ここに蘇る」という歌詞に私はこみあげるものがあつた。ヒロさんは、ヨットの名前は「Dream Weaver」と言い意味は、「夢を織るもの」と説明して下さった。「夢を織る」という響きが、胸に刺さつた。

大人たちはその夜、遅くまで寄せ書きなどをして盛り上がったそう。私は先に帰ったが、父がヒロさんから預かったとお土産を持って帰ってきた。

「あきのだけにお土産があつたんだよ。」

開けてみると、セールに点字が入ったヨットのデザイン「Dream Weaver」のTシャツだった。ヒロさんから、

休めないし、何より体調管理を優先し、ヒロさんの応援は自宅からということになった。

当日、谷本さんを始め、比企さんや「V」の取材陣はサンディエゴにいた。風がいい方向から吹き、「Dream Weaver」号は見守られながら出航。映像が送られてくる。応援のヨットたちが湾に並走している姿は圧巻だった。その一艇に、かつてのエオラス号のオーナー比企さんもいらした。実は、比企さんはエオラス号が沈んでから六年間、ヨットに乗られなくなっていたそう。かつて、縦横無尽に海を渡っていたセーラーが船を降りるということはただ事ではない。谷本さんは、

「ヒロの今度のチャレンジの裏の目的には、『比企さんをもう一度、海へ』ということもあるんだよ」とおっしゃっていた。

「比企さんが再びヨットに乗った！」

それも、ヨット仲間からすれば大きな喜びだったに違いない。そして、何より、谷本さんは、

「今回は大丈夫。」

と確信しながらヒロさんを見送ったそうだ。

以後、ヒロさんはほぼ毎日、実家のある天草にいるお姉さんに電話をした。そして、海況とセーリングの様子を報告。それをお姉さんが日本語でタイプする。今度はそれを、ダグさんの奥様、なおみさんが英訳する。そして、ヒロさんのMEBにアップロード。世界中のヒロさんを応援する人達が、英語で、日本語で、毎日ヒロさんの様子を見ながら声援を送った。父も私も朝、起床してからすぐにやることはヒロさんの場所を確認することだった。

毎日が順調のようだった。あとから本人が笑っていたが、

「みなさんが並走してくれていた出発の時間が一番いい風だったんですよ。」

皆のヨットがマリナーに戻り、海に「Dream Weaver」だけになったとたんに、風がとまり立ち往生したそうだ。一番辛かったのは、日本に近づいてきたころに、低気圧が来てしまい、進行方向に向かえなくなってしまう時

だったという。

「進みたい。しかし危険だ。今回は失敗できないのに。」と悩んだそうだ。父もアプリで風を見ながら、

「これは辛い。」

と分析をしていた。ヒロさんは様々なヨットマンからメールでアドバイスを受ける。しかし安全を期して一度来た航路を戻った。これは苦渋の決断だったと思う。無寄港ということは、食料、水、燃料にも限界がある。ごみは捨てられないから船中にごみも溜まる。進みたいのの後戻りをしなければいけない、というのは想像に余りある。

三月十一日、ヒロさんは洋上で黙禱をする。私も東日本大震災以来、どこにいても毎年二時二十七分には黙禱を捧げる。

「ヒロさんも黙禱をしている。」

海と陸と離れているが、心がつながっている気持ちになった。

ヒロさんはエオラス号が沈んだ場所でも心を海に向け

ていた。命がけのセーリング中に常に人を思いやる気持ちがあるヒロさんを私は心から尊敬している。

涙ながらに一度引き返したヒロさん達だが、結果、これが功を奏した。予定より一週間も早く日本に着くことができたのだ。もともと四月最終週に到着予定だったため、私達家族はその日、到着予定港である福島県小名浜港に行く予定だった。出航も立ち会えなかったが、到着も立ち会わずなんとも残念であった。

四月二十一日。私達は朝からテレビに釘付けだった。辛坊さんの番組では特集を組んでいた。辛坊さんも本当は到着時にヒロさんを迎えてハグしたかったとテレビでおっしゃっていた。ヘリコプターから、陸から、映し出される「Dream Weaver」。私達家族はいつの間にか全員正座をしてテレビの前に並んでいた。父も母も私も涙が止まらなかった。テレビに舐を取る谷本さんが見えて、「谷本さんが映っている！」

と、大笑いした以外は泣きっぱなしだった。舐がとられた瞬間、テレビに向かって拍手をってしまった。ひげが

ぼうぼう生えたヒロさんとダグさん。大好きだったビールを出発の数ヶ月前からずっと我慢していたヒロさんにお酒を渡す人。ハグする人。笑顔笑顔笑顔。「本当に本当におめでとう。」世界中が祝福した。私がヒロさんを応援しているのも知っている友達から連絡がくることもあった。みんな見てくれてるのが伝わりほえんだ。

五月二十四日。祝勝会が行われた。ヒロさんは相変わらず、笑いを取るのが上手い。

「ダグはセキロもやせたのに、私は、一・五キロしかやせなかつたんですよ。どれだけ私が怠っていたかわかりませんね。」

と、終始、ダグさんを称えていた。総理大臣賞を受賞することが決まった際も、最後まで、自分一人ではなくダグさんにも、と訴えていたと聞く。「ダグさんだけでなく、チームがあったからこそ。自分はあくまでチームの代表として受賞しました。」と偉業を成し遂げた今もお、謙虚なヒロさん。その後はヒロさんは講演会やサイ

ン会でもひっぱりだこだ。

しかし、決して浮かれることなく、謙虚に、そして次の挑戦に向けて前を「見ている。」

私はどうか? 「見えている」のに、「人生の先を見ようとしていない。」勇気がない私は、いまどうやって自分と向きあっていいのか、道に迷ってしまっている。主治医が交替となり、十二月に後任の主治医と面談が控えている。色々決めなければいけない。私はヒロさんのように、前に進めるのか? 勇気が持てるのか? 持たないといけないが、現実を直視する気持ちになればどうしても逃げたくなる。それではいけないとわかっているのに。

夏に東京ミッドタウンのギャラリーでALSの方々を被写体にした写真展があったことを思い出す。彼らは、治る見込みがない中、日々闘っていた。

ヒロさんのようになりたい。勇気が欲しい。前を向きたい。心が折れそうな毎日。負けちゃだめだ。ヒロさんを見る。ヒロさんだったらどうするだろうか? 進むんだ。あきの。怖がらずに強くなれ。前を向け。私。

—あとがき—

今の私には、自分の病気のことを書く勇気がありません。いつか自身が消化した時に、書ける時が来ると信じています。勇気がない自分が時々情けなくなりそうです。最後まで、読んで下さり、ありがとうございました。

—参考文献—

「見えないかこそ見れた光」

(全盲のセーラー) 岩本光弘氏  
株式会社ユサブル

— Special Thanks —

岩本光弘さん(ヒロさん)

これを書くに当たり、岩本光弘さんにご許可をいただきました。何度もインタビューをさせていただき、感謝をしています。誰よりも尊敬しています。ありがとうございます。

谷本卓哉氏

ヒロさんをご紹介いただいただけでなく、書いている間、登場する方々の肩書きや事実確認など頻繁に質問をさせていたくださり多大にご協力頂きました。谷本さんのご協力が無ければ書き上げることができませんでした。感謝しています。

安藤健氏

舵社の雑誌「XAVZ」の講演会が無ければヒロさんに会えませんでした。ヒロさんとの取材の時間を取って下さり、その後も応援して下さいました。ありがとうございます。

両親

私にヨットを教えてください、病気のために尽力をしてくれている父と母は私の最大のサポーターです。普段は、我儘で迷惑を掛けていますが、本当は誰よりも感謝をしています。

(辛坊さんと比企さん、ダグさんには谷本さんから連絡をいれて頂きます。)

## 「四国鉄道紀行

### 西条・松山・宇和島編」

徳島文理中学校 3年

田中 惣真

唐突なのだが、私は鉄道オタクだ。そして、私の地元である四国の鉄道をこよなく愛している。この作品は、私が愛してやまない四国の鉄道をより多くの方に知ってもらうべく、今年の夏の私の旅行について記したものだ。残念なことに、鉄道オタクの中にも、四国の鉄道に興味がない方が多く存在する。そもそも、鉄道に興味がない、

という方も多いだろう。この作品を読んで、少しでも四国の鉄道に興味を持つ方が増えたら幸いである。

私は、地元徳島の中学校の鉄道研究同好会に所属している。当部活では、毎年一回ゴールデンウィーク、あるいは夏に鉄道旅行を行っているのだが、今年の旅行は八月の初めに松山方面へ行くこととなった。一日目に愛媛県の西条市、松山市に行き、その日の内に徳島に折り返す。二日目は休み。三日目は愛媛県の宇和島市に行き、またその日の内に徳島に折り返す。二回の日帰り旅行の間に、一日休みが入るような日程となった。

今回の旅行には、少し特別なきっぷを使用した。「若者限定 四国フリーきっぷ」と呼ばれるこのきっぷは、二十五才以下の人に限り、JR四国全線の特急が三日間乗り降り自由、というお得なきっぷだ。値段は九八〇〇円。破格の値段だ。

因みに、このきっぷを使わずに今回の旅行を行うと、全体で三六四六〇円が必要になる。七十三パーセントオフのきっぷで旅行した、と考えると、このきっぷが如何的な車両だった。

四国が誇る特急型気動車、二〇〇〇系である。一九八九年にデビューした二〇〇〇系は、鉄道の常識を覆す画期的な車両だった。

に安いか分かるだろう。学生が鉄道旅行を敢行する為には、どの様な手を使ってでも費用を安く抑える必要があるのだ。

一日目、我々部員は徳島駅に集合し、最初の列車を待っていた。朝の五時半頃のことだった。生憎この日は九州、四国に台風が接近しており、出発できるかどうか心配だったが、朝の時点では問題は無さそうだったので、予定通り出発することにした。

暫くホームで待っていると、お目当ての列車がゆっくりと入線して来た。彫刻の様な緩やかな曲面を湛えた前面や、赤い背景に白く力強い渦巻き状の波が浮かび上がる列車名のマーク（オタクはこれをヘッドマーク、またはトレインマークと呼ぶ）が目を引いた。

この日最初の列車は、高德線特急のうずしお二号、高松行きだった。徳島と高松、岡山を結ぶ特急うずしおは、一九八八年登場した。徳島県民の我々にとっては、通勤通学の足であり、旅行の際にも重宝する便利な列車だ。

そして、この特急うずしおに使用される車両が、JR

ありながら電車に匹敵する高速性能を有する車両として開発された。徹底した軽量化、高出力エンジンの搭載、そして振り装置の組み込みが為された。振り装置とは、車両がカーブを通過する際に、車体をカーブの内側に傾ける装置のことで、これにより曲線通過時の速度が向上

する。この振り装置は、二〇〇〇系登場以前には一部の電車だけに採用されており、気動車に搭載されたことは無かった。エンジンから車輪に動力を伝達する推進軸（プロペラシャフトとも）と呼ばれる部品が、車体を傾けると伸縮し、振り装置の動作を阻害する恐れがあったからだ（他にも、技術的な課題が山積していた）。

しかし、二〇〇〇系はその問題を知恵と技術で克服し、「世界初」の振り式気動車となった。二〇〇〇系は正に、不可能を可能にした気動車だったのだ。

因みに、二〇〇〇系は製造された時期によって二つのグループに大別されるのだが、特急うずしおに使用されているのは後に製造されたグループで、俗にN二〇〇〇系と呼ばれるグループである。先に製造されたグループ（俗に量産車と呼ばれる）よりエンジンのパワーが増し、ブレーキも強化されている為、最高速度が時速一二〇キロから時速一三〇キロに向上している。

ホームに入線した特急うずしお二号に、我々は乗車した。ワインレッドと深い青、そしてステンレスの銀色が

目を引く外観からは、高速気動車の力強さが伝わってくる。車内は白と薄い青でシンプルに纏められ、豪華さは無いが、とにかく速さに拘った故の簡素さではないかと感じた。

やがて、特急うずしお二号は、定刻通りに徳島を発車した。走り始めて最初に驚かされたのは、そのサウンドだ。二〇〇〇系気動車のエンジンサウンドは、他のどの気動車よりも美しい、と私は個人的に思っている。

「うおおおん。」

の様な低い重みのある音が、エンジンの回転数上昇と共に徐に高くなって行き、ある一定数の回転数に達した所で

「きーん。」

と、戦闘機の飛行音の様な音を奏で始める。まるでF1マシンに乗っているかの様な官能のエンジンサウンドが車内に響いた。ここまで高揚感のあるサウンドは、そう減多に無い。

そして、吉野川橋梁や、徳島と香川の県境に聳える

山々を飛ぶ様に走り去るスピードも、高揚感を掻き立てた。最速列車は徳島〜高松間五十七分のスピードも、特急うずしおの魅力の一つなのだ。

高松で下車した我々は、松山へ向かう特急列車に乗り換えた。高松駅のホームを行く我々の足取りも、何時にもなく軽かった。

この日二つ目の列車は、予讃線特急のいしづち一号、松山行きだった。高松と松山を結ぶ特急いしづち（曾ては愛媛県の南西部にある宇和島まで直通する特急いしづちも存在したが、現在は無い）は、一九八八年に登場した。ただ、この区間は昔から利用客が多く、古くは一九七二年に同区間に特急列車が登場していたのだが、この話は後述する。

この利用客の多い区間（特に多いのは、高松〜多度津間。多度津は、高知方面へ向かう土讃線と、松山方面へ向かう予讃線の分岐駅）は、より多くの乗客を速く運べるように電化されている。よって、特急いしづちには電車が使用されている。八〇〇〇系電車と八六〇〇系電車

だ。今回我々が乗車したのは、八〇〇〇系の方だった。八〇〇〇系は、一九九二年にデビューした特急型電車。流れる様な流線形のフォルム、赤、青、黄、そして銀色のカラーが美しい。また、二〇〇〇系で培われた振り装置は、八〇〇〇系電車にも受け継がれている。

乗車してみると、電車らしい静かでない力強い加速にうっとりとし、持ち前の振り装置でカーブを果敢に攻める姿に驚嘆した。東芝製のVVVFインバータ（電車でモーターの制御装置の一種。加速する際に音がする。東芝、日立、東洋、三菱など、製造する会社によって音色が異なる為、聴き比べても楽しい）の音色も軽やかだった。

車内は、二〇〇四年から実施された木目にパネルの設置や、座席の交換などのリニューアルによって、暖か味が増し、より豪華な雰囲気になった。車内販売は行われない（JR四国では現在、全ての特急列車で車内販売は行われない）が、デッキの自動販売機の御蔭で、飲み物に困る事はなかった。

そうこうしている内に、特急いしづち一号は宇多津に到着した。

高松から特急いしづちで二十分程の場所に位置する宇多津は、四国の交通の要衝だ。本州の大都市、岡山から四国へと延びる瀬戸大橋。その瀬戸大橋の、四国側の基点が宇多津なのだ。そして、宇多津は、特急いしづちが高松を発車した後の、最初のハイライトの舞台でもある。特急いしづち一号は宇多津にゆっくりと、速度を落として入線。ホームを目指す、そこには先客、同じハ〇〇系電車の特急いしづち一号がいた。

特急いしづちは、岡山と松山を結ぶ特急列車だ。JR四国のエースにして、フラッグシップである。そして、特急いしづち一号と特急いしづち二号は、目的地が同じ松山なので、運行区間が重なる宇多津と松山間で併結運転(行き先、あるいは出発駅の異なる二種類の列車が、途中の区間で連結して走行すること。東京と盛岡、新青森、新函館北斗を結ぶ新幹線はやぶさと、東京と秋田を結ぶ新幹線こまちの、東京と盛岡間の併結運転がその代

表例)を行うのだ。

ホームに進入した特急いしづち一号は、特急いしづち一号に挨拶をするかの様に、手前で一旦停止。すぐにゆっくりと動き始め、軽い衝撃を伴っていしづちと密着した。併結完了。

宇多津駅には、三分間程しか停車しない。特急いしづち一号、五両。特急いしづち一号、三両。合計八両のフル編成となって、一路松山の地を目指す。

因みに、特急いしづちは元々高松と松山、宇和島間の特急列車だった。先程少し触れた一九七二年登場の特急とは、特急いしづちのことだったのだ。

一九七二年から一九八八年まで、特急いしづちは高松と松山、宇和島間の特急だった。しかし、一九八八年に瀬戸大橋が間通すると、JR四国の顔となる岡山と松山間の特急列車に名前が横滑りした。残された高松、松山間の特急列車には、新たに特急いしづちという名前が用意され、現在に至るという訳である。

宇多津を発車して暫くすると、進行方向右手に海が見

え始めた。特急いしづちの旅で、最も景色が美しい所だ。母なる海、瀬戸内海。晴れた日には(一日目は雨でよくみえなかったが、旅行の三日目は快晴だった)、抜ける様に青い空、吸い込まれそうに青い海、二つが合わさって境界線が分からなくなる。美しく雄大な瀬戸内海を横目に、特急いしづち一号は走り去って行った。

高松を発車して一時間半程が経過した頃、特急いしづち一号は少しずつ減速し、やがてホームにびたりと停車した。終点の松山まで一足飛びに行ってしまう、と逸る気持ちを抑え、我々はこの伊予西条で下車した。

西条市は、愛媛県第四の都市だ。伊予西条には、全ての特急いしづちが停車する。しかし、西条市は鉄道オタクにとっては異なった意味で重要な場所だ。四国最大の鉄道博物館、「鉄道歴史パーク in S A I J O」があるからだ。勿論、我々が伊予西条で下車した理由は、この鉄道博物館に行く為だった。

この鉄道博物館は、北館、南館、そして十河信二記念

館に分かれているが、我々は北館から見て回ることにした。

館内に入る為には、まず入場券が必要だ。北館入口前の券売機で購入すると、きつぷ形の入場券が発券された。それを入口の係員に見せると、なんとハサミで入場券を切ってくれたのだ。オタク心を揶揄、粋な演出だった。

館内に入ると、そこは鉄道オタクの聖地だった。正面にいきなり、〇系新幹線とDF五が現れたからだ。

向かって左側の車両は、〇系新幹線の下り方(新大阪、博多向き)先頭車、二一―一四一だ。一九六四年に世界初の高速鉄道線、東海道新幹線が開通した。この時、世界最速の時速二一〇キロで走行する為に登場したのが、この〇系新幹線だった。

近くで見ると、「団子鼻」と呼ばれて親しまれた前頭部や、パツチリと見開かれた前照灯が愛らしく思えた。白いサイドに流れる青い帯からは、シンプルなのに、けれど、清潔感やスピード感が伝わってきた。

一番驚かされたのは、その展示方法だ。なんと、客室



はおろか、運転台にも立り入ることができるのである。近年、盗難や破損の恐れがあることから、全国の鉄道博物館などでは運転台の公開は一般的でない。四国内でこの様な貴重な体験ができるのだ、と思うと嬉しさが込み上げてきた。

まず、客室に入ってみた。

O系の先頭車、二一系は普通車で、二列十三列の配置になっている。

入った瞬間から国鉄臭が漂ってくる、何処か懐かしい車内だった。クリーム色で纏められた車内と言い、座席背面に設けられた灰皿と言い、国鉄時代の雰囲気があるのはかたなく感じられた。座席に座ってみると、程良く柔らかな座り心地で快適だった。リクライニングも可能だった。惜しむらくは、座席が回転できない為、向かい合わせにできなかったことだ。この当時のO系の普通車は、リクライニングはできるが、回転はできないタイプだったからだ。(O系デビュー時は、転換はできるがリクライニングはできないタイプだった。一九八一年頃か

ら、展示されているO系のタイプに切り替え、交換されている。回転とリクライニングを両立したシートは、一九八五年登場の二代目新幹線、一〇〇系の登場まで待たなければならなかった)。

続いて運転席に移った。ここも何ともレトロな雰囲気だった。所々塗りの剥けた深い緑の運転台に、草臥れたクリーム色のシートモケット、少し黄ばんだアナログ式の速度計が時代を感じさせた。

この運転台は、眺めるだけでなく、実際に機器を操作することもできる。運転席に座り、マスコン(自動車のアクセルに当たるハンドル)やブレーキハンドルを操作しつつ。

「チーン。信号、二二〇。」

などと言っていると、往年の名車を運転している様な気分になることができた。

しかし、楽しいことはわりと一瞬ではなかった。館内には小さな子供も見受けられたが、中にはO系新幹線の運転席に座るや否や、マスコンを物凄い勢いで動かす

子供もいた。運転台の開放は両刀の剣だ。より多くの

人々に鉄道の面白さを伝える為に、これ程優れた方法は無い。しかし、毎日苛酷な使用に堪え得るだけの強度が、果たしてこれからの保存車にあるだろうか。これから何年も、何十年も先の人々に、鉄道の素晴らしさを伝えて行く為に、我々は誠意を持って車両に接しなければならぬ、と感じた。

向かって右側の車両は、DF五〇一だ。四国島内の無煙化(蒸気機関車を廃止すること)に貢献したこのディーゼル機関車は、上半分が赤、下半分がグレー、その間に白い帯が走るというカラーリングが鮮やかだ。ディーゼル機関車では珍しい箱型の車体も、スマートに見えた(ディーゼル機関車の車体には、中央の運転台が機関室からひょっこり突き出し凸型が採用されている事が多かった)。また、この鉄道博物館に保存されているDF五〇は、未だ本線を走行可能な状態にあるというのだから驚きだ。こちらの車両も、運転席に座ることができた。暫く二両の車両と戯れた後、我々は南館へ向かった。

こちらにも、興味深い車両が目白押しだった。

南館の入り口前には、屋外に展示する形で、軌間可変電車の第二次試験車、GCTO一—二〇一が展示されていた。軌間可変電車はフリーゲージトレインとも呼ばれ、在来線の狭軌と新幹線の標準軌、線路の幅の異なる両路線を自由に行き来できる車両として開発された。この二次試験車は、JR四国の予讃線で試験を行い、三次試験車にバトンを渡した。しかし、未だ実用化に至っていない。

近くでじっくり観察してみたかったが、少しずつ雨脚が強くなってきたので(先程も書いたように、この日は九州、四国に台風が接近していた)、それは叶わなかった。

南館の館内での一つ目の車両は、C五七—四四だ、急行用の蒸気機関車として、開発された型式だ。

少し細身のボイラー(石炭を燃焼させて、蒸気を発生させる部分。前から見ると、円い顔に見える部分)に、これまたスマートな竹まいの煙突、金色の配管、そして

全体を被うピアノブラックが、上品な美しさを醸し出していた。この眺めていると、うっとりとして溜息が出てしまふような機関車に付けられた愛称は、「貴婦人」だった(因みに、国民的蒸気機関車、D五一に最初に付けられた愛称は「ナメクジ」だった。煙突がナメクジの様な形状だったから、と言われている。その後、急峻な山道を力強く登って行く姿から、「山男」という愛称も生まれた。「ナメクジ」に「山男」。「貴婦人」と呼ばれたC五七とは対極的な機関車だったと言えよう。しかしそのD五一が、今では「デゴイチ」と呼ばれC五七より圧倒的に有名なのだ。世の中という物は、何が起るかわからない)。

その左隣の車両は、キハ六五―三四だ。まだ全国に急行列車が残っていた頃(今、JRには一つも急行が残っていない。優等列車が特急に一本化されたからだ)、全国の新電化区間で急行として活躍していたのが、このキハ六五、急行型気動車だった。

当時の気動車急行を表す、黄色味掛かったクリーム色に戻った。

人生で初めての、車内での栓抜き。急行列車時代の時が流れる車内で、鉄道の魅力をかち合った仲間達と酌み交わした、最高の一杯。この時味わったオレンジジュースの味を、私は未来永劫忘れることはない(この時、部員の一人が、まるでお酒に酔ったようなふりをして、しきりに「パンシロン液、パンシロン液……」とぼやいていたのもまた、良い思い出)。

キハ六五の左隣の車両は、この鉄道博物館最後の車両だ。DEE一〇―一である。この機関車は貨物などの入換(貨物ターミナルなどでは、頻繁に車両を移動させなければならぬ。その仕事を、入換と呼ぶ)や、ローカル線での客車牽引の為に開発され、四国でも同様の同胞が活躍した。現在でも、一部のDEE一〇が四国島内で現役

に赤い帯を巻いた姿が、国鉄情緒を漂わせていた。

この車両は、車内に立ち入ることもできる。そして、この車両展示の一番の仕掛けは、車内にあった。

車内のボックスシート(列車の二人ずつ向かい合わせに座る席)は、JR時代に新しい物に交換された為、国鉄らしさは無かったが、シート以外は登場時の姿を良く留めていた。メンバーと共に、向かい合わせのシートに身を沈めてみた。ふと、シートに座ったまま窓から外を覗いてみたその時、私は視界の端に何かを認めた。それは、「センヌキ」だった。

国鉄時代、ボックスシートの窓の下、小さな机のそのまた下には、ビンの蓋を開ける為の小さなセンヌキが備わっていた。私の側面に書かれた小さな

「センヌキ フタのカドをひつかけて ビンを上へこじめる」

の案内書きを、覚えている方も多いのではないだろうか。そういえば、南館の館内にはビンの自動販売機があったが、それはキハ六五の車内で開けることができるから

である。同じディーゼル機関車であっても、先程紹介したDF五〇とはカラーリングは同じでも車体形状が異なる。DF五〇は箱型車体だが、DEE一〇は凸型車体なので、少し風変わりなその車両形状にも、やはりオタクの私は引かれてしまった。

以上の六両が、この鉄道博物館に展示されている全ての車両だ。展示されている車両の数や設展は、大宮の鉄道博物館、名古屋の鉄道博物館に遠く及ばない。しかし、車内や運転台に立ち入ることができたり、車両を通じてここでしかない体験ができたりと、一つ一つの展示の内容が他にない濃い博物館だった。一つ一つの展示を心置きなく堪能する為には、丸一日掛かってもおかしくない、そう感じさせる博物館だった。そして、私は想像してみた。そう遠くない未来、ここに「TSE」が展示される姿を。

TSEは、鉄道の常識を、四国の未来を変えた車両だった。世界初の振り式気動車、JR四国二〇〇〇系。その試作車に与えられた名前が「TSE」(Trans

Shikoku Experimental 四国横断実験)だった(因みに、transは「貫いて」という意味の接頭辞。これは次のShikokuに掛かる接頭辞だと思われる。不可解なのは、次のexperimental。これは「実験的な」という意味。「実験」という名詞にしたのであれば、experimentが妥当なのだ。私が推測するに、このexperimentalの後は、名詞のcarが省略されていると思われる。experimental carで「試作車」という意味になる為。よって、TSEという名の本当の意味は「四国を貫いて走る試作車」ということになる)。ステンスの銀色に、透き通る様な水色の帯(この水色は、JR四国のコーポレートカラー。JR七社には、それぞれコーポレートカラーが存在する。北海道、萌黄。東、緑。東海、橙。西、青。四国、水色。九州、赤。そして貨物、コンテナブルー)、そして黒い前面に浮かび上がる眩いヘッドライトが印象的だった。

鉄道の世界での試作車は、短命であることが多い。よ

り性能の良い量産車の足手まといになったり、逆に性能を抑えた量産車と足並みを揃えることが難しかったりする為、早期に廃車されてしまうからだ。そもそも試験が失敗し、遂に量産車が誕生しないまま、儂い生涯を終える試作車も多い。そんな中、TSEの振子試験は大成功を納め、量産車登場後もその高性能な振子とエンジンの力を遺憾無く発揮した。量産車と共に旅客運用に着き、常に四国の鉄道の最前線に立ち続けた。JR四国の職員、旅客、鉄道ファン、全ての人に愛された車両だった。

そして二〇一八年三月一七日、三〇年近くに及んだ長い現役生活に、終止符を打った。

引退したTSEは現在、JR四国の車両工場のある多度津で静かに余生を送っている。しかし、それも長くは続くまい。近い将来、鉄道歴史パークInSA-JOに移され、保存、展示される可能性が高いからだ。鉄道の新たな歴史を作った「名試作車」はここで、永々の生を授かり、振子式気動車両のバイオニアの生き様を伝えて行くことになるのだ。

二時間程西条に滞在した我々は、松山へ向かう予定だったのだが、雨がかなり強くなって来ていた。恐らく松山まで行く事はできるが、帰る時に列車が止まってしまったら、帰路につくことができない。そうなるとは一大事と、安全を優先し、今日は松山へは行かず、西条から折り返すこととなった。西条から徳島へは、来た際と同じルートを辿った。

二日目は、中休み、じっくり体を休め、三日目に備えた。三日目が、待ち遠しかった。

三日目、我々はまた早朝の徳島駅にいた。一日目と同様、我々は特急うずしお二号で高松へと向かい、高松から松山までも一日目とほぼ同じルートを辿った(ただし、高松から宇多津までは一日目と異なり、特急しまんと三号に乗車した。高松と高知、中村、宿毛を結ぶ特急しまんとは、途中の多度津までは特急いしづちと同じ線路を走行する。その為、高松と多度津間の停車駅、坂出、宇多津、丸亀、多度津のいずれかで特急いしづちに乗り換えれば、松山に辿り着くことができる。因みに、特急し

まんとにも二〇〇〇系気動車が使われている)(なぜわざわざ、乗り換えの必要な列車に乗車したのか、疑問に思う方も多いだろう。理由は単純明快。オタクとして、より多くの列車に乗車してみたかったからだ)。高松を出発してから二時間半程で、松山に到着した。一日目には到頭、辿り着くことのできなかった松山だ。しかし鉄道オタクの我々は、道後温泉に浸かったり、この四国最大の都市をぶらぶら歩き回ったりはしない。目の前にあるのは、ただただ鉄道ばかりなのだから。

松山から先は、特急宇和海九号に乗車して、宇和島に向かった。松山と宇和島を結ぶ特急宇和海は、一九九〇年に登場した。特急宇和海にも、二〇〇〇系が使用される。この日の特急宇和海は、量産車が使われていた。

量産車の外観は基本的に、試作車TSEのそれを踏襲している。ステンレス地に水色の帯が爽やかだ。しかし、TSEでは黒に被われていた前面には、黄色のアクセントが入っている。TSEと量産車の、大きな違いの一つだ(その他、細かな違いが幾つかある)。

我々は特急しおかせ、いしづち一号から、特急宇和海九号に乗り換えただが、その乗り換え方法も独特だった。

松山駅一番線に入線した特急しおかせ、いしづち一号。その目の前に、同じ一番線に、特急宇和海九号は停車していたのだ。乗り換え易いように、というJR四国の気遣いである。

八〇〇〇系と二〇〇〇系。共に一時代を築き上げた振子式車両の、夢の共演である。この眺めを一言で表すと、壮観が相応しかろう。

折り返し準備を進める特急しおかせ、いしづちに見送られながら、我々を乗せた特急宇和海九号は松山を発車。一〇分足らずで、最初の停車駅である伊予市に到着した。ここから先、伊予市を発車してからの二五分間が、特急宇和海の真骨頂だ。

伊予市を発車して少しすると、線路が二手に分岐した。右手の線路は「愛ある伊予灘線。」海沿いの風光明媚な路線だが、崖に張り付いた様な線路を進む為、速度が出

せない。そこで、宇和島へ行く特急列車の速度向上の為に、短絡線として開通したのが左手の「内子線」である。一九八六年に短絡線に組み込まれた内子線は、予讃線のバイパスの役割を果たしており、山間部を高架やトンネルで抜けて行く為、愛ある伊予灘線に比べて大幅なスピードアップが成されている。

内子線に進んだ特急宇和海は、身を翻すかの様に全開加速し、山中の高架に躍り出た。そしてそのままのスピードで、山間やトンネルへと次々と突っ込む。地面よりも少し高い高架の上を、限界の速度で走り抜ける特急宇和海九号に乗りしていた我々は、空を飛んでいるかの様な錯覚に陥ってしまった(トンネルにも全く速度を落とさず進入する為、所謂耳ツンも途轍も無かった。トンネルに突入する度に、耳が破壊されるかと思った)。

暫く座席でそのスピードを体感した後、我々はそのスピードを更に感じる事ができる場所へと移った。運転台の真後ろである。

実は、二〇〇〇系は(八〇〇〇系もそうなのだが)運

転台とデッキがガラスで仕切られており、運転台越しに前面展望が楽しめるのだ。運転手と同じ目線からだど、二〇〇〇系の章駄天ぶりが良く分かる。私はそれこそ、ガラスに齧り付くようにして、移り行く景色を何時迄も眺めていた。

松山を発車して一時間と少し後、特急宇和海九号は終点に到着した。最果ての地、宇和島だった。ここから先は、元来た道を引き返すだけである。

特急宇和海一六号、特急いしづち号、特急うずしお号に乗りし、午後の八時半頃に徳島に帰着した(因みに、特急宇和海一六号はアンパンマン列車だった。高知県はアンパンマンの原作者、故やなせたかし先生の出身地。そこでJR四国は、四国各地でアンパンマンのキャラクターをデザインしたアンパンマン列車を、特急列車として運行している。二〇〇〇系や八〇〇〇系を、ラッピングした車両を使用。臨時運転ではなく、定期運用。時刻表などを確認しない限り、乗車する予定の列車がアンパンマン列車か分からない為、ホームに入線して来た列車

を見て初めて気が付くことも多い。アンパンマンの仲間達が象られたアンパンマンシートに、スーツ姿のサラリーマンが座っている、といった一寸シニールな光景も、四国では日常茶飯事だ。長い長い三日間だった。

以上で、我々の四国鉄道旅行の記録は終わりだ。読破して頂き、誠に有難う御座いました。



中学生の部  
選考委員特別賞  
那須正幹賞

## 「かるたの世界に魅せられて」

鳥取市立鹿野学園 七年

田村 綾梨

していましたが、鳥取県かるた協会の先生に、「かるたをずっとやり続けていくと、違う方向からも物事を見ることが出来て楽しいよ。百人一首の魅力にも触れられるよ。」と教えてもらったことをきっかけに、百人一首について興味を持つようになりました。調べてみると、私の身近なところでも百人一首が関係していることが分かりました。

「ちはやふる 鳥取へん…カルタと出会った小学五年生の頃」

「カルタと私」

競技かるたを始めて三年になりました。映画「ちはやふる」に憧れて競技かるたを始めた妹は、全国小中学生

競技かるた大会で四位をとるまでに成長しました。

私は、鳥取県かるた大会で昨年は、小学生の部で優勝することが出来ました。

今までは、競技かるたの試合で勝つことだけを目標に

授業が少しく早く終わると、百人一首の札を先生が出してくれて、クラス全員でかるたをやります。すごく楽しかったのを覚えています。その時、同じようにかるたが大好きになった友達とかるたクラブを作って、放課後に

練習しました。

男の子二人と私でかるた中心の生活が始まりました。

映画「ちはやふる」の影響もあり、私たちのかるたブームも頂点になりました。学校が終わったら、すぐかばんを持って近くの公民館に集合です。休みの日や放課後、学校が半日の日も公民館で練習しました。

自分たちで考えたスピード練習は楽しくて時間がたつのを忘れるほどでした。部屋のすみに札をおいて、上の句が読まれたら走ってとりにいくゲームです。負けたらその場でスクワットをします。負けると筋肉痛になるので大変です。

札とばしゲームもおもしろいです。札を縦に並べて順番にとばしていきます。この練習でかるたをとるときのとばし方が上手になりました。映画「ちはやふる」のあらた、たいち、ちはやの三人組のように私たちはかるた中心の生活を送りました。

「鳥取県かるた協会に入会…相手をおもいやることの大切さを習う」

鳥取県かるた協会に入会した後は、先生や大学のお兄さんやお姉さんから自己流ではないやり方を教えてもらいました。初めて知った競技かるたの正式なルールです。私たちは今まで「楽しい!」という思いだけでかるたをやっていましたが、きちんとしたルールやマナーなどを学びました。

まず初めに、先生から「始まる五分前には、全員正座をして並んでいること。すぐに挨拶をしてはじめられるように!」

「自分で考えて行動できるように。自分から荷物を運び、準備できるように周りに気を配ること。」

ということを教えてくださいました。

かるたをする前に基本的な行動をきちんと身につけることは、とても大切なことだということをしっかりと教えてもらいました。服装も大切だそうです。派手な格好をしないこと。これも大切なことです。相手が嫌な気持ちにならない服装に気を配るのも、相手を思いやる上で大切だと教えてもらいました。

「かるた協会での練習：共に学び、競い合う楽しさを知る」

鳥取県かるた協会では、鳥取県で競技かるたをする人が集まって練習をします。子どもから大人までで、約六十人います。

先生は、もと高校の校長先生で、退職されたあと、ボランティアで指導をしてくれています。すごく優しい先生で、みんな大好きです。

月に二回程度、鳥取県東部の公民館をかりて四から五時間くらい練習をします。

鳥取県は、交通機関が発達していないので列車で片道二時間以上かけて練習に通ってくる人もいます。

鳥取大学競技かるた部の大学生のお兄さんやお姉さんも参加してくれてとてもにぎやかで楽しいです。特に、大学生のお姉さんが小学生を中心に基本から教えてくれます。とても分かりやすく優しいので大好きです。

また、お姉さんは大学での勉強のことや研究のことも教えてくれます。私も理科が好きなので楽しいです。

お兄さんは、将来学校の先生になりたいと教えてくれました。卒業論文で百人一首について研究する予定だと聞いたので、私は今からとても楽しみます。

かるた協会での練習は、みんな真剣です。大人と練習するときもあれば、大学生、高校生、同じ中学生と組むこともあります。年齢は関係ありません。この練習会では、ともに学び、競い合うことが出来るので楽しいです。

「かるたルール講習会に参加：少しだけ大人になった気分」

私は、中学生になり、中国支部競技かるたルール講習会に参加することになりました。全日本かるた協会公認審判員で、かるた六段の中門研太先生が実技も含めて丁寧に説明してくれました。

私たちが住む鳥取県は大きな大会や講習会は他県に比べて受講できるチャンスが少ないので、とても貴重な経験でした。

競技かるたというのは小倉百人一首のかるたを使って二人の競技者の間で行われます。百枚の取り札から無作

為に五十枚をとり、そのうち二十五枚を自分の持ち札とします。出札を取り合い、早く持ち札がなくなった方が勝利となります。

また、競技かるたは他のスポーツなどとは違い、お互いにお手つきや、どちらがとったかを自分たちで判定します。審判などはいません。そのため、競技で一番大切なものは、「互いに相手を尊重するとともに、礼節を重んじる」ということです。

競技かるたは、はじめと終わりに挨拶をします。礼節を重んじることにより、相手に一層強く見せることが出来、自分は強いぞ。という雰囲気を出します。そうすると、相手は消極的になってしまふことがあると、かるた協会のお姉さんから教えてもらいました。

服装も相手に不快に思わせないように気を付ける必要があるのですが、チームでTシャツを作って着ることもありません。

私自身、相手がどうどうとしていたので、強そうだなと思って緊張してしまったことがありました。一回、相

手が強そうだからダメだなと弱気になる、攻めることが難しくなることがあります。だから、礼節を大切にすることは、とても重要だと思います。自分自身が礼節を守り、きちんとしていたら気持ち的にも勝てると思うので、礼節には気を付けたいと思います。

また、かるたには、競技線というものがあります。競技線とは、自陣と敵陣二十五枚ずつ並べその囲んだまわりの線のことを言います。

原則では、横八十七センチメートル、上中下段の間に各一センチメートル、自陣と敵陣の間に三センチメートルあけることになっています。札を並べた後に十五分間の暗記時間があります。この十五分間集中して札の位置を覚えます。一度並べた札を移動するときは相手に必ず、報告しないとけません。暗記時間を有効的に使うことによって、その後の流れが少しかわってきます。

そして札をとるときの構え方もきまっています。札をとる手は、自分の札の下段よりも手前におかないといけません。頭は自分の札の上段よりも対戦側に出してはい

けません。

また、競技かるたの札をとるとき、止めてとることもありますが、基本的には払うことが多いです。払った札がとんでしまった場合、札を自分でとりに行く必要があります。しかし、対戦者もできるかぎり協力することを求められます。

そして試合中は、あぐら、立ちひざ、中腰などの姿勢はよくありません。競技かるたはお互いにきちんと礼節が必要だからです。

かるた協会の先生からも、相手を思いやる気持ちと自分から行動することの大切さを教えてもらいました。例えば、荷物や机の移動なども、自分から進んで「手伝います」と言って行動することが大切だということです。

私は、このルール講習会を受講して競技かるたのルールだけではなく、これから大人になる私たちにとって本当に必要な力をつけるアドバイスをもたらしたような気がしました。

「かるたの大会に参加…少しづつ成長していく」

られています。

名人位戦やクイーン位戦、全国高等学校かるた選手権などが毎年行われています。野球で言えば、甲子園のようで、名前のとおり、「かるた甲子園」とも呼ばれている大会もあります。

かるた大会は年に何回かあります。各地で行われますが、私たちの住む地方は、なかなか運営スタッフも集まらず、開催されないため、大きな都市まで泊まり込みで行かなければなりません。費用も時間もかかります。

また、競技かるたには、級や段がありますが、大会に出場しなければチャンスがありません。

鳥取県かるた協会の先生に級や段のちがいについて教えてもらいました。私は、まだ正式な試合に出たことがないので、段はもっていません。「段位」とは、競技かるたをする人の実力を表す数字のことです。反対に、「級」とは、段位を持っていない選手が出られる大会のレベルのことを言います。だから、大会で「競技かるた大会A級会場」などと記されています。

かるたは、それぞれ住んでいる町の近くにあるかるた協会に所属し日頃から練習を重ねて、大会へ出場します。私は、昨年はじめて鳥取県大会（鳥取県かるた協会のメンバーで試合をする）に参加しました。トーナメント方式で勝ち抜いていく方法でやります。私は、小学生の部で優勝することが出来ました。

妹は、同日に滋賀県で行われた全国競技かるた小中学生選手権大会に参加しました。昨年、一昨年とも全国で四位という成果をおさめてきました。

「年に一回、大会に参加しよう！」

と家族と決めました。大きくなって自分で会場まで行けるようになったら、たくさん試合に出られるように今からコツコツと練習をしていきたいと思います。少しずつでもいいので、努力を積み重ねて成長していきたいと思っています。

また、競技かるたをやる人にとっては、滋賀県大津市にある大江神宮は「かるたの殿堂」といわれ、憧れの場所です。大江神宮は、大津京を建都した天智天皇がまつ

「競技かるた三段です。」

と言ったら、その人の実力が分かります。

A級からE級まであり、E級は初心者、D級はこれから段位を目指す人対象になります。アルファベットAに近づくほど、強い人たちの集まりになります。D、E級は無段になります。

段位をとるには、大会に出場しなければチャンスがありません。ほかのスポーツなどとは違い、試験を受けて段位をとるのではなく、大会で三位以内に入賞したら段位がもらえるというシステムだからです。

段位取得は今現在、D級の試合に出場して第三位以上になったらC級になれます。試合に出る選手が多かったら、その大会責任者の判断で、試合のグループをいくつかに分け、それぞれのグループの優勝、準優勝、第三位がC級に昇格できることとなります。沢山選手がいたら十組以上のグループができて三十人以上が一度に昇段することになります。

最近、漫画「ちはやふる」の影響で、競技かるた人

口も増え、大会に人数制限がかけられるようになりました。鳥取県かるた協会の高校生や大学生のお兄さんやお姉さんは大会へ出場するために頑張っています。人口の少ない鳥取県でも、若手のA級選手が育っていつてくれるのを楽しみにしていると鳥取県かるた協会の先生が言っていました。私も、日々の練習をしっかりと何年後か段位取得が出来るようになります。

「百人一首の魅力を知るⅠ：学校裏の水谷湖山・和泉式部と小式部内侍」

鳥取にゆかりのある百人一首について調べていたら、私の学校の近くにも、ゆかりがあることを知りました。地元の人あまり知らないと思います。

鳥取市鹿野町水谷にある住吉神社は私たちの学校から二から三分くらいのところにあります。この住吉神社の入り口に小式部内侍産湯の井戸跡地があります。百人一首「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天橋立」の歌で有名な小式部内侍は、九百九十年から九百九十五年私たちに学校の裏山にある鹿野町水谷で生まれ

たといわれています。鹿野町水谷は、田畑で囲まれた自然豊かな所です。鶯が羽を広げているように見える鶯峰山がそびえ、近くには湧き水として有名な布勢の清水があります。この水はとてもきれいで生活用水だけではなく、地元カフェのコーヒーや地酒にも使用されています。

私たちの学校では、鹿野町水谷の田畑のまわりを毎年マラソンコースとして中学生全員で走っています。

私は鹿野学園という学校へ通うようになって、はじめて百人一首をよんだ小式部内侍が学校の近くで生まれたことを知りました。

小式部内侍のお母さんは、歌を詠むのが上手な和泉式部です。和泉式部も百人一首「あらざらむこの世のほかの思い出に今ひとたびの逢うこともがな」の歌を詠んだ人です。水谷にあった住吉神社は歌道の神様として人々に大切にされていたそうです。

和泉式部は、妊娠して故郷の湖山（鳥取市鳥取空港辺り）に帰った時、住吉神社にお参りし、安産と生まれてくる子どものことを祈ったと伝えられています。

今も、神社参道の近くに水をくんだとされる井戸の跡がありました。

小式部内侍のことを調べてみると、お母さんの和泉式部は、私の住む湖山町で生まれたことが分かり、びっくりしました。

歩いて町を散策してみたら、家からすぐ近くに、和泉式部の産湯の跡地がありました。ひっそりと民家のことなりにありました。

和泉式部の故郷鳥取市湖山町から小式部内侍が生まれた鹿野町水谷へは、車だと二十五分くらいかかりました。私は、毎日学校へ行くため、列車とバスと徒歩で一時間くらいかけて通っています。

私は、和泉式部が住吉神社まで行くのに、昔のことだから歩いて行っただけで仮定しました。そして、父と妹と一緒に湖山から水谷まで山を越えてマラソンをしてみました。約二時間かかりました。およそ二十キロメートルあります。当時は、道がなかったと思うので、私が走った山道を通って住吉神社までお参りに行ったと思います。

母が子どもを思う気持ちとはとてもすごいなと思いました。「百人一首の魅力を知るⅡ：令和時代：万葉のふるさと国府にて、鳥取にゆかりのある札を知る」

今年、新元号「令和」が発表されました。「令和」は、初めて日本の書物からできた元号です。

もともになった歌集「万葉集」は、百人一首にも関係があることが分かっています。万葉集は、今から千三百年ほど前の八世紀半ばにできたといわれています。全部で二十巻あり約四千五百首の和歌がおさめられています。「万葉集」とは、「多くの言葉」を集めたものという意味や「万世に伝わるように」という意味があるといわれています。また、万葉集で多いのが恋の歌です。恋人に会いたい気持ちや恋の切なさがつたわられています。

他には、「防人（さきもり）」と呼ばれた人たちの歌も有名です。防人は九州を守るために東国から集められた人たちのことで、故郷に残した家族への歌を数多くよんだそうです。

いつの時代も、大切な人やふるさとを思う気持ちは変



わらないと思いました。

万葉集と聞くと、難しくて今までは興味がなかったのですが、令和の時代になり今年は「万葉集」という言葉を耳にする機会が多くなりました。

新元号「令和」のもととなった歌は、万葉集三十二首「梅花の歌」の序文です。

「初春（しよしゆん）の令月（れいげつ）にして気淑（よ）く風和（やはら）ぎ、梅は鏡前（きやうぜん）の粉（こ）を披（ひら）き蘭（らん）は珮後（はいご）の香（かう）を薫（かをら）す。」

この歌は、初春の佳き月で、空気は清くすみわたり、風はやわらかくそよいでいるという意味です。令和にした理由は、「この梅の花のように国民一人ひとりが咲き誇れる、そんな日本でありたい」との願いが込められているそうです。

令和時代は、私が生き抜いていく時代だから、歌の意味を知って、なんてきれいな歌なんだと感動しました。平和な時代になってほしいです。

そして万葉集について、調べてみると百人一首にもつながりがあり、また私の住む町の近くにも関係があることが分かりました。

鳥取県かるた協会は、鳥取市東部にある国府町の公民館で練習をしています。

鳥取市国府町は、因幡の国の国府が置かれた場所ので、万葉集の編者である大伴家持も国府として赴任していました。

万葉集最後の歌は、七百五十九年に因幡の国（現在の国府町）でよまれたといわれています。近くには、因幡万葉歴史館があり、秋には万葉集の朗唱の会が開かれ、毎年たくさんの人でにぎわいます。また、因幡国庁跡史跡（奈良時代から鎌倉時代のはじめまで因幡の国庁があったところ）や大伴家持歌碑もあり、見どころたっぷりです。大伴家持は、万葉集をまとめた人です。百人一首では、中納言家持といわれ、「かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜を更けにける」という歌をよんだ人です。

私がかかるたの練習をする公民館のまわりには多くの歴史的な遺産があり、万葉人も眺めた豊かな自然がたくさんあってとても幸せな気分になります。かかるたの練習が「万葉のふるさと国府」でできることを感謝しないとけないなど改めて思いました。

また、因幡の国に行く前に中納言行平が、「たちわかれいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」という歌をよみました。「お別れして私は因幡の山に行きますが、その山に生えている松のように、私のことを待つ人がいることを聞けば、今すぐに帰ります」という意味になります。この歌をよんだ中納言行平は、「ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれないに水くくるとは」をよんだ在原業平朝臣の兄と言われています。

百人一首を読み進めるといろいろなところがかかわりがあって面白いです。

「百人一首の魅力を知るⅢ：京都嵯峨嵐山をたずねて」

百人一首は、約八百年前に藤原定家が京都府にある嵯

峨嵐山で優れた和歌を選んだことからじまったと伝えられています。私は、百人一首の歴史やどんな風景のところでもよまれたのかを知りたくて、夏休みに家族で嵯峨嵐山へ行きました。まず嵯峨嵐山文華館へ行きました。百人一首博物館です。ここでは、百人一首にまつわるクイズや歴史なども紹介されていました。「百人一首」とは、約八百年前に活躍した歌人、藤原定家が選んだ百人の歌人の歌を編んだ歌集のことです。和歌は「五・七・五・七・七」の三十一音の韻律でよまれますが、その前半を上句、後半を下句と呼びます。百人一首かるたには、絵札に歌全体が書かれています。取り札には下の句がかかれていて、かるた遊びでは、百枚の取り札を広げて、読み上げられた絵札の歌の下句の歌をとって遊ぶ遊びです。私も小さいころからおばあちゃんの家で遊んでいました。誰もが一度は手にしたことがあると思います。

しかし、博物館でかるたは最初、色紙にかかれていたということを知りました。

百人一首の撰者の藤原定家は息子の妻の父、宇都宮頼綱に嵯峨の山荘に飾る色紙の制作を頼まれました。それが「小倉色紙」と言われ百人一首の原形とされたそうです。

そして、今から三百年ほど前の江戸時代に南蛮貿易によってポルトガルからもたらされた「カード」に由来してかるたという言葉が生まれました。

江戸時代後期は、百人一首は双六として用いられていました。サイコロは使わずに、下の句の札をひいて上の句の札の上に置いていくという遊びです。上の句と下の句が別々になっているので、百人一首をすべて覚えていないとできない遊びです。

そして、幕末から明治にかけて、かるた札に変化がおこりました。今までは、上の句と下の句が対になっていましたが、このころから一首すべてがかかれた札と下の句のみがかかれた札が出来たため、百人一首を暗記していない人もかるた遊びができるようになったそうです。今までは上流階級の人しか知らなかったかるたも、庶民

の生活にも溶け込むようになりました。特に、女性の教養として教科書としてもつかわれたそうです。

明治三十七年、私たちがやっている競技かるたはスタートしました。

また、私が今やっている競技かるたは、読まれた札の下の句の札をとるのは、ふつうのかるたと同じですが、基本的に一対一で勝負をします。使う札は全部で五十枚。二十五枚ずつの持ち札を各自の陣に表向きに並べ、十五分間で札の場所を覚えて、試合スタートです。自陣の札をとれば持ち札が減りますが、敵陣の札をとったら、自陣の札を一枚敵陣にあげます。先に自分の持ち札がなくなった方が勝ちです。

京都嵯峨嵐山を旅して感じたことは、かるたは、三十一文字の中に四季の美しさや恋の切なさが表現され、たくさんの人たちに愛され、現在まで形を変えながら私たちに引き継がれているということです。人々に愛され続ける歌、百人一首の魅力を味わうことが出来て私は、少し大人になりました。

#### 「未来へ続くかるたの世界」

かるたをはじめてから「勝つ」だけを目指してきたころと比べて、より深く百人一首のことを知ることが出来るようになり、「楽しい!」と思えるようになりました。

長い年月をかけて、私と出会ったかるた。今回、調べてみて百人一首の世界に舞い戻ったような気持ちになりました。私のふるさと鳥取でこんなにも百人一首の時代とつながりがあることが分かり、すごうれしかったです。

妹は、通っている小学校でかるたクラブが出来ました。たくさんさんの友達にかるたの楽しさを伝えていきます。

姉は、国語の授業で百人一首について詳しく勉強をしています。古典文学が大好きだそうです。

私は、今回の研究を通して、もっと深く知りたい、調べたいと思うようになりました。そして、地元鳥取を大切にし、未来へつなげていきたいと思っています。

#### 協力

- ・嵯峨嵐山文華館（京都市右京区）
- ・因幡万葉歴史館（鳥取市国府町）
- ・鹿野往來交流館童里夢（鳥取市鹿野町）



中学生の部  
選考委員特別賞  
最相葉月賞

「今を生きる」

「トラウマからの脱出」

北陵中学校 二年

熊田 和真

二〇一一年三月十一日(金) 14時45分18秒。

この時から人生が大きく変ってしまった人は沢山いるだろう。僕もそのうちの一人だ。

宮城県牡鹿半島東南東沖、130キロメートルを震源とする東北地方太平洋沖地震が発生。

地震の規模はマグニチュード9.0。観測史上最大の地震。その名は「東日本大震災」

震災から2年経過し、人々の記憶の中から忘れさられ

ようとしている出来事を、僕は自分の体験を元に当時を振り返り、自分の中にある「トラウマ」にどう向き合い、克服する事ができたのかを伝えたいと思います。

震災当時の僕は6歳。福島県郡山市に父・母・兄の4人家族で住んでいました。

震災当日は幼稚園に居ました。激しく揺れ動く教室の中で僕のとなりに座っていたY君は泣いていました。僕も怖さを感じていましたが、教室から運動場へ移動する時に、僕はY君の手を握り、背中をさすり「大丈夫だよ。僕がいるよ」と声かけをしていたそうです。

運動場に停めていたバスの中で手を握り合いながら、余震の揺れの恐怖に耐えながら、母の迎えを待っていました。Y君のところよりも、母の迎えが早かったので、僕はY君がとても心配でしたが、先生が「Y君のお母さんももうすぐ来るから大丈夫だよ」と言ってくれたので安心して自宅に戻る事ができましたが、家に帰る方向とは違う方へ車を走らせる母に「お家の方向と違うよ」と声をかけると「お家は地震で壊れて住めなくなったから、

じいちゃんの家に行くんだよ。」と小さな声で返事が返ってきました。僕の住んでいた家は活断層の上であり、横並びの家々は全て、玄関とアプローチの間に50cm以上の亀裂が入り、配管がずれ、家が傾き、住めない状態なので「全壊」と判定されました。

翌日、小学校・幼稚園共々休みとなり、僕は兄と一緒にいつも通りブロックで遊んでいた。その横のTVに映るニュースでは「窓を閉めて、用事のない人は家の外には出ないように!」と強口調で繰り返し聞こえてきた事をうっすらと覚えている。

後で調べてみると、3月12日15時36分「東京電力福島第一原発の1号機原子炉建屋が水素爆発。続けて3月14日11時1分、3号機原子炉建屋が水素爆発、翌日15日には、2号機、4号機の水素爆発と続いた。浜通りの人達は原発爆発の事故の影響により強制避難を強いられ、着のみ着のまま、あるいはポストンバッグ一袋分に荷物をまとめて僕の住んでいる中通り地方へ移動させられて来た。

TVを見ながら父と母・じいちゃん達と話し合い、母の実家のある大阪へ、兄・僕・母の3人で避難する事になった。しかし、震災の影響で新幹線は不通。3月15日によろやく「東京―那須塩原間が運転再開したが、原発爆発の影響で、福島県内には物資が入って来ずガソリンスタンドも長蛇の列ができていた。郡山市↓那須塩原まで往復すると、ガソリンの量が減ってしまう。避難の手段を必死で探す母を見ながら、「大阪のじいちゃんに会えるね。楽しみだね。」と僕は笑いながら言ったのに対し母は、「そうだね」と弱く暗い声で答えていた。

母が必死に探し出した、福島↓伊丹空港行きのチケット3枚。たまたま同じ便に搭乗する母の友達家族の方が福島空港まで送ってくれて、僕たち3人は福島県を離れる事ができた。伊丹空港へ到着すると、大阪のばあちゃんが優しい笑顔で「よく来たね、怖かっただろうね。」と迎えてくれた。でも、その目からは涙が流れていた。僕はその時の顔を今でも忘れてはいない。

同じ震災があった日本とは思えない程、大阪では普通時

間が流れていた。

福島県は原発事故の影響により、支援物資は届かず、スーパーからは物が消え、食べ物を手に入れる事に苦労したのに、大阪のスーパーには沢山の野菜・果物が並べられていて、僕の目には虹色に輝いて見えた。

「同じ日本なのに、なんでこんなにも違うのかな？ 福島人にも分けてあげたいよ」と兄は母に言ったそうです。

大阪での避難生活は一ヶ月続きました。

福島では外で遊べなかったけど、大阪では思う存分公園で走り回り、遊具で遊ぶ事ができました。伯母さんが動物園へ連れて行ってくれたり、じいちゃん、ばあちゃんは、毎日おいしい物を作ってくれて、夢のような生活を過ごす事ができましたが、母は笑いませんでした。その理由は後半になってわかります。

母の仕事の都合により、新学期の始まる前に、福島へ戻る事になりました。福島へ戻ると、避難当時とは違い、食べ物など流通は正常通りに戻っていましたが、僕の家はまだ再建できておらず、おじいちゃん家での生活が始

まりました。

夏の暑い頃では、長袖・長ズボン・マスク着用で通学・通園し、小学校では、自分の机以上で用事も無い時は立ち上がり、自分の机の上で遊べる物を持ってきなさい。走り周ると、ホコリが舞うから。幼稚園では、ガラスバッチ（個人総量計）の携帯を強要されるようになり、子どもたちが子どもらしく遊ばせられない教育環境へ、不満を持った母は、再び大阪へ避難する事を決めましたが、父とケンカとなり、決着をつけないまま、僕たち3人は再び大阪の地を踏んだのは二〇一一年十月一日でした。新しい幼稚園の初登園日、僕は幼稚園へ向かう車の中では終始笑顔でしたが、いざ到着し校門で担任の先生と園長先生が待っていてくれましたが、僕は門にしがみつき「お腹痛いから帰る」と門につかまり、先生達を困らせました。登園すれば門へしがみつくと、蟬のような行動はしばらく続きましたが、新しい友達もできると少しずつ馴染む事ができました。

ある日、家に帰って母に「友達と話してたらみんな怒っ

ていたよ」と話しました。「それは関西弁という言葉で、怒ってなくても、話し方によっては、そんな風に聞こえてしまうんだよ。」と言われ、言葉の違いの戸惑いはこの先も少し続きました。

時は流れ、小学校へ入学。低学年のうちには、震災の事、放射能の事を考える日はありませんでした。ただ年に一度ある行事が僕は嫌で仕方ありませんでした。それは「父親参観（土曜参観）」です。授業が終わり、友達に「帰ろ」と誘っても「こめんね。今日はお父さんと帰る」と言われ、お父さんと手をつないで帰る友達の後姿を見送っているとうらやましい気持ちと寂しい気持ちになりました。そんな時、2学年上の兄が校門で待っていてくれて手ははずかしくてつなぎませんが、兄の心の温かさを感じました。しかし大阪での避難生活が続く中、父は僕たちに会いに来る事は、一度もありませんでした。父に会いたい思いを母に伝えると悲しい思いをさせてしまうと思ひ、素直に気持ちを伝えられませんでした。

小学校高学年になると、理科や社会の授業で、「東日

本大震災」について触れる事が多くなり津波・原発の映像を見る事で、眠っていた辛い記憶を呼び覚ましてきました。言葉にできない心のモヤモヤは「トラウマ」として自分の感情や態度などにも出て来るようになった頃、僕の運命を変える出会いがありました。小学5年時の担任の先生です。先生は担任を持つ前に企業留学で一般企業で仕事をしていたそうで、その会社は「震災関連」事業をしていた会社で福島には何度か行った事があるそうで、小学校へ戻り担任を持ったクラスに被災児童がいる事を知った先生は「君と私は運命だねー」と話しかけられ、その瞬間、目の前の世界の風景も色も変わりました。今までの4年間は何不自由なく、友達とも楽しい学校生活を送っていたけど、心の中では本当の自分の思いを出せば仲間外れにされてしまうのでは？と、みんなの機嫌を伺いながら、日々を過していた自分に気がつききました。母に本音を伝える事ができないのも「震災に対するトラウマだ」と確信しました。担任の西野先生に出会い「運命だ」と言われた日から、自分を理解してくれる先生と

仲間と、心の底から楽しめる学校生活に変わりました。社会の授業の中で「熊田君のお父さんへ手紙を書こう！」と言う事になり、心のこもった手紙を受け取り帰宅、母へ見せると一通、一通読む度に涙を流していました。手紙の一文には「遠く離れていて色々大変。だとは思いますが、熊ちゃんの事は全力でぼく達が守るから安心して下さい」と。

母は、「自分の思いだけで、避難する事を決め、お父さんと会えない事、関西に馴染めてないのでは？」と思ったけれど、素晴らしい友達と担任の先生に恵まれて幸せだね」と笑顔で言ってくれました。僕もこの手紙をもらった時から、心の中のモヤモヤトラウマが溶けてなくなる心地の良い感じがありました。

この時系列の自身は高学年になってから、教えてもらった事が含まれています。

6歳で「震災」を体験し、僕の生活拠点は福島から大阪へ変わり、また大阪で過ごした避難生活の年数が福島県で過ごした年数を超えました。母が「母子避難」を選択

してなかったら、僕はずっと「トラウマ」を抱えたままだったかもしれない。克服する勇氣は、自分から逃げずに、向き合う事、そして現状を理解し、誰かに思いを話す事です。母が避難直後に笑えなかったのは、「友達を置いて福島県から逃げた罪悪感からだ」と言っていました。人が一生で出会う確率は百万分の一だそうです。震災によって人生が変わってしまったけれど逆に震災がなければ出会う事のなかった仲間と担任の先生との出会い。これは全て神様が僕にくれた贈り物なのだと思います。

自分は一人で生きているのではなく、周りから生かされている事に気づき、まだ何も起きていない白紙で自由のある明日へ向って、今ある幸せをかみしめながら、大きな一歩を踏み出し、人の心を豊かにできる大人になりたいです。いえ。なってみせます。絶対に!!



中学生の部  
選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

「出会い」

前橋市立第一中学校 一年

新池谷 悠

私は、今までたくさん動物に出会ってきた。小さい頃から動物が大好きな私は、どこかに出かける時は、動物と関連のある場所を必ず選んでいた。その数々の場所で出会った動物達と私の物語を書いていくことにする。

私はまだ五、六歳で広島に住んでいた時、家族で島根県隠岐諸島に旅行に行ったことがある。そこは、とても自然豊かなところだった。きれいな海や山。不思議な形

の岩や大きな杉の木があった。特に、船の上から見たローソク島に沈む夕日がきれいだった。しかし、私にとって一番この島で印象に残ったのは、「牛」だった。隠岐の島の牛は、私が今まで見た牛とは違った。柵も何もないところを自由に歩いていたのだ。道路の真ん中に、堂々と座っている牛を見て、運転中の父が動揺していたのを今でも覚えている。そして、兄と一緒に「じゃま、どけ。」と言って、車のクラクションを鳴らしていたのに対し、私は「牛さん、ゆっくりいいよ。」と言っていと母が教えてくれた。

私は、牛がいる道を歩くのが楽しくて仕方がなかった。だから、遊歩道を「歩いて帰ろう。」と言って、車で帰ったかった兄ともめた。歩くのが好きな父は、私に賛同し、兄にたたかれたり、噛まれたりしていた気がする。その旅行から、私の牛ブームが始まった。牛の絵を書いたり、母と牛のなりきりごっこをした。そして、兄が冬休みの宿題で習字をしていた時、余った紙をもらって、私はひら仮名で「うし」と書いた。私は、その時、動物の中で

牛が一番好きだった。その気持ちは、今でも続いている。

家畜である牛は、私達人間が食べる牛肉として殺されてしまっていたのは、幼いころから知っていた。それは、かわいそうなことだけれど、人間が生きていく上で仕方がないと思っっている。しかし、牛などの畜産動物は、伝染病にかかると、他の農家の畜産動物にうつるからと、すべて殺されてしまっていることを知り、驚いた。

小学六年生の時、新聞で「豚コレラ」の記事を読んだ。豚コレラのウイルスは、養豚場を出入りする人の靴や車のタイヤなどに付いて運ばれたり、野生のイノシシを介して広まるらしい。また、豚コレラにかかった豚はもろろん、病気が発生した養豚場で飼われていた豚も全て殺されてしまう、ことを知った。なぜ病気がかかっていない豚まで殺してしまうのか。それは、同じ養豚場にいる豚は、豚コレラのウイルスを保有している可能性があり、そのウイルスをふうじこめるために、全てを殺していることが分かった。

私の夢は獣医師だが、牛が好きだったこともあり、小学校の卒業文集には、夢を「産業動物獣医師」と書いた。これは、主に牛や豚などの畜産動物の健康管理をする仕事で、大好きな牛とも関われるし、たくさん動物を元気にできて、やりがいを感じられると思っていたからだ。しかし、このような豚コレラにかかった豚を殺すのもまた、獣医師の仕事であることを知った。命を助ける仕事だと考えていた獣医師が、命を奪う仕事を行うことがあるのだ。私は、これを知り、とてもショックだった。

それと同時に、私は、獣医師になるためには、動物のこと以外にも考えたり、向き合わなければいけない問題がたくさんあることに気付いた。産業動物である牛や豚は、経済と密接に関係している。だから、お金のことも考えて、理解しなければいけない、と思った。

私は、小学二、三年生の夏休みに、二度にわたって、佐渡島を訪れた。ここの隠岐の島と同様、自然が豊かだった。たらい舟に乗ったり、海では泳いだり、やどかりを捕まえたりもした。

また、この病気には予防できるワクチンがあることも知った。それを使えば、ほとんどの豚は、豚コレラにならない。では、なぜそれを使用しないのだろうか。私はこれを疑問に感じていたが、調べていくうちに、その理由が分かってきた。それは、輸出の関係で使われていなかった。豚がワクチンを接種してしまうと、輸出に有利な「清浄国」の座を奪われてしまうからだ。そうになると、外国へ豚を輸出できにくくなるということのようだ。私は、これは豚の命が経済より大切にされていないことだ、と思った。そして、人間の自分勝手さを腹立たしくも感じた。

今年の九月に入り、豚コレラのワクチン接種の実施が決まった。そのニュースを聞き、私はとてもうれしく思った。これにより、失われる豚の命が減るからだ。しかし、それもまた『輸出の利益より感染拡大に伴う損害のほうが大きい』（令和元年九月三十日、読売新聞朝刊）という理由で、経済が関係していることが分かり、悲しくなった。豚の命よりもお金<sup>お</sup>金<sup>が</sup>大事ということだろうか。

そして、私にとって一番大切なできごとである「トキ」との出会いがあった。トキに出会ったのは、「トキの森公園」だった。私は、旅行の前に、『トキのキンちゃん』の絵本を母に読んでもらっていた。絵本の中で、キンちゃんは、宇治金太郎さんになっついていて、「コイ、コイコイコイコイ、コイ」とよばれるとやって来て、ドジョウを食べたり、彼のひざでおひるねをしたりしていた。このキンちゃんは、日本産トキの最後の一羽だった。絵本のキンちゃんのイメージと目の前にいるトキが重なり合って、私はトキのかわいらしさに魅了された。絵本に描かれていたキンちゃんは、平成十五年に死んでしまい、日本のトキは絶滅してしまったので、この公園にいたのは、中国から来たトキやその子ども達だった。

私は、トキのぬいぐるみを買ってもらい、旅行中ずっとだきしめていた。私は、色々な動物に囲まれて暮らすのが夢だ。しかし、それは無理なので、気に入った動物のぬいぐるみを集めることを趣味にしている。一つひとつに名前まで付けている。最近は、ぬいぐるみの数が増

えすぎて、ケースにしまつてあるものも多く、兄には、「どうせ箱に入れられるのだから、買わない方がよい。」と注意される。たしかに、私はそれらを手に取ることは少なくなった。しかし、それらを見ると、その動物との思い出がよみがえってくる。つまり、それらはわたしにとって、動物とのつながりを感じさせてくれる存在なのだ。

三年生の時に、再びトキに出会った時は、『かわいい』という気持ちだけではなく、トキの飼育方法にも興味をもった。その時の日記には、次のように記していた。「トキをかつているしゅいんんのテレビをみてトキは、こんなふうに見える事、えいようぶそくでしんでしまう事、てんきにけがをさせられる事、などの事が分かりました。トキには、きけんがたくさんあることが分かりました。わたしは、トキの体じゅうと同じ人形をだっこしてみました。思ったよりあまりおもしろくありませんでした。(中略)わたしは、トキのおもしろさがよく分かったので、トキのしゅいんになりたと思いました。」

めてもらった。ちなみに兄は、写真立てにしていた。毛糸をぐるぐる巻きつけるだけにもかかわらず、そのほとんどは母によって作られ、兄は、ビーズをはっていただけなのを覚えている。先生はそれを察したのか、「お兄ちゃんのより上手だね。」と言ってくれた。

そして、中学一年生になった私は、今年の五月のゴールデンウィークに再び新潟を訪れた。その時は佐渡島には行かなかったが、幸運にもトキに出会うことができた。残念ながら野生のトキではなかったが、長岡市トキと自然の学習館「トキみくら」がオープンしていて、そこにトキがいたのだ。そのトキは、全身が灰色がかっていて、奇妙なトキだった。受付の人が「つい最近、羽の色が変わったんですよ。」と教えてくれた。トキは白いイメージがあったから驚いたが、顔を見ると、いつもの私が知っているトキで安心した。トキが黒くなるのは、繁殖期が近づいた時で、これは卵を抱く際の保護色の役目を果たしているようだ。このトキの羽根の色の変わり方が、独特だった。羽が抜け替わるわけではなく、首の上部か

この時、私は、トキの飼育員になりたいと思っていた。それは、トキを飼育する様子のビデオを見たことがきっかけだったと思う。トキを自然界にもどすために、飼育員さんは、トキに外の様子を見せようと努めていたことが、印象に残っている。車が走るところや田植えをするところ、そういう自然界では当たり前な様子も、ケージの中で飼われていたトキは知らない。飼育員さんは、それらを実際に自分で行って、トキに見せていた。保護していたトキは、普通にそのままに放すものだと思っていた私は、とても驚いた。飼育員は、トキにえさをあげたり、フンの掃除をするのが仕事だと思っていたが、このような仕事もあることが分かり、思っていた以上に大変であると感じた。同時に、私は、そのような仕事を面白く感じて、飼育員になりたいと感じたように思う。

この年、私は、夏休みの宿題に、フェルト生地を使って、トキの人形を母と一緒に作った。佐渡牛乳の牛乳パックにデザインされた絵をもとに作成した親子のトキは、とてもかわいらしくできあがり、担任の先生にもほ

ら黒い粉状の物質が出てきて、それを水浴の後に、肩にぬり付けるために、羽の色が黒く変わるのだ。首から出る粉は、人間で言うところの垢のようなイメージがして、少し汚ならしくも感じた。しかしながら、トキは、「自然に」羽が抜け替わるのではなく、「意識的に」羽の色を変えていることが分かり、面白かった。

その他にも資料館で、トキについて学ぶことができた。なかでも、トキの「枝渡し」は、とてもかわいい行動だと思った。これは、くちばしでくわえた小枝などを気に入った相手に渡す求愛行動の一つである。後日、『最後のトキ』という本を読み、トキは獣医さんにもその行動をすることを知った。私もトキからそんなプレゼントを受け取りたい、と思う。

私は、トキも人になつくことが分かった。私が飼っているうさぎも時々、私の足の周りをぐるぐる周ってくれ。これは、構ってほしい合図だ。興奮すると、私の足をかんでくることもあるので、少し困るけれど、なっている感じがして、私はうれしい。しかし、人間と動物

の関係について、人間に飼われることは動物にとって幸せなのか、という疑問は、いつも私の心にある。

「野のものは野に帰してやりたい。命とは何か。野生に帰すことができなかった鳥たちは、私にあらためてそのことを問いかけてくるのです。」これは、私の尊敬する獣医師、齊藤慶輔さんの言葉だ。トキのキンちゃんを初め、人間に飼われている動物達は幸せなのか、私は、最近そのように考えるようになった。上橋菜穂子さんの『獣の奏者』という本を読んでからは、一層その思いが強くなった。

トキの飼育は、野生復帰を目指している。そこが、私にとって魅力を感じるところなのだと思う。今後、私は、人間に飼育されているトキを野生に戻すための取り組みについて、もっとよく調べてみたいと思った。

コウノトリ、この鳥が絶滅危惧種であることが、つい最近のことだ。私は、この鳥のことをほとんど知らなかった。中高生新聞で、コウノトリの記事を見つけ、長いくちばしなどトキと似ているこの鳥に、私は興味を

持った。しかし、母に「学校を四時までには出てきて。電車に乗り遅れると、今日中に着けないかもしれないから。」と言われた。私は、『そんなはずはないだろう』と母の言葉を疑いながらも、掃除を免除してもらって、学校を早めに抜けることにした。

代休でお休みだった父に、母と私は新前橋駅まで十六時ごろ送ってもらい、いよいよ旅が始まった。私は、普段あまり電車に乗る機会がないので、久し振りの電車に、心が躍った。新前橋駅から両毛線で高崎駅まで、そこからは北陸新幹線で東京駅まで、東京からは東海道新幹線で京都駅に向かった。東海道新幹線に乗っているころには、初めてのワクワク感は、すっかりなくなっていた。夕食を食べてから何もすることがなくなり、ただボーっとして時間を持て余していた。期末テストが近づいていることもあり、こんなふうにも何も勉強しないで大丈夫なのか、と不安な気持ちになったりもした。しかし、いざ持参した学習用具を取り出して、学習を始めてみると、新幹線での学習は、いつもよりはかどらず、少し気持ちも

持った。先の新聞で紹介されていた『げんきくん物語

海をわたったコウノトリの大冒険』という本を読み、コウノトリもトキと同じく野生復帰を目指していることを知った。一度は日本から姿を消しているコウノトリだが、兵庫県豊岡市のコウノトリの郷公園で、再び日本の空に羽ばたかせるという事業が行われている。そして、私は、この公園を訪れてみたいと強く願った。この公園が開園二十周年に合わせて、この本の読書感想文を募集していることを知り、書いてみることにした。そして、この感想文がきっかけで、げんきくん物語の作者である山岸哲さんが園長をされていた「兵庫県立コウノトリの郷公園」に行く切符を手に入れることができた。コウノトリに会いたいという夢がかなって、私は本当に嬉しかった。令和元年十一月一日、コウノトリに会うため、兵庫県豊岡市までの旅が始まった。兵庫県と言えば、神戸がまず思い浮かび、都会で、東京からの便もよく、それほど遠くないイメージが私の中にあった。東京から神戸までであれば、実に三時間ほどで着くであろう、と考えてい

悪くなった。中学生は、こんな時にもテストが気になるので、つらいと思う。

京都駅からは、はしだて九号という電車に、福知山駅まで乗った。私は、初めて乗ったこの電車が一番印象に残っている。車体の外側は深く鮮やかな青色で、車内は木でできていた。レトロな電車だ。まるでアニメ映画で見た『銀河鉄道の夜』の電車のように思った。この電車のおかげで、旅のワクワク感が戻ってきた。乗り心地については、ガタガタ揺れて少しいるさかったのですが、少しイマイチと言える。しかし、夜中にこんな素敵な電車に乗れて、銀河鉄道の夜のジョバンニのような気分を味わうことができたので、そんなことは気にならなかった。『また、乗ってみたい』、そう思える電車だった。福知山駅からは、最後の電車、山陰本線に乗り、ようやく豊岡駅に到着した。電車の乗り換えが五回もあるのは面倒だったけれど、色々な電車に乗ることができたのは嬉しかった。

豊岡に到着したのは、二十三日十六分だった。新前橋



駅から旅を始めたのが、十六時頃だったので、約七時間もかかったのだ。私は、母の言葉の意味がやっと分かった。京都から豊岡は、太平洋側から日本海側へと、日本列島を横断するため、たくさん時間がかかったのだ。

豊岡に到着し、ホッとすると、お腹が空いてきた。だから、コンビニで肉まんを買い、ホテルに向かった。一足先に着いていた祖母は、私達を心配していて、まだ起きていた。明日の予定などについて、長いお話が始まりそうだったので、私は、肉まんが冷めてしまわない心配になった。話を早目に切り上げ、部屋に戻り、肉まんをみると、まだ温かくて安心した。母と一緒に食べた肉まんは、とてもおいしかった。

翌日の十一月二日、記念式典の後、二十周年記念シンポジウムに参加した。難しい話が多く、分からないこともあったけれど、興味を持てる話もあった。私達は「天然記念物」という言葉をよく耳にするが、私はその正しい意味を知らなかった。今までは、絶滅の危機にある数の少ない動物のことを指していると思っていた。父も

「カモシカは、増えすぎているから、もう特別天然記念物ではなくなる。」といつも言っていたからだ。しかし、その本当の意味は、我が国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであることが分かった。つまり、「我が国にとって価値のあるもの、大切なもの」ということである。父の意見は、まちがっていたのだ。

そして、なぜ、コウノトリが特別天然記念物に選ばれたのか、私なりに考えてみた。農耕民族である日本人にとって、田んぼという場所は特別で、そこにいる動物も人間にとって関わりの深い大切なものであったからだと思う。

そして、コウノトリの野生復帰には、五十年以上の年月がかかっている。これは、「一羽の鳥を絶滅させた時、元に戻すために、いかに時間とお金とマンパワーが必要かを示している。」人間は、他の生き物を絶滅させるほどの力を持っている。トキもクニマスも人間が絶滅させた生き物だ。そして今、雷鳥など、絶滅にひんしている生き物がたくさんいる。そういう生き物が絶滅寸前に

なっているから、行動するのでは遅いと思う。だから、色々な生き物が置かれている環境を見直していく必要があると思った。

『コウノトリとの約束は果たせたのか』という話もあった。コウノトリとの約束とは、その数が減って、保護のためにケージに入れた時、「順次、野に放そう。コウノトリよ、窮屈だが少しの間しんぼうしてくれ。」とコウノトリに伝えた言葉からきている。つまり、「いつか必ず大空に返してあげる」という約束だ。コウノトリは、現在、野外で百八十五羽(二〇一九年十月二十一日現在)生息している。コウノトリが住みやすい環境を作っている豊岡市だけでなく、島根・鳥取・福井などにも巣を作っている。生息数も生息地も増え、野に放つ約束は果たせたともいえるだろう。しかし、本当の復帰は、日本中どこでも住むことができる環境を作ることだと、私は考える。そのためには、コウノトリとの餌場になる湿地帯を整備したり、農業や化学肥料をできる限り使わない農法を行ったりする必要がある。そのような場所は、

まだあまりないように感じる。だから、コウノトリとの約束はまだ続いている。

翌日、コウノトリの郷公園で、二十周年イベントが開催されていた。そこで、「コウノトリの診療所」を訪れた。そこには、私の夢である職業の獣医師さんがいた。私が出会った初めての獣医師だった。その獣医師さんは、私が質問したことやそれ以外のことまで、詳しくいねいに教えて下さった。

酸素マスクは、コウノトリのくちばしに、合わせて自分で作られていた。長くくちばしに、合うマスクを見せてもらった。また、コウノトリの死因についても説明してもらった。コウノトリは、野外での数が増えると共に、けがをしたり死亡する個体が増えている。電線などに触れると、感電死してしまうこともあるらしい。それを防ぐために、鳥獣除けをコウノトリが感電しやすところを選んでつけているそうだ。だから、電力会社と密接に連絡を取り合っている。電線に巣を作られると、枝が火災の原因になることがあり、電力会社も困るそうだ。巢

を作った時は、電力会社の車で一緒に撤去作業をする。電力会社もコウノトリの野生復帰に協力してくれていることが分かり、地域のみんなで見守っているのだと感じた。そして、何だか温かい気持ちになった。それと同時に、コウノトリと一緒に生活することは大変なこともあるということを理解した。

その他のコウノトリの死因は、防獣ネットに引っかかる、プラスチックを飲み込むなどだそう。また、最近ではトラバサミに足をはさまれて、足をなくす等のけがをするコウノトリがいる。トラバサミの使用は、二〇〇七年から禁止されているにもかかわらず、このようなことが起きるのは、残念なことだと思った。

野生のコウノトリを保護した時の接し方についても教えてもらった。人になれすぎないように心がけているとのことだ。野生動物のお医者さんの齊藤慶輔さんと同じ態度だった。保護中のコウノトリは、バケツを見ると餌だと思い、やってくることもあるが、外に放つとバケツの所に行くことはないらしい。コウノトリなりに、自分

の置かれた環境を理解しているのかな。

今、外来種として悪者扱いされているアメリカザリガニ。しかし、この生き物もコウノトリの餌として活躍していることを知った。今はまだ、昔のようにたくさんドジョウが戻ってきていない。だから、アメリカザリガニがたくさんいてくれて、助かっているようだ。

ジャンボタニシと呼ばれているスクミリンコガイ。これは、父の実家の田んぼで大量発生している。田んぼの稲をねこそぎ食べてしまい、被害が出ているそう。父は、このタニシをコウノトリが食べるかどうか、気にしていた。コウノトリは、それと石との見分けがつかないため、おそらく食べていないようだ。餌だと分かれば食べてくれるかもしれない、と話されていた。早く、氣づいてほしい。そうすれば、コウノトリは田んぼの救世主になれるのにな。

げんきくん物語の主人公げんきくんとその奥さんナナちゃんの間生まれた子供達。ナナちゃんが鉄砲で撃たれ死んでしまい、げんきくん一人でその子育てをするの

は難しいと判断され、その子供達は郷公園の人達に保護された。その保護されたヒナを育てた飼育員さんにも会うことができた。「ヒナは、とてもかわいかった。」と何度も話されていた。また、ヒナは、人間が近づくとふせてしまう。だから、白い服を身につけて、コウノトリのパペットを口ばしの代わりにして鳴らすと、起き上がって餌を食べてくれたという話を本で読んで知っていたけれど、直接聞くことができてうれしかった。この話をしている時の飼育員さんの表情が優しくて、とてもヒナを大事に育てられていたことが伝わってきた。ヒナの写真まで見せてくれて、まるで自慢の子供の話をしている父親のようだった。

また、そのヒナの中のげんちゃんは、約八十四センチメートルもある発泡ゴムをへびかウナギと誤って飲み込み、死んでしまった。その飼育員さんは、げんちゃんは、小さい頃から身体が弱く、心配だったと話されていた。首が少し曲がっていたため、獣医さんとリハビリをしたそう。放鳥後も様子を見ていて、いる場所が分かった

から、見に行こうと思っていたら死んでしまったのだ。

その話をされる時、とても悲しそうだった。

私は、もしかしたらげんちゃんは、餌が取れなかったから発泡ゴムを食べてしまったのかもしれないと思った。そして、もし、げんちゃんが外に放たれず、人間に守られて生活していたら、今でも生きていたかもしれない、そうも感じた。しかし、私は、ずっとせまいケージで飼われ続けるより、少しの間だったけれど大空で羽ばたきことができたげんちゃんは、幸せだったと思う。

しかしながら、プラスチックごみが動物の命を奪っていることについては、私達人間が改善しなければいけない問題だと思った。私がプラスチックごみについて調べたところ、リング状のプラスチックごみが口にはさまったために死亡してしまったアザラシ、漁網に絡んで溺れ死んだシロカツオドリ、死ななくてもプラスチックが身体に絡まり奇形化してしまった亀など、たくさん動物達が傷つけられたり、死んだりしていた。

防獣ネット、電線での感電、プラスチックごみ、農業

や化学肥料、トラバサミなどのわな等、コウノトリの命をおびやかすものが、多数存在することが分かった。これらは、すべて人間が作り出したものだ。コウノトリや他の生き物より人間の便利な生活が大事だと言う人もいると思う。しかし、私は、コウノトリが住みやすい世界は、人間にとっても住みやすい世界であると思う。なぜなら、人間は便利な生活を手に入れたけれど、失ったものもあると思うからだ。豊かな森林やきれいな水と空気などがあげられる。そして今、私達人間は、地球温暖化という問題に直面している。この問題を解決する方法は、コウノトリが住みやすい世界をつくることとつながっている、私は思う。いつか、私が住んでいる街、日本中に、コウノトリが戻り、住みつくといいな。

私は、豊岡市を去る時、とてもいい町で、「帰りたくない。」と思った。ほんの二日間だけだったけれど、郷公園の人を初め町の人の優しさを感じ、豊かな自然にふれることができた。もし私がコウノトリだったら、営巣地にこの町を選ぶだろう。

た。その尾瀬で私が会いたかった動物は、「おこじょ」だ。そして「ヤマネ。」なぜなら、この二種の動物を見つけると、ビジターセンターで発見証明書をもらえるからだ。私は、母と一緒に尾瀬を訪れるたびに探した。兄と父は、大きな声で話したり、足音がうるさかったりするので、「おこじょが出てこないから静かにして。」などと何度も注意した。

小二の時は、ヤマネ発見証明書をもらった。しかし、私は、ヤマネを見ていない。兄がもらっているのをうらやましそうに見ていたら、受付の人が私にも出してくれたのだ。兄は、私に「ニセ証明書」などと言ってきた。しかし、実は、兄もヤマネの姿を見ていないのだ。やぶの中で何かが動いたのに気づいた兄は、「あれは、ヤマネにちがいない。」と断言していた。兄は、ヤマネらしき姿を見たらしいが、その気配は、近くにいた私には全く感じられなかった。今となっては、確かめようがないが、私は、あれはヤマネではなかった気がする。しかし、我が家には、ニセ証明書かもしれないものが二枚大切に保

最後に、少しおまけの話を書くことにする。

私は、父に動物との出会いをだしに何度も山登りへ連れ出されている。

初めに、臥竜山。平成二十四年九月、私が六歳の時、登った山だ。その山の中には、「アカシヨウビン」が渡って来ると言われている。その鳥の写真を見た時、私は一目惚れした。全身がオレンジ色で、頑丈そうな太い口ばし。そして、何より丸くて黒いつぶらな瞳に一番心ひかれた。私は、登山中ずっと、アカシヨウビンを探していた。一度、きれいな鳥の鳴き声を聞いて、心がおどった。しかし、その鳴き声の鳥は、アカシヨウビンではなく、青色の鳥で、がっかりしたのを覚えていて。青い鳥もそれなりにかわいかったので、少しはうれしかった。結局、アカシヨウビンに会うことはできなかった。今、アカシヨウビンについて調べてみると、東南アジアから渡ってくる野鳥だけれど、なかなか会えない「幻の鳥」と言われていることが分かった。

次に、尾瀬。小学生の間、私は、そこを毎年訪れてい

管されている。

小三の時は、おこじょ発見証明書がほしかった。おこじょは肉食ではあるが、身体が小さくてかわいらしい姿の動物だ。『おこじょのユキ』という絵本を読んでから、ますますおこじょに会いたくなった。ビジターセンターで、尾瀬沼ヒュッテでおこじょを見たという情報をもらうと、そこまで行き、小雨の中そのまわりを探した。木道の下までのぞき、熱心に探したが見つからず、とてもがっかりしたことが何度もあった。会えずに尾瀬をさる時、「おこじょさん、また来るね。」とさよならのあいさつをしていた。今でもそのような気持ちはあるが、素直に言葉に出すことはできない。だから、その頃の自分に戻りたいと思う時がある。

今まで、私が出会った動物について書いてきた。本当は、他にもたくさんあるのだが。

そして、私の側にいるのは、飼いうさぎの「未来」。未来は、私と一緒にいて、幸せかどうか分からない。私は、未来が好きだけれど、未来の気持ちを読み取れない

時がある。

「アル（獣・動物）の言葉を聞いて。」「わからない言葉がわかるうとする。その気持ちだが、きっと道をひらくから。」。これは、『獣の奏者』の主人公エリンが息子ジェシに、最後に言った言葉で、私は、この言葉が好きだ。これからも動物と関わる時に、心の底に置いておきたいと思っている。

まだ、私と動物との出会いは、続いていくことだろう。

## 小学生の部

### 受賞作品

#### 大賞 「二平方メートルの世界で」

前田 海音 北海道 伏見小学校 三年

佳作 「救える命は必ず救う」

大切な命を守るために働く人たち

田村 萌梨 鳥取県 鹿野学園 四年

「信念を繋ぐもの」

日高 実生 東京都 聖学院小学校 四年

### 選考委員特別賞

那須正幹賞 「アゲハチヨウは

どこからやってきたのか？」

遠藤 光之佑 埼玉県 西武学園文理小学校 二年

最相葉月賞 「つばめのピト」

井平 夏鈴 兵庫県 波賀小学校 四年

リリー賞 「ミャンマーで知ったトイレの違い」

増山 優雨 埼玉県 西武学園文理小学校 三年

### 学校団体賞

LC A 国際小学校  
寝屋川市立第五小学校  
福岡雙葉小学校

### 最終候補作品

(氏名五十音順)

「私達ができること」

伊東 杞紅 神奈川県 六年

「手話と私の生きがい」

大谷 奏風 東京都 四年

「マリアと九才の夏」

権田 百春 東京都 四年

「戦争の話を聞いた」

酒井 開都 東京都 五年

「ジャイアンの背中」

白井 こはる 神奈川県 二年

「庭のライバル」

竹内 里歩 アメリカ 四年

「告白」

中原レオン 獅童 ドイツ 四年

「賢大はかしこく育つのか」

林 尚輝 福岡県 四年

「森の緑の妖精アオミオカタニシ」

林 美希 千葉県 四年

「唯一無二の母から学んだこと」

逸見 春佳 埼玉県 六年

## 中学生の部

### 受賞作品

#### 大賞 「広島のある女子中学生の

昭和二十年八月六日からの足跡」

酒井 淳一郎 東京都 京華中学校 一年

佳作 「見えない光のその向こう」

(全盲の岩本光弘さんと私の1年間)

―病氣と闘う私自身への応援歌―

座間 耀永 東京都 青山学院中等部 一年

「四国鉄道紀行 西条・松山・宇和島編」

田中 惣真 徳島県 徳島文理中学校 三年

### 選考委員特別賞

那須正幹賞 「かるたの世界に魅せられて」

田村 綾梨 鳥取県 鹿野学園 七年

最相葉月賞 「今を生きる ―トラウマからの脱出―」

熊田 和真 大阪府 北陵中学校 二年

リリー賞 「出会い」

新池谷 悠 群馬県 第一中学校 一年

### 学校団体賞

(五十音順)

お茶の水女子大学附属中学校

鳥取大学附属中学校

文化学園大学杉並中学校

### 最終候補作品

(氏名五十音順)

「棚からぼたもちく全国優勝への道のり」

新 海人 鳥取県 一年

「ありきたりで当たり前な私の日常」

金本 菜々実 広島県 二年

「身近になった病院・私のとりとめのない想い」

三具 渚彩 東京都 一年

「大人にとって小さなこと、子供にとって大きなこと」

杉浦 千咲 大阪府 三年

「夢へ」

中條 朋香 東京都 一年

「私の左足が教えてくれたこと」

中野 咲羅 鳥取県 一年

「孫の使命くやまんばを語り継ぐ」

前田 彩葉 香川県 一年

「トレイルランニング大会 六十五キロメートルへの挑戦」

若菜 晴 静岡県 二年

「白球を追いかけた六年」

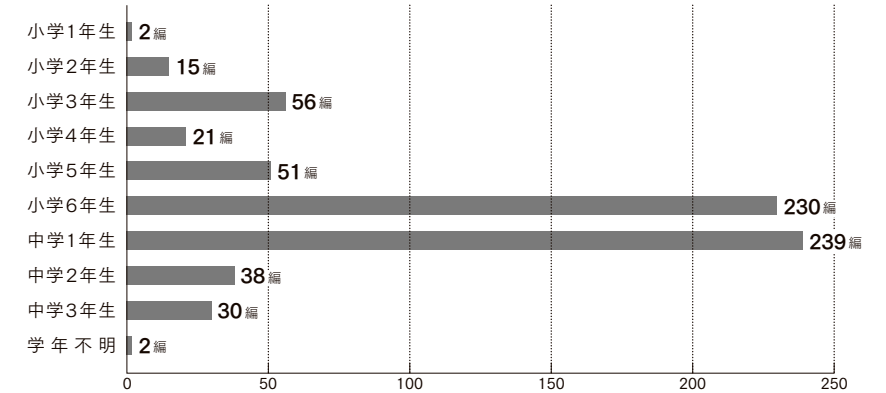
ペンちゃん 京都府 一年

# 令和元年 子どもノンフィクション文学賞応募結果

◎応募受付数 **684**編

小学生**375**編(昨年232編)／中学生**309**編(昨年512編)

## ◎応募者学年別構成



## ◎応募者地域別構成

| 地域  | 応募数  |      |      | 九州内訳(再掲) | 応募数 |     |     |
|-----|------|------|------|----------|-----|-----|-----|
|     | 小学生  | 中学生  | 合計   |          | 小学生 | 中学生 | 合計  |
| 北海道 | 2編   | 4編   | 6編   | 福岡県(森町)  | 36編 | 12編 | 48編 |
| 東北  | 2編   | 0編   | 2編   | 市内       | 6編  | 8編  | 14編 |
| 関東  | 106編 | 101編 | 207編 | 佐賀県      | 0編  | 0編  | 0編  |
| 信越  | 1編   | 1編   | 2編   | 長崎県      | 0編  | 0編  | 0編  |
| 北陸  | 0編   | 0編   | 0編   | 熊本県      | 0編  | 14編 | 14編 |
| 東海  | 2編   | 4編   | 6編   | 大分県      | 0編  | 0編  | 0編  |
| 近畿  | 204編 | 19編  | 223編 | 宮崎県      | 0編  | 0編  | 0編  |
| 中国  | 2編   | 136編 | 138編 | 鹿児島県     | 0編  | 0編  | 0編  |
| 四国  | 1編   | 10編  | 11編  | 沖縄県      | 10編 | 0編  | 10編 |
| 九州  | 52編  | 34編  | 86編  |          |     |     |     |
| 海外  | 3編   | 0編   | 3編   |          |     |     |     |
| 合計  | 375編 | 309編 | 684編 | 合計       | 52編 | 34編 | 86編 |

## 事前選考委員

(五十音順)

相本 倫子 石橋 聡 伊藤 和人 大森 定義 幸野 英明 中野 まどか

# 第11回子どもノンフィクション文学賞 受賞作品集

二〇二〇年三月三十一日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三・一〇八・一三 北九州市小倉北区城内四一  
電話 ○九三・五七一・五〇五  
FAX ○九三・五七一・一五二五

印刷・製本 株式会社ハーティブレーン  
登録番号 北九州市印刷登録番号 1909162A号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。